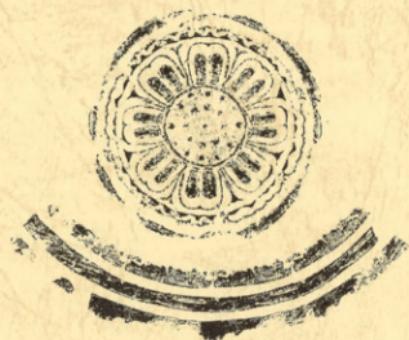


大原町埋蔵文化財発掘調査報告 2

今岡廃寺



2002

岡山県大原町教育委員会

題 簽 大原町長 福田義明

表紙拓影 今岡廃寺出土
複弁八弁蓮華文軒丸瓦・三重弧文軒平瓦（推定復元）

大原町埋蔵文化財発掘調査報告 2

今岡廃寺

町営大原町今岡地区圃場
整備事業に伴う発掘調査

2002

岡山県大原町教育委員会



今岡廃寺周辺航空写真（中央赤丸：今岡宝鏡印塔所在地）

卷頭図版 2



1. 今岡庵寺 複弁八弁蓮華文軒丸瓦



2. 今岡遺跡 大形柱穴列 P2 (北から)

序

大原町は岡山県の北東部に位置し、剣聖宮本武蔵の生誕地として知られる自然と歴史遺産が豊かな町であります。

古くから因幡と播磨を結ぶ交通の要衝として重視された場所であり、因幡街道の大原本陣、脇本陣のほか、宿場町の面影を残す町並みが現存し、さらに竹山城、小原山王山城など戦国時代の大規模な山城も町内に点在しております。

大原町では、現代の因幡街道といえる鳥取県東北部と兵庫県西部とを結ぶ第3セクター鉄道智頭急行の開業や、中国横断自動車道姫路鳥取線の整備など新たな交通網の整備にあわせ、町内に数多く残る歴史遺産や自然を生かしつつ、ケアガーデン武蔵の里の建設をはじめとして、宮本武蔵顕彰武蔵武道館の建設など、剣聖宮本武蔵を核とした整備により、地域振興を推進しているところです。また、平成17年岡山国体剣道少年の部の開催を契機として、さらに大原町をアピールすべく、まちづくりに取り組んでおります。

ここに報告書を作成した今岡廃寺は、圃場整備事業の工事計画策定にあたり予定地内に今岡廃寺の推定寺域が一部含まれていたことや、工事に先立つ土質調査の際偶然に柱材が掘り出されたことから、発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、当初の予想を上回る重要遺構・遺物が発掘されたため、教育委員会ではこの遺構・遺物の重要性に鑑み、一部を記録保存するものの、ほぼ全域にわたり埋蔵保存することとしました。開発と文化財保護の両立は必ずしも容易なことではありませんでしたが、関係機関の協力を得て重要な文化財を遺すことができました。

今後本書が、学術研究のため、また地域の歴史や文化財の保護保存研究に広く活用されることを希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書作成にあたられた岡山県古代吉備文化財センター、大原町文化財保護委員会、現地での作業に参加していただいた地元有志の方々や関係の諸機関に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成14年3月

大原町教育委員会

教育長 平田精一

例　　言

- 1 本書は、大原町建設課を主幹課とする大原町今岡地区圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した、今岡廃寺の発掘調査報告書である。
- 2 今岡廃寺は岡山県英田郡大原町今岡96-2ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、大原町教育委員会から委託を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員佐藤寛介が担当し、平成10年度に確認調査、平成11年度に全面調査を実施した。調査面積は、確認調査が190m²、全面調査が420m²である。
- 4 本書の作成は、平成12年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて佐藤が行った。
- 5 本書に掲載した遺物のうち、R1・R3・R5・R22は今岡在住の福田博司氏が保管されているもので、本書の作成に伴い実測・写真撮影をさせていただいた。記して深謝の意を表す次第である。
- 6 発掘調査・報告書作成にあたり、センター職員各位の協力を得た。特に、中野雅美・米田克彦の両氏には調査遂行にあたり多大な御支援をいただいた。また、遺物写真については江尻泰幸氏の助力を得た。記して深謝の意を表す次第である。
- 7 特殊な遺物の鑑定や、自然科学分野における同定については、次の機関・諸氏に依頼し、有益な成果をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

・墨書きの軽読と赤外線写真撮影	渡辺晃宏(奈良文化財研究所)
・木製品の年輪年代測定	光谷拓次(奈良文化財研究所)
・木製品、木材の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
・鉄滓の肉眼鑑定	大澤正己(たらら研究会)
・石材鑑定	妹尾 譲(倉敷芸術科学大学)
- 8 今岡廃寺の発掘調査成果については、「岡山県埋蔵文化財報告」29・30(岡山県教育委員会 1999・2000年)、「所報古備」第28号(岡山県古代吉備文化財センター 2000年)でその概要を報告しているが、その後の整理・検討により変更が生じた部分もあり、本書をもって正報告とする。
- 9 本書に収載した遺物および図面・写真などの記録は、当面の間、岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)に保管するが、将来的に大原町教育委員会(英田郡大原町古町1709)に移管する予定である。

凡　例

- 1 本書に記載した高度は海拔高である。方位は真北で、一部磁北を併記した。調査地周辺の磁北線偏差は西偏 $6^{\circ} 30'$ を測る。
- 2 本書に記載したグリッドは平面直角座標系Vによるものである。
- 3 本書に記載した各遺構・遺物の縮尺は次のとおり統一したが、例外については縮尺を明記した。
遺構：1/80
遺物：土器・土製品・瓦（1/4）　金属製品（1/3 ただし銭貨は1/2）　木製品（1/6）
- 4 本書に掲載したトレンチおよび遺構実測図のうち、土層断面のみ掲載したものについては、方位を次のように略して記載している。
東：E (East)　西：W (West)　南：S (South)　北：N (North)
- 5 遺物については種類毎に通し番号を付けている。このうち、土器については番号のみを記載し、土器以外のものについては、種類または材質を示す次の略号を番号の前に付して記載している。
瓦：R (Roof tile)　土製品：C (Cray)　金属器：M (Metal)　木製品：W (Wood)
- 6 土器実測図のうち、断面黒塗りのものは須恵器および陶磁器を示し、白抜きのものは弥生土器・上飾器などの素焼きの上器を示している。
- 7 土器実測図のうち、中軸線の左右が白抜きのものは小破片のため復元口徑に不確実性があるものである。また、全般に小片のものが多いため、傾きについても不確実性があることを断っておく。
- 8 土器観察表の色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修 1988年版）に準拠した。
- 9 土器観察票の胎土は、それに含まれる砂礫の粒径を示しており、2.0mm以上を砾、2.0~1.0mmを粗砂、1.0~0.5mmを細砂、水流粘土のような場合を精良としている。
- 10 遺物の説明にあたり、壺形土器、甕形土器などを壺、甕のように略して記載している。
- 11 遺物の説明のうち、古代の土器および瓦の分類・部分名称などについては、基本的に奈良文化財研究所の用例に準拠している。
- 12 本書に用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分・世紀を併用している。このうち7世紀代については、前半を古墳時代後期、後半を白鳳時代としている。
- 13 本書の第3図は国土地理院発行の1/50,000地形図「佐用」を複製し、遺跡の分布を加筆したものである。遺跡の位置と名称は、「岡山県遺跡地図」第5分冊（岡山県教育委員会 1977年）および、「兵庫県遺跡地図」（兵庫県教育委員会 2000年）を基本に、近年の調査成果や、平成6・13年度に岡山県教育委員会が実施した分布調査成果を盛り込み作成した。

本文目次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と体制	1
第1節 遺跡の名称と研究史	1
第2節 発掘調査および報告書作成の経緯と体制	2
第2章 地理的歴史的環境	5
第3章 発掘調査の概要	9
第1節 調査対象地の概要	9
第2節 確認調査の概要	12
第3節 全面調査の概要	22
第4章 今岡廃寺の瓦について	35
第5章 まとめ	57

写真図版

報告書抄録

卷頭図版目次

卷頭図版1 今岡廃寺周辺航空写真

卷頭図版2 1. 今岡廃寺出土 極井八弁蓮華文軒丸瓦 2. 今岡廃寺大形柱穴P2(北から)

挿図目次

第1図 大原町今岡所在宝篋印塔(1/20)	1	第13図 1区検出遺構(1/80)・出土遺物(1/4)	25
第2図 大原町の位置(1/2,000,000)と 調査地周辺の主要遺跡(1/50,000)	7	第14図 1区包含層出土遺物(1/4)	26
第3図 地図調査対象地周辺の地形と発掘 発掘調査位置(1/3,500)	10	第15図 杖穴列7(1/80)	27
第4図 今岡廃寺推定寺域周辺の地割・字名 と測量位置(1/1,200)	11	第16図 溝10~13周辺遺構全体図(1/80)	28
第5図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4)①	13	第17図 溝10出土遺物(1/4)	29
第6図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4・1/3)②	14	第18図 溝11出土遺物(1/4)	29
第7図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4・1/3)③	15	第19図 溝12出土遺物(1/4)	29
第8図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4・1/2)④	16	第20図 溝13出土遺物(1/4)	29
第9図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4)⑤	17	第21図 杖穴出土遺物(1/4)	29
第10図 確認調査トレンチ(1/80)⑥	18	第22図 通結構部出土地点周辺遺構全体図(1/80)	30
第11図 1区全体図(1/200)	23・24	第23図 2区包含層出土遺物(1/4)	31
第12図 2区全体図(1/200)	23・24	第24図 2区出土金属製品・木製品(1/3・1/6)	32
		第25図 今岡廃寺出土軒丸瓦(1/4)	37
		第26図 軒丸瓦II型式の兩部特徴	38
		第27図 今岡廃寺出土軒半瓦①(1/4)	39

第28図	今岡庵寺出土軒平瓦②(1/4)	41
第29図	軒平瓦Ⅱ型式A～Cの製作工程	42
第30図	今岡庵寺出土丸瓦①(1/4)	44
第31図	今岡庵寺出土丸瓦③(1/4)	45
第32図	今岡庵寺出土平瓦①(1/4)	47
第33図	今岡庵寺出土平瓦②(1/4)	48
第34図	今岡庵寺出土平瓦③(1/4)	51
第35図	今岡庵寺出土平瓦④(1/4)	52
第36図	今岡庵寺出土上堵(1/4)	53
第37図	今岡庵寺出土軒瓦年試案(1/8)	55
第38図	軒瓦と丸瓦・半瓦の対応関係	56
第39図	調査地周辺の道路指定範囲(1/7,000)	57
第40図	岡山県内の奈良時代建立柱建物の規模	59
第41図	今岡庵寺推定寺域および推定伽藍配置 (1/2,000)	59
第42図	古代美作道と周辺の古代寺院(1/1,000,000)	60

表 目 次

第1表	確認調査成果一覧	21
第2表	土器觀察表	33・34
第3表	軒瓦出土地点・数量一覧	35
第4表	今岡庵寺出土軒丸瓦一覧	37
第5表	今岡庵寺出土軒平瓦一覧	39
第6表	瓦出土量一覧	59

図版目次

図版1－1.	調査地遠景①(西から)	
－ 2.	調査地遠景②(南西から)	
－ 3.	今岡庵寺遺定寺域周辺(南東から)	
－ 4.	今岡所在室印記塔	
図版2－1.	T－6(南から)	
－ 2.	T－8(西から)	
－ 3.	T－10(南西から)	
－ 4.	T－11(北西から)	
－ 5.	T－15(北から)	
－ 6.	T－16(西から)	
－ 7.	T－21b(北西から)	
－ 8.	T－21c(南から)	
図版3－1.	1A・B区(京から)	
－ 2.	1C・D・E区(西から)	
－ 3.	柱穴列4(南から)	
－ 4.	柱穴列5(南から)	
－ 5.	柱穴列6(北から)	
－ 6.	土壤7(南西から)	
図版4－1.	大形柱穴列P1上層断面(北から)	
－ 2.	大形柱穴列P1完掘状況(北から)	
－ 3.	大形柱穴列P1石被出状況(北から)	
－ 4.	大形柱穴列P2上層断面(南から)	
－ 5.	大形柱穴列P2完掘断面(北から)	
－ 6.	大形柱穴列P2楕石被出状況(北から)	
－ 7.	大形柱穴列(西から)	
－ 8.	大形柱穴列(北から)	
図版5－1.	2A・B区(西から)	
－ 2.	2C区(西から)	
－ 3.	2D・E区(西から)	
－ 4.	2A・B・C区(東から)	
図版6－1.	柱穴列7(西から)	
－ 2.	溝11・12(西から)	
－ 3.	机天板W1出土状況(東から)	
図版7－1.	2D区上層断面(西から)	
－ 2.	2E区通縫部材出土状況(東から)	
－ 3.	2E区低位部の状況(西から)	
図版8－1.	軒丸瓦I型式(1/3)	
－ 2.	軒丸瓦II型式(1/3)	
－ 3.	II型式文様	
－ 4.	軒丸瓦III型式(1/3)	
－ 5.	軒丸瓦IV型式(1/3)	
図版9－1.	軒平瓦I型式A～D(1/3)	
－ 2.	軒平瓦II型式A～D(1/3)	
図版10－1.	軒平瓦II型式の製作技法①(R14)	
－ 2.	軒平瓦II型式の製作技法②(R13)	
－ 3.	軒平瓦III型式(1/2)	
－ 4.	軒平瓦V型式(1/3)	
－ 5.	軒平瓦IV型式(1/3)	
－ 6.	堵(1/3)	
図版11－1.	丸瓦I類(1/6)	
－ 2.	丸瓦II類の製作技法	
－ 3.	半瓦I類(1/6)	
－ 4.	平瓦I類の製作技法	
－ 5.	平瓦II・III類 呼吸孔(1/2)	
図版12－1.	黒膏土器「謙」(1/3)	
－ 2.	「謙」の赤外線写真	
－ 3.	瓦塔(1/3)	
－ 4.	圓面鏡(1/3)	
－ 5.	木製品・柱材・連結部材(1/6・1/8・1/12)	

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と体制

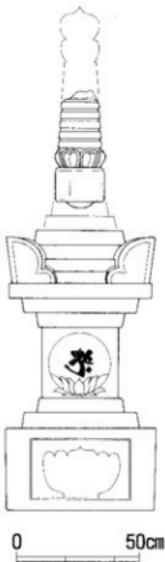
第1節 遺跡の名称と研究史

今岡廃寺は、英田郡大原町今岡に所在する古代寺院跡で、地元では長大寺という名称で親しまれている。今回の発掘調査にあたり、遺跡名を長大寺ではなく今岡廃寺とした経緯を、研究史と共に記しておきたい。

今岡廃寺が長大寺として最初に文献に登場するのは、文化12年(1815年)刊『東作誌』で、「昔長大寺と云ふ寺あり今田になる 宝篋印塔一基有礎石今に多し古瓦多く出る」と記されている。以後、長大寺という名称で周知されることとなり、昭和3年(1928年)刊『英田郡史考』では、「宝篋印塔字神子山に有り 官有地宮地を長大寺と称し仏教盛なる時代の遺跡で軒塔は鎌倉時代のものを寛保二年壬戌十一月十七日宮本住平尾某の再建したものなり 此地に塔婆の礎石及寺院礎石ありたるも先年堤防工事の際破壊し使用したりと云う 此地一帯に室町以前奈良朝に至る屋根瓦多くを土中より出す福田教太郎管理す」と、当時の知見が記されている。この長大寺について、往時の状況を窺うことのできる史料は現存しないが、文禄元年(1592年)卒去した竹山城二代城主・新免左衛門尉宗貞の法名が「長代寺殿松栄春大居士」であることや、今岡廃寺推定寺域東方の丘陵上に「長代寺」・「壹山」といった字があることから(第4図)、中世段階に長大(代)寺と号する寺院がこの付近に存在していたのは確かなようである。

さて、今岡廃寺を考古学的な見地から最初に取り上げたのは伊藤晃である。伊藤は、美作の古代寺院出土軒瓦を集成し、今岡廃寺出土軒瓦を紹介すると共にその創建が白鳳期にあることを明らかにした。これ以降、長大寺とともに今岡廃寺という名称が併用されるようになる。また、濱哲夫は、美作の白鳳寺院について詳述し、今岡廃寺と出土遺物についても詳しい解説を加えている。そして、亀田修一は、今岡廃寺出土複弁八弁蓮華文軒丸瓦を法隆寺式軒丸瓦と認定し、文様構成を検討するとともに、その伝播経路・古墳中輦部との関係について考察している。この他、古墳の古代寺院についてまとめた各論考の中で、英田郡六寺の一つとして、さらに県内唯一の法隆寺式軒丸瓦を持つ寺院として、その重要性はつとに指摘されている。

今回の発掘調査にあたり、遺跡名について関係機関と協議を重ねた結果、長大寺の來歴が史料上は中世までしか遡りえないことや、近年の考古学界では実体のはっきりしない長大寺より、地名を冠した今岡廃寺という名称が定着していることを考慮し、今後は今岡廃寺を正式な遺跡名とすることとした。ただし、現行の『岡山県遺跡地図』では長大寺として登録されていることや、すでに長大寺を遺



第1図
大原町今岡(第4図■)
所在 宝篋印塔(1/20)

跡名として使用している論考も多いこと、そして地元住民に親しまれている長大寺の名称を尊重するという立場から、「長大寺」を別称として併用することで、周知を図っていくことを申し合せた。

なお、『東作誌』・『英田郡史考』に記載された宝篋印塔は、今岡廃寺推定寺域内(第4図)に現存し、伊藤が紹介した瓦と共に大原町重要文化財に指定されている。この宝篋印塔は、相輪の上半と笠の上部、隅脚の一部が欠損し、現状では『英田郡史考』に記された再建の相輪が載せられ、本来の相輪は傍らに置かれている。第1図は造立時の状態を復元した実測図で、推定全高208cm・最大幅62cmを測り、石材は花崗岩と考えられる。隅脚突起はわずかに外傾し、基礎の四辺には格状間、塔身の四辺には月輪と金剛界五仏を表す梵字が刻印されている。これらの特徴は、近隣に所在する1349年造立の沢田宝篋印塔、1356年造立の栗野宝篋印塔と共に、今岡宝篋印塔もおそらく同一の石工集団によって、南北朝期初頭に造立されたものと考えられる。

以上、今岡廃寺の研究史と名称変更の経緯について記した。既往の研究は、わずかな文献と採集遺物によるもので、寺院そのものの実態はほとんど判明していなかった。圃場整備事業に伴うものとはいえ、今回の発掘調査により、今岡廃寺に初めて考古学的な調査のメスが入ることになったのである。

註

- 1) 正本兵馬輝雄「東作誌」 1815年
- 2) 横口松玲「英田郡史考」 1928年
- 3) 伊藤 晃「猪原廃寺跡緊急発掘調査概報」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」13 岡山県教育委員会 1976年
- 4) 渡 肇大「美作の白鳳寺院」 津山郷上博物館 1992年
- 5) 危田修・「中國・四国地方の法隆寺式軒瓦」「大平の宇佐」 岡府大学付属博物館・宇佐市教育委員会 1996年
- 6) 伊藤 晃「初期寺院と瓦」「古墳の考古学」 福武書店 1987年
出宮徳尚「古代寺院址」「岡山県の考古学」 吉川弘文館 1987年
- 7) 駒井正明「古代吉備における軒瓦の様相」「考古学研究」37-3 考古学研究会 1990年
- 危田修・「瀬戸内沿岸地域の古代寺院と瓦」「古代工様と交流」6 名著出版 1995年

第2節 発掘調査および報告書作成の経緯と体制

今回、今岡廃寺の発掘調査を実施する契機となった町営圃場整備事業は、今岡地区の農地13.8haを対象に、平成10年度から3か年計画で圃場整備を行うものである(第3図)。工事計画策定にあたり、予定地内に今岡廃寺の推定寺域が一部含まれていたことや、工事に先立つ土質調査の際、偶然に柱材が掘り出されたことから(写真1)、大原町教育委員会より文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知(平成10年1月29日付け、教文理第1300号)が岡山県教育委員会に提出された。

これを受けて、圃場整備予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、岡山県教育庁文化課・大原町建設課・大原町教育委員会による協議が行われた。その結果、予定地内全域を対象に早急に確認調査を実施し、埋蔵文化財の状況を把握した上で、埋蔵文化財の保存に支障のないよう圃場整備計画を変更することを申し合せた。調査は、大原町教育委員会に埋蔵文化財専門職員が配置されていないことから、岡山県古代吉備文化財センターより職員の派遣を受け、実施することとなった。

こうして、確認調査を平成10年4月20日から5月21日まで実施した(写真2)。確認調査の成果を受け、平成10年6月以降、数回にわたり関係機関による協議が行われた結果、圃場整備事業は道構面および遺物包含層に掘削が及ばないよう盛土による設計変更を行った上で実施することとなった。これにより、圃場整備予定地内の埋蔵文化財は、ほぼ全域にわたり保存されることが決定したが、排

水溝が設置される2か所(第4図1区・2区)については、設計上、造構面以下まで掘削が及ぶことが避けられないため、平成11年度に全面調査を行い、記録保存とする旨を申し合せた。

こうして、排水溝設置部分の全面調査を、平成11年10月18日から12月6日まで実施した(写真3)。その内容については第3章第2節に記載しているが、当初の予想を上回る重要遺構・遺物が出土したため、改めて設計変更の協議を行った結果、この部分についても遺構保存の措置がなされたことを明記しておく。

また、圃場整備工事中、水路の付け替えなど、地下の造構に影響が及ぶ可能性がある作業の際には、岡山県教育府文化課職員による立会調査が適宜行われたが、特に顯著な遺構は確認されず、数点の遺物が採集されたに留まっている。

報告書作成については、平成11年度末から大原町教育委員会と協議を重ね、平成12年度に遺物整理を行い、平成13年度に刊行することとなった。遺物整理・報告書刊行に係る経費については大原町教育委員会が負担し、実際の作業は調査担当者が岡山県古代吉備文化財センターで実施した。

普及啓発活動としては、平成10年7月23日に大原大学講座で今岡廃寺についての講演を行ったほか、全面調査実施中の平成11年11月25日・28日に、現地説明会を開催した(写真4・5)。

最後に、圃場整備事業と埋蔵文化財保護の両立は平易な道程ではなかった。今回、全面保存ができたのは、偏に地元地権者・関係機関の御理解と御協力の賜物であり、改めて謝意を表する次第である。

調査・報告書作成体制

平成10年度

大原町教育委員会

教育長	小潤 善治
課長	小林 泰二

岡山県教育府文化課

課長	高田 明香
課長代理	西山 猛
参考事	正岡 雄夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本 和男

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原 克人
次長	大村 俊臣

<総務課>

課長	小倉 昇
----	------

課長補佐(係長事務取扱)	安西 正則
--------------	-------

主査	山本 茂輔
----	-------

<調査第一課>

課長	高畠 知功
----	-------

課長補佐(係長事務取扱)	中野 雅美
--------------	-------

文化財保護主事	佐藤 寛介(調査担当)
---------	-------------

平成11年度

大原町教育委員会

教育長	小潤 善治
課長	浅尾 善郎

岡山県教育府文化課

課長	松井 英治
課長代理	佐々部和生
参考事	正岡 雄夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本 和男

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原 克人
----	-------

次長	大村 俊臣
----	-------

<総務課>

課長	小倉 昇
----	------

課長補佐(係長事務取扱)	安西 正則
--------------	-------

主査	山本 茂輔
----	-------

<調査第一課>

課長	高畠 知功
----	-------

課長補佐(係長事務取扱)	中野 雅美
--------------	-------

文化財保護主事	佐藤 寛介(調査担当)
---------	-------------

平成12年度

大原町教育委員会

教育長	小潤 善治
-----	-------

教育課長	松本 正道
------	-------

社会教育係長	穂福 一郎
--------	-------

岡山県教育府文化課

課長	松井 英治
----	-------

課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
---------------	-------

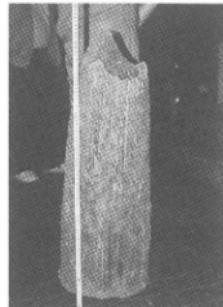


写真1

土質調査時に出土した柱材

岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 隆夫
次長	能登原 巧
<秘務課>	
課長	小倉 畏
課長補佐（係長事務取扱）	安西 正則
主査	山本 勝輔
<調査第・課>	
課長	高畠 知功

課長袖佐（係長事務取扱）

文化財保護主事	中野 雅美
平成13年度	佐藤 寛介（整理担当）
大原町教育委員会	
教育長	小瀬 善治（～9月）
教育課長	平田 精一（10月～）
社会教育係長	清水 敏美
	有岡 忠彦

発掘調査・整理作業員名簿

発掘調査・報告書作成にあたり、次の方々に御協力いただきました。記して深謝の意を表します。

安東昭二・大杉金子・大杉いその・大杉虎一・大杉保男・岡本知右・岡本弘之・小坂田徳男・川元みち子・
川元道代・齊藤直子・瀧元敏子・中村盛孝・中田勝子・中田知一・中田晴雄・中田 豊・瀧元五六・春名都乃・
春名 勝・日野佳子・瀧元さわ代・福田 篤・福田文男・福田俊夫・福原公一・藤田夏野・船曳良希・本田よし子・
森木米子（50音順、敬称略）

報告書作成協力者

発掘調査・報告書作成にあたり、次の諸氏から有益な御教示を賜りました。記して深謝の意を表します。

大原町文化財保護委員・葛原克人・伊藤 晃・高畠知功・湊 哲夫・安川義史・岡本寛久・江見正己・山中敏史・
平井泰男・危田修一・花谷 清・亀山行雄・平岡正宏・松尾佳子（順不同、敬称略）



写真2 確認調査の様子



写真3 全面調査の様子（2区）



写真4 大原大学講座での報告会



写真5 現地説明会の開催

第2章 地理的歴史的環境

今岡廃寺が所在する岡山県英田郡大原町は、剣聖宮本武蔵の生誕地として知られる縁豊かな山間の町である。岡山県の北東部に位置し、東は県境を挟んで兵庫県佐用郡佐用町に接し、北接する西粟倉村を介して鳥取県境にも近距離にある。また、中国山地育梁部の南にあたることから、町域には標高724mのツヅラ山以下、300~500m級の山々が連なり、町面積約55万m²のうち、実に75%が山林によって占められている。これらの山塊を東西に分断するように、町域のはば中央を岡山県三大河川の一つ、吉井川の支流である吉野川が南流している。さらに、樹枝状に展開する谷間からは、宮本川・後山川・川上川などの小河川が奔出し、吉野川へと注ぎ込んでいる。

平野部は、これらの中小河川沿いに形成された谷底平野を主体とし、地形に制約されて狭長なものが多い中で、吉野川流域沿いには胃袋状を呈するやや広まった平野が散在的に認められる。特に、大原町中心部の古町周辺と、今岡廃寺の所在する今岡周辺には、それぞれ長さ1km・幅500mほどの平野が形成されており、吉野川流域の中でも比較的まとまった小盆地状の地形をなしている。

第2図は今岡廃寺が所在する大原町南部を中心に、南接する作東町、東接する兵庫県佐用町の遺跡分布を図示したもので、吉野川流域沿いに遺跡が集中している状況を看取することができる。以下、大原町の歴史と遺跡について、時代順にまとめることとする。

大原町では、今後発見されると予想されるが、旧石器時代から縄文時代中期までの遺構・遺物は確認されていない。現状では、川戸所在の川戸古墳群の調査で出土した縄文時代後期の土器が最古の遺物で、晩期については川戸古墳群および今回の調査で突帯文土器が出土したに留まっている。このため、当該期の様相について具体的に述べることはできないが、縄文時代後期以降、吉野川流域沿いを中心とし小規模な集落が点在的に営まれている状況が窺える。

弥生時代については、町内で20数か所の遺物散布地が確認されている。このうち、前期の遺物は確認されておらず、中期から後期にかけて集落が増大・拡散していくようである。これらの分布をみると、吉野川沿いの丘陵縁辺部と、平野部との比高50~90mを測る、野形・桂坪・赤田一帯の丘陵頂部に集中しており、こうした対照的な立地がこの地域における弥生集落の一つの特徴といえるだろう。発掘調査が行われたものとしては、先述の川戸古墳群で弥生時代中期を中心とする多量の土器に加え、石斧未成品・銅鏃形土製品など注目すべき遺物が出土している。また、古町所在の池が⁵³平遺跡では開墾に伴い弥生時代後期の土器が多量に採集されている。しかし、現状では当該期の遺構が全く確認されておらず、集落や墳墓の実体解明は、今後の調査に委ねられている。

古墳時代については、集落の様相は不明瞭ながら、詳細な分布調査により約80基の古墳が確認されている。その分布をみると、弥生時代の集落同様、吉野川流域の丘陵縁辺部と山頂に集中している状況が窺える。前~中期古墳としては、箱式石棺を主体部とする山の後2号墳、山頂に立地し墳丘が低平な赤田古墳群・桂坪古墳群などがある。このうち、桂坪12号墳は、全長35mを測る町内唯一の前方後円墳で、当該期の首長墳と考えられる。横穴式石室を主体部とする後期古墳は、40基ほど確認されており、その多くは直径10m程の小規模な円墳である。このうち特筆されるのが、発掘調査が実施された川戸古墳群である。特に、2号墳は6世紀末~7世紀初頭に築造された、全長12.3mの横穴式石

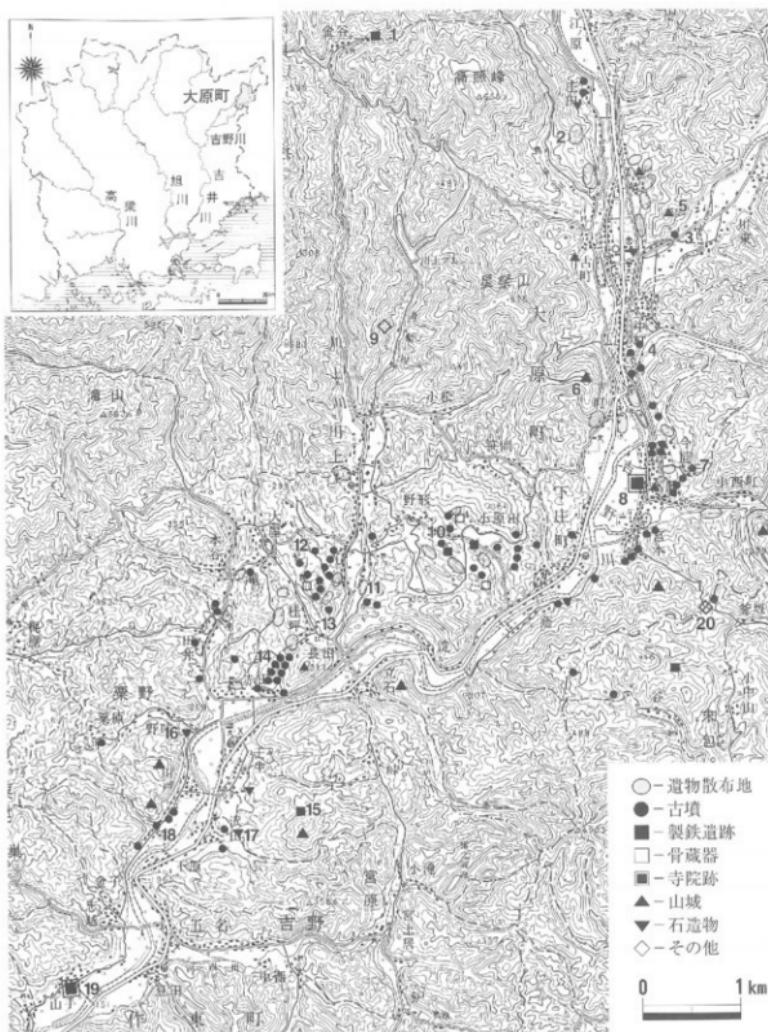
室をもつ大方方墳で、金銅装馬具一式・銀象嵌鏡を持つ大刀などの秀逸な副葬品から、大和政権と密接な関係をもっていた首長の奥つ城と考えられている。しかし、川戸2号墳以降の首長墳は、今のところ確認されておらず、今岡廃寺を建立した氏族の系譜と力量を、古墳の様相から窺うことは困難である。また、この地域の後期古墳の特色として、美作で盛行する陶棺の分布が希薄な一方で、播磨の影響を受けた組合式石棺が釜の口1号墳・築出し古墳で採用されていることが挙げられる。

7世紀後半の白鳳時代に古墳は分割され、後の英田郡の前身となる備前国英多郡(評)が成立する。この時期、英多郡内には北から今岡廃寺・大海廃寺・橋原廃寺・江見廃寺・竹田廃寺・上居廃寺が次々に建立される。地方において、1郡に6寺が建立される例は全国的に珍しく、この地域が畿内中央政権との密接な繋がりを有していたことの証左となっている。このうち、今岡廃寺を除く5寺では川原寺式軒丸瓦の系譜を引く複弁八脊蓮華文軒丸瓦が採用され、建立氏族間の有機的な関係が認められるのに対し、今岡廃寺では法隆寺式軒丸瓦の系譜を引く複弁八脊蓮華文軒丸瓦が採用されており、一定の独自性を窺わせる。発掘調査が実施されたものとしては、今岡廃寺から吉野川沿いに9kmほど南下した作東町山手に所在する大海廃寺がある。調査の結果、法起寺式伽藍配置をもつ主要伽藍、南北130m・東西108mの寺域が確認され、出土した軒瓦の検討から、7世紀中葉に創建された英多郡最古の寺院であることが判明した。

奈良時代初頭の和銅六年(713年)、備前国から英多郡はか6郡が割かれ、美作国が新立される。大原町城は、北から英多郡大原郷・讃甘郷・大野郷・古野郷・栗井郷に比定され、このうち今岡廃寺は讃甘郷に所在する。今回の発掘調査では、奈良～平安時代の遺構・遺物を大量に確認し、今岡廃寺一帯が、英多郡における拠点の一つであることが明らかとなった。また、大原町内では、一地域としてはかなり多い8個体の骨蔵器が発見されており、地方における新たな葬制受容の様相を窺わせるものとして興味深い。

この地域の経済基盤を考える上で欠かせないものに鉄生産がある。特に、古代において美作国は製鉄の貢納国であり、平城宮跡からは「英多里鍛」、「美作国英多郡大野里鉄一連」の木簡が出土している。このうち、後者に記された大野里は大原町川上に比定されている。また、「日本靈異記」に、孝謙天皇の代(749～758年)に英多郡の官営鉄山で起きた落盤事故で生き埋めになった役夫が、仏教信仰により奇跡的に救出されたとする説話があるが、この官営鉄山について、大原町川上に所在する金谷鉱山を比定する注目すべき見解が淡川夫により提唱されている。大原町内では、現在のところ製鉄遺跡は明確でないが、先述の大野里に比定される大原町野形では、須恵器片とともに鉄滓が採取されている。発掘調査によるものとしては、先述の川戸2号墳から総量6.9kgの製錬滓・羽口が出土しており、付近に製鉄・鍛冶遺跡が存在するものと思われる。また、壬生所在のナイケ遺跡では、横口付製炭窯が検出されている。さらに、英多郡衛に比定される作東町高本遺跡では、奈良～平安時代の製鉄炉が検出されていることや、隣接する兵庫県佐用郡佐用町でも古代の製鉄遺跡が多数分布していることから、今後の調査により、英多郡における鉄生産の実体が明らかになると思われる。

また、この地域は山陰と山陽を結ぶ交通路として重要な位置を占めており、古代には播磨と因幡を結ぶ因幡道が整備される。因幡道は、現在の兵庫県佐用郡佐用町から釜坂峠を越えて大原町宮本に入り、今岡廃寺西側を通過後、吉野川に沿ってそのまま北上し、志戸坂峠を越えて鳥取県へ至るルートが想定されている。承徳二年(1098年)、因幡守の平時範は、この因幡道を通って任国へ赴き、都への帰途の際、美作国佐奈保で一泊している。この「佐奈保」は、まさに今岡廃寺が所在する英多郡諸廿



- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 金谷鉱山 | 2. 池が平遺跡 | 3. 築出し古墳 | 4. 山の後2号墳 | 5. 小原山山城跡 |
| 6. 竹山城跡 | 7. 釜の口1号墳 | 8. 今岡廃寺 | 9. 真船遺跡 | 10. 野形古墳群 |
| 11. 美土路遺跡 | 12. 桂坪古墳群 | 13. 桂坪12号墳 | 14. 赤田古墳群 | 15. ナイゲ遺跡 |
| 16. 栗野宝篋印塔 | 17. 沢田宝篋印塔 | 18. 川戸古墳群 | 19. 大海廃寺 | 20. 釜坂峠 |

第2図 大原町の位置(1/2,000,000)と調査地周辺の主要遺跡(1/50,000)

郷のことであり、時範は今岡庵寺に宿泊したのかもしれない。

平安時代末～鎌倉時代にかけて、前代の郷名を引き継いで大原保・讚甘莊・大野莊・吉野保が成立する。南北朝の動乱期、美作国では播磨の赤松氏と伯耆の山名氏が権力を争い、大原町域は赤松氏が支配権を握った。戦国期には、在地武士の新免氏が台頭し、北の尼子氏・西の毛利氏と攻防を繰り返した。こうした動乱の時代を物語る山城は町内10数か所で確認されており、赤松氏が拠点とした小原山王山城、新免氏が拠点とした竹山城などの大規模城郭のほか、中小の城郭が吉野川流域沿いに点在している。中世遺跡の発掘調査としては、川上所在の美上路遺跡で、13世紀を中心とする集落遺跡が確認されている。同じく川上所在の真船遺跡では、砂防工事中に五鉛杵・五鉛錘など法具一式が計22点出土しており、密教法具の埋納事例として注目される。また、1349年造立の沢田宝篋印塔、1356年造立の栗野宝篋印塔といった石塔の優品が現存している。

近世に入り、大原町域は津山藩領を経て幕府直轄領となる。因幡鳥取藩主の参勤交代路として、因幡街道が整備され、大原町古町には小原宿が設けられた。現在も、本陣・脇本陣を中心に伝統的な町並みが保存されており、往時の脈わいを今に伝えている。

このように、大原町は古来より陰陽を結ぶ交通の要衝として、重要な役割を果たしてきた。現代においても、兵庫県と鳥取県を結ぶ智頭急行、中国横断道姫路～鳥取線が町域を縱貫し、その歴史的役割を担い続けている。

参考文献

- 吉田 昌「美作・備前・備中の国と郡」「岡山県史」第3巻古代Ⅱ 岡山県 1989年
 中野安夫「中世備作地方の社会構造」「岡山県史」第4巻中長Ⅰ 岡山県 1990年
 渡 菲夫「美作の白鳳寺院」「津山郷土博物館」1992年
 宇庭区雅「川上古墳群」 大原町教育委員会 1996年
 内藤季義「因幡往来」「岡山県歴史の遺跡調査報告書」第5集 岡山県教育委員会 1993年
 大原町文化財保護委員会「大原町の文化財」(一)・(二) 大原町教育委員会 1990・1993年
 「岡山縣遺跡地図」第5分冊 岡山県教育委員会 1977年
 「兵庫県遺跡地図」 兵庫県教育委員会 2000年
 「十地分類基本調査 古墳・佐用」 岡山県 1990年
 「岡山県の地名」 平凡社 1988年

註

- 栗野克己・福山正綱「山の後2号墳発掘調査報告」「岡山県埋蔵文化財報告」8 岡山県教育委員会 1978年
- 岡田 哲「豪出し古墳」「岡山県埋蔵文化財報告」15 岡山県教育委員会 1985年
 平井 騰「岡山県大原町豪出し古墳の小形石棺」「古代吉備研究会」1989年
- 大原町が所在する英田郡は、古代は英多郡、中世以降英田郡と表記される。本書では、古代の行政域を示す場合は英多郡、現在の行政域を示す場合は英田郡と表記することとする。
- 正岡龍太・岡本寛久「大原城跡緊急発掘調査報告書」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」26 岡山県教育委員会 1978年
 岡本寛久「大原城古墳緊急発掘調査報告書」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」33 岡山県教育委員会 1979年
 現在、大原町教育委員会で保管。すべて豪彌形の須恵器で、8～9世紀代のものと考えられる。
- 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報」12 1978年
- 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報」21 1989年
- 渡 菲夫「美作国英多郡の就山について」「博物勉だより」№25 津山郷土博物館 2000年
- 危山行雄「千牛・ナイゲ跡」「岡山県埋蔵文化財報告」24 岡山県教育委員会 1994年
- 井上 弘ほか「高木遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」8 岡山県教育委員会 1975年
- 佐佐雅彦「播磨の鉄」「風土記の考古学」2 同成社 1994年
- 山懸康平「美上路跡はか」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」64 1987年
- 2002年3月現在、用地買収中。大原町内では、今後に大原インターが建設予定。

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査対象地の概要

今回、今岡廃寺の発掘調査を実施する契機となった圃場整備事業は、今岡地区の耕地13.8haを対象とするもので、西を吉野川、東を丘陵に面された、南北約550m・東西約300mの範囲にあたる。

対象地内の地形は、209~210m付近の等高線を境に、大きく上下2段に分かれている。このうち、今岡廃寺が所在する上段は、東から西に向かって緩やかに傾斜しており、特に今岡廃寺推定寺域一帯が平坦となっている。上段と下段の境は、対象地南半では不明瞭だが、北半では1~2mの比高差があり、崖状を呈している。下段については、等高線が複雑に入り組み、吉野川の旧河道痕跡と考えられる細長い微高地と窪地を看取ることができる。

対象地内の地割りと小字をみると、上段の今岡宝篋印塔を中心とする約100m四方の範囲に矩形の地割りが顯著に認められ、さらに「塔ノ元」・「塔ノ下」・「大戸」・「神子田」といった寺院関連の小字が集中している。この一画以外では、耕地化以前の自然地形が反映された、不定形な地割りが主体となっている。下段については、地割りからも旧河道の痕跡が確認でき、「川原田」といった小字もあることから、かつては吉野川の氾濫原であった土地が、近世以降に耕地化されたものと考えられる。また、調査に先立ち対象地一帯を踏査した結果、上段では今岡廃寺推定寺域を中心にはほぼ全域で遺物が散布している状況を確認したが、下段では全く認められなかった。

これらの事前調査により、圃場整備対象地のうち、上段を中心に遺跡の存在が確実視される一方で、下段についてはその可能性が極めて低いことが明らかとなった。今岡廃寺については、従来からの指摘通り、今岡宝篋印塔を中心とする方一町の寺域をもつ可能性が高いことを改めて確認した。現在、推定寺域内には建物基壇を想定できるような地形の高まりや、「英田郡史考」に記載のある、昭和初期の堤防工事で破壊された礎石などは認められない。そのため、伽藍位置を地表観察から特定することは困難であるが、推定寺域中心部の字「塔ノ元」にあるL字形の水田畔について、伽藍痕跡の可能性があるとの指摘を受けたことから、これを念頭において調査を実施した。

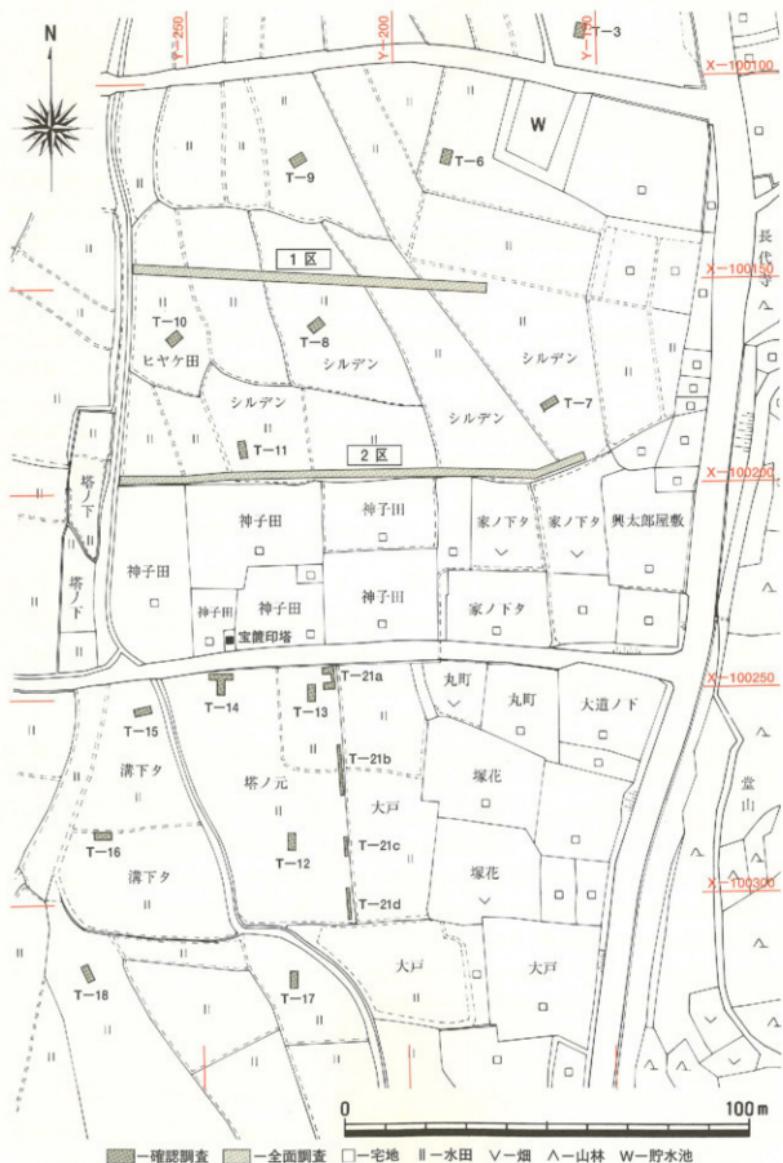
なお、第2章で記したように、圃場整備対象地内のはば中央を古代因幡道が通っていた可能性が高く、対象地南半の等高線208mのラインから、今岡廃寺推定寺域の西辺に沿って認められる幅10mほどの細長い地割りがその痕跡と考えられる。古代因幡道は、承応二年(1653年)、因幡往来の整備に伴い、圃場整備対象地の東側丘陵裾部を通るルートに付け替えられ、これが町道として現在も踏襲されている。また、その東側丘陵地には「長代寺」・「堂山」といった小字があり、山中には五輪塔の残片なども散見されることから、文献に登場する長大寺はこの丘陵地に存在した可能性が考えられる。

註

- 1) 伊藤 光「福原廃寺跡緊急発掘調査概報」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」13 岡山県教育委員会 1976年
- 2) 岡山理科大学 龟田修一氏による指摘
- 3) 内藤季義「因幡往来」「岡山県歴史の透視調査報告書」第5集 岡山県教育委員会 1993年



第3図 地図整備対象地周辺の地形と発掘調査位置(1/3,500)



第4図 今岡廃寺推定寺域周辺の地割り・字名と調査位置(1/1,200)

第2節 確認調査の概要

1. 確認調査の方針と方法

確認調査は、第1章に記載した通り、速やかに完了させことが要請された。このため、圃場整備対象地のうち、遺跡の存在が確実視される上段部分を重点的に調査することとし、下段の等高線208m以下の範囲については、遺跡の広がる可能性が極めて低いため、調査対象から省いた。また、調査の性格上、寺域規模や御藍位置の特定よりも、遺跡全体の広がりや遺存状況の把握に主眼を置くこととした。こうした調査方針に基づき、 2×4 mのトレーニングを20か所(T-1~20)、幅50cm・長さ5~12mのトレーニングを4か所(T-21a~d)に設定し、確認調査を実施した。各トレーニングの基本層位は、上から表土(現代水田層)→1~2面の旧耕作土(中世~近世の水田層)→遺物包含層→基盤層(遺構検出面)となっている。調査では、重機により表土および旧耕作土を除去し、包含層以下は人力で掘り下げた。また、検出した遺構の掘り下げは、遺跡保護のため必要最小限に留めた。なお、確認調査成果を第1表でまとめているので、併せて参照いただきたい。出土遺物については、そのほとんどが微細な細片となっていたが、可能な限り実測・掲載に努めた。このうち、瓦については全面調査で出土したものと合わせ、第4章で報告する。

2. 推定寺域以北の調査(第5~7図)

今岡庵寺推定寺域の北側に設定したT-1~11では、古代~中世の遺構を検出した。また、各トレーニングからは、縄文時代晩期~中世の遺物が出土しており、当該期の集落遺跡が全域に広がっていることを確認した。特に、8世紀代の遺構・遺物の密度が高く、今岡庵寺との有機的な関係が想定される。なお、T-1・2とT-4・5の間には小河川が西流しており、遺跡地を南北に分断している。

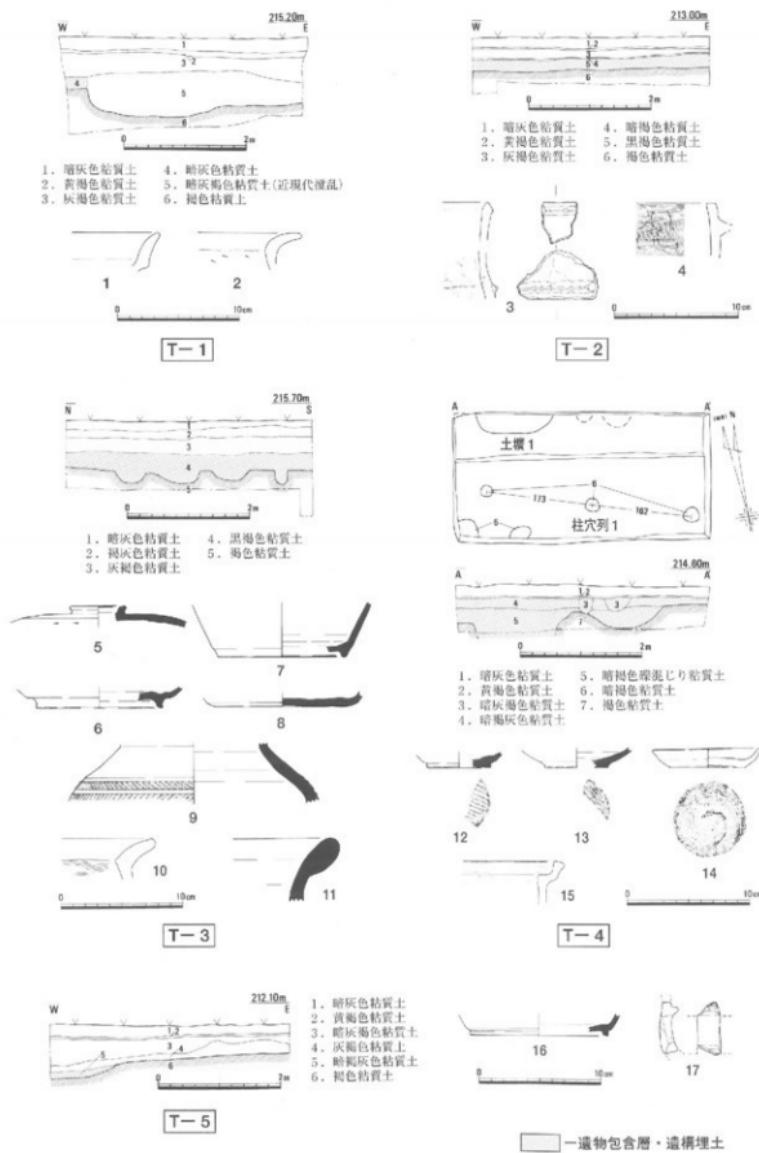
T-1・2 遺構は認められなかったが、包含層から若干の出土遺物をみた。このうち、3は口縁部と胴部に刻目突帯を巡らす深鉢で、突帯および刻目が小さく痕跡的であることから、縄文時代晩期終末のものと考えられる。

T-3 トレーニング断面で、柱穴・上層を確認した。土層のうち、4層が遺物包含層および遺構埋土であるが、基盤層である5層をかなり掘り下げた段階でそのことを認識したため、平面では遺構を検出できていない。包含層からは古代~中世の遺物が出土しているが、主体となるのは8~9世紀代のもので、遺構も当該期のものと考えられる。

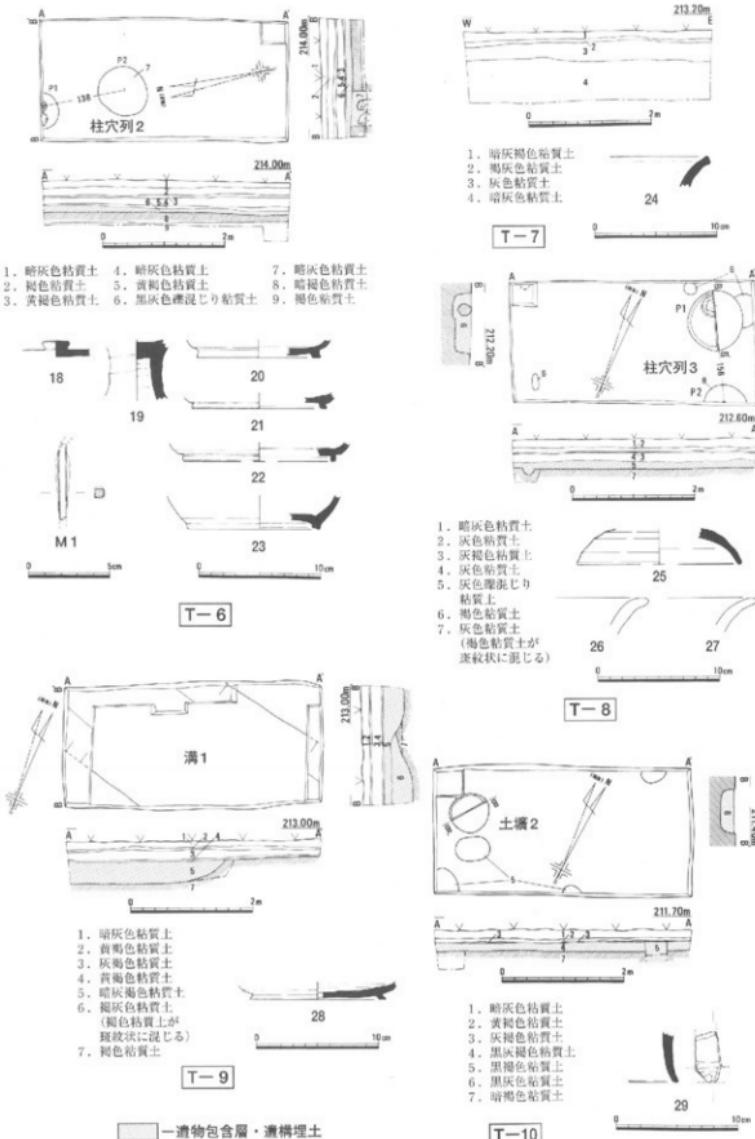
T-4 柱穴列1、土壤1のほか、4基の柱穴を確認した。いずれも掘り下げていないので時期は特定できないが、包含層出土遺物からおおむね12~13世紀代のものと考えられる。

T-5 遺構は認められなかったが、包含層を確認し、古代~中世を中心とする遺物が少量出土した。このうち、17は円面鏡の脚台部である。

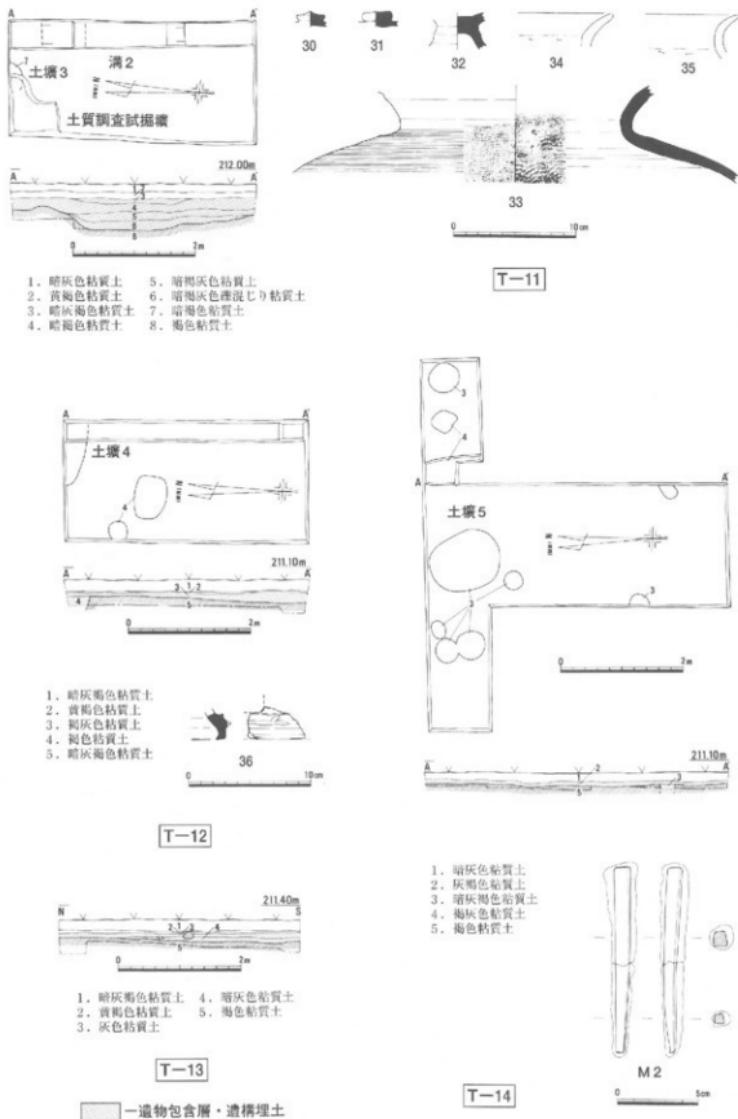
T-6 掘立柱建物の一部と推測される柱穴列2を検出した。柱穴掘方の直径は、P1で56cm、P2で80cmを測り、P1の掘方内には直径16cmの柱材が遺存していた。主軸はN-1°-Wで、方位を意識した配置となっている。いずれも掘り下げていないので時期は特定できないが、包含層出土遺物から、8~9世紀代の遺構と考えられる。また、M1は鉄釘である。



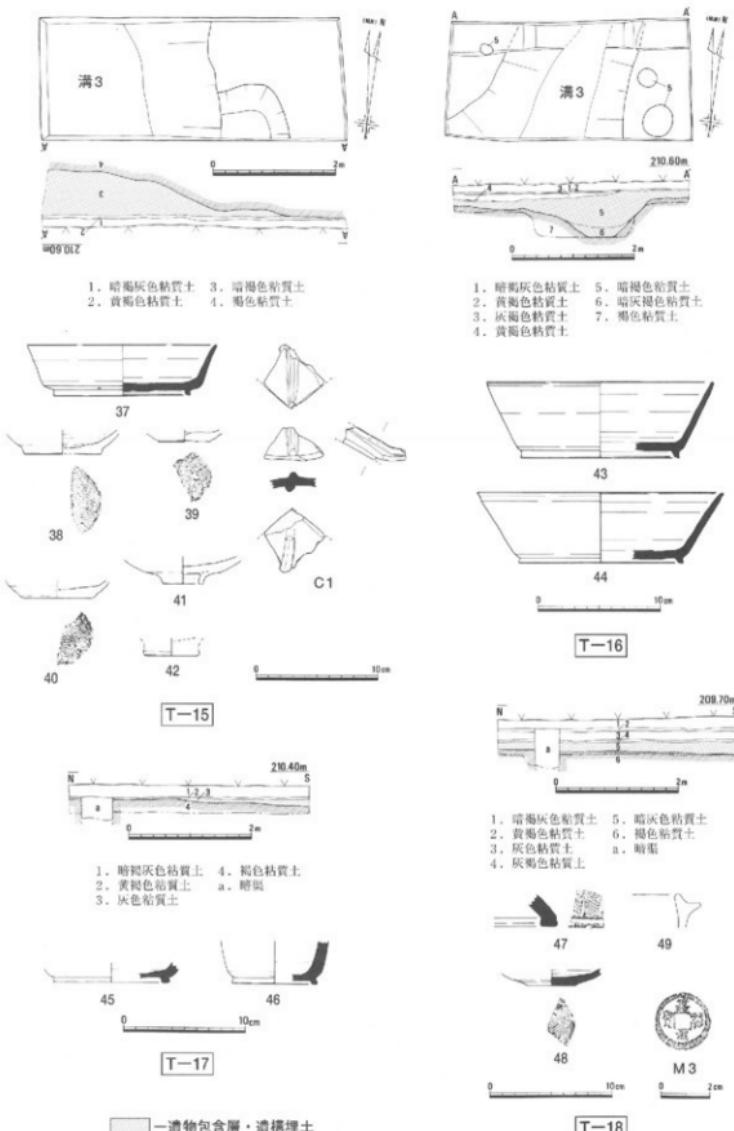
第5図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4) ①



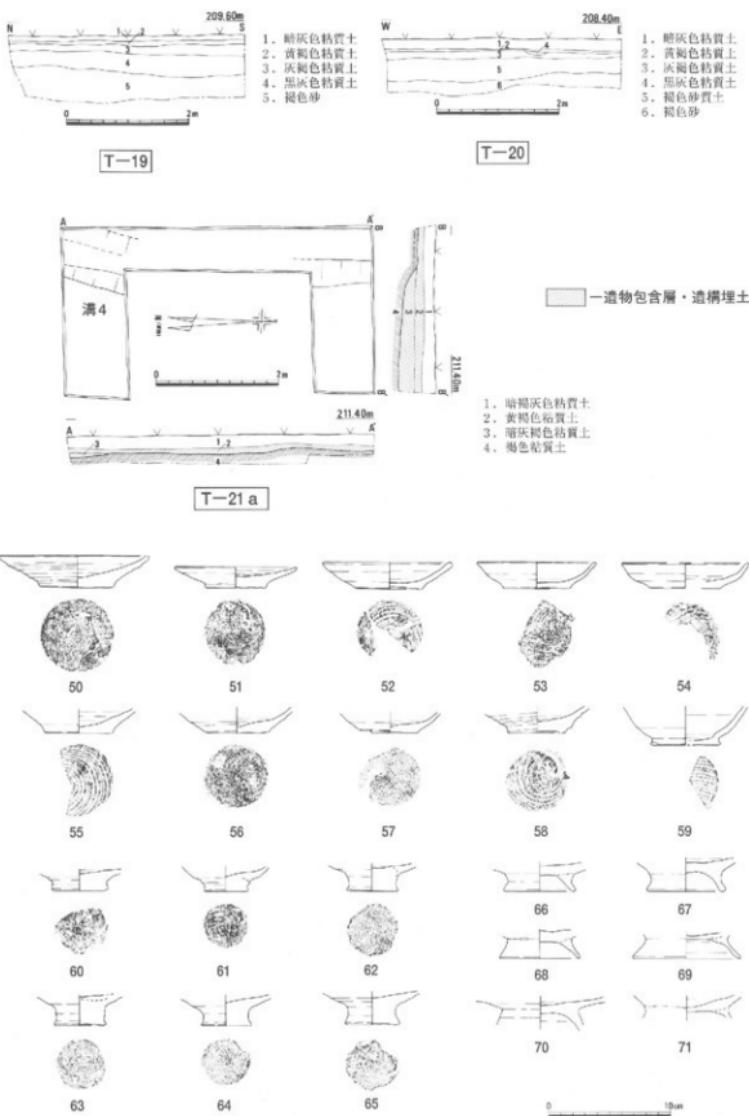
第6図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4・1/3) ②



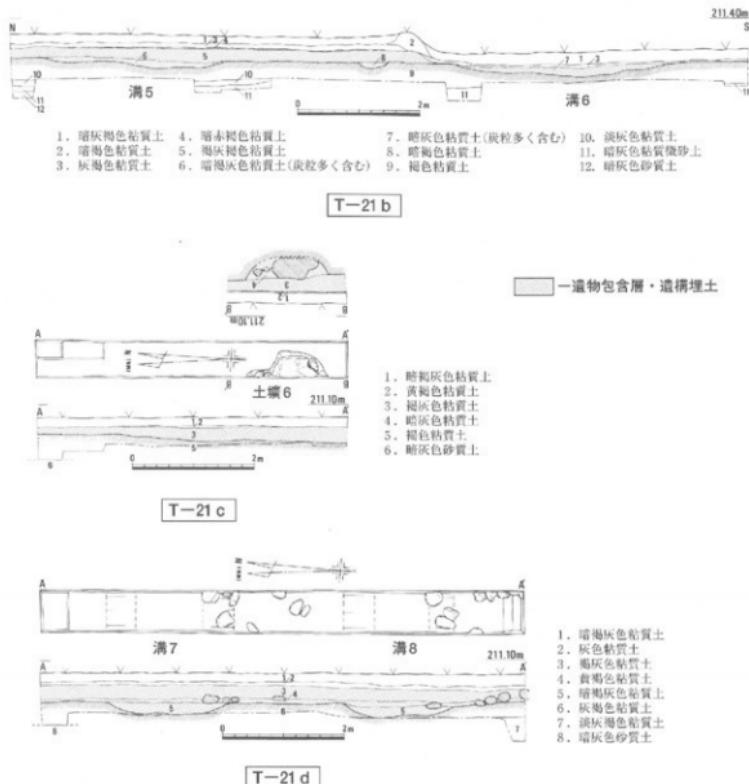
第7図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4・1/3) ③



第8図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4・1/2) ④



第9図 確認調査トレンチ(1/80)・出土遺物(1/4) ⑤



第10図 確認調査トレンチ(1/80) ⑥

T-7 表土以下、グライ化した粘質土が厚く堆積しており、G.L - 120cmまで掘り下げたが、基盤層を確認できなかった。後に実施した全面調査で、この一帯は湿地状を呈する低位部であったことが判明した。

T-8 挖立柱建物の一部と考えられる柱穴列3を検出した。柱穴掘方の直径は、P1が80~100cm、P2が80cm前後と想定される。P1の底面には柱痕跡と考えられる直径30cmの窪みがあるが、埋土はブロック状になっており、柱材は抜き取られたものと考えられる。主軸はN - 30° - Wで、方位に合わせたものとはなっていない。遺物が出土していないため時期は特定できないが、周囲の状況から8~9世紀代の遺構である可能性が高い。また、包含層からは7世紀前半の須恵器杯蓋25が出土しており、当該期の遺構も周辺に存在すると予想される。

T-9 トレンチ中央で溝1を検出した。溝1は、検出面で幅240cm、深さ26cmを測り、断形は底面

が平坦なU字形を呈す。主軸はN-80°-Wで、等高線に直交して掘削されていることから、用水路の可能性が考えられるが、埋土に水流の痕跡は認められない。時期は、出土した須恵器杯28から、7世紀末～8世紀前半と考えられる。

T-10 土壙2のほか、柱穴4基を検出した。いずれも出土遺物がなく、時期は特定できないが、包含層出土遺物から古代の遺構と考えられる。出土遺物のうち、29は円面鏡の脚台部である。

T-11 第1章第2節で記した、地質調査時に柱材が出土した位置に設定したもので、調査の結果、この柱材が埋まっていたと考えられる土壙3と、その南側で溝2を検出した。土壙3は、地質調査時に半壊していて正確な規模は分からぬが、直径80cm程度と推測される。溝2は東西に主軸をもち、幅約220cm、検出面からの深さ約20cmを測る。位置的には、全面調査2区で検出した溝12の延長線上にあることから、今岡庵寺北辺を区画する築地の雨落溝である可能性も考えられるが、規模や埋土はかなり異なり、同一の遺構であるかどうか確証は得られなかった。また、土壙3が掘立柱建物あるいは棚列の一部と予想されることから、そちらに伴う雨落溝である可能性も考えられる。出土遺物から時期は7～8世紀代と考えられる。

3. 推定寺域内の調査（第7～10図）

推定寺域内に設定したT-12～16・T-21a～dでは、伽藍そのものを確認することはできなかつたが、伽藍配置や寺域規模を検討する上で重要な成果が得られた。このうち、T-12～14は寺域中心部、T-15・16は寺域西辺部、T-21a～dは推定寺域中軸線上に設定した。調査の結果、各トレチの表土下で、厚さ10～30cmの包含層を確認した。包含層には、瓦を中心に古代～中世の遺物が含まれるが、いずれも細片で摩耗が激しく、二次的な堆積状況を示している。そのため、この包含層は、後世の削平と攪乱の結果、形成されたものと考えられる。包含層の下層には、基盤層となる褐(灰)色粘質土が堆積しており、この上面で遺構検出を行った。

T-12～14 土壙・柱穴・溝を検出した。いずれも掘り下げていないので、時期は特定できないが、包含層出土遺物や埋土の状況から、中世以前の遺構と考えられる。このうち、T-12で検出した土壙3、T-14で検出した土壙4は、直径1m～1m20cmを測り、掘立柱建物の柱穴である可能性が考えられる。出土遺物のうち、36は円面鏡、M2は鉄釘である。また、T-14から椀形鍛冶滓が1点出土している。

T-15・16 寺域西辺を区画すると考えられる溝3を検出した。溝3は、T-15で東肩口、T-16で両肩口を検出したことから、T-15・16を結ぶN-17°-Eを主軸とすると考えられる。上幅はT-16の最短部で約2mを測るが、T-15で検出した東肩口を反転復元すると最低でも4m以上となり、部分的に広狭があるようである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ60～70cmを測る。底面の標高は209.38～45mで、南から北にやや傾斜しているようである。埋土は單一の粘質土で、築地層の崩壊土が流れ込んだ状況や、水が流れていた痕跡は認められなかった。埋土中～下層からは、瓦を中心とする遺物が多量に出土している。特にT-15からは、188kgもの瓦が出土しており、破片が大きく摩耗も少ないことから、付近に瓦葺きの建造物が存在していた可能性が高い。その場合、推定寺域内におけるT-15の位置から、西門が想定される。ただし、瓦は倒壊したそのままの状況で出土している訳ではなく、東側から二次的に流れ込んだような状況で出土している。溝3が完全に埋没したのは、瓦と混在して出土した38～42の土師器から、11世紀前半以降と考えられる。出土遺物のうち、特

筆されるものとして、県内12例目となる瓦塔C1がある。これは屋蓋部分の小片で、上面には降棟、下面には尾垂木が表現されている。また、炉壁・製鍊滓・椀形鍛冶滓・鉄塊系遺物が1点づつ出土しており、付近で製鉄・鍛冶作業が行われた可能性がある。なお、T-16では、溝3の東に2基、西に1基の柱穴を検出しており、溝3に伴う遺構である可能性も考えられる。

T-21a 推定寺域のはば中央に位置し、調査の結果、南北方向に主軸をもつ溝4を検出した。溝4は、トレンチ北端で幅約1mを測るが、南端では肩口が西へと拡幅し正確な規模は分からず。ただし、T-21aの西1mに位置するT-13では検出していないことから、最大で3m程度と考えられる。検出面からの深さは約20cmで、断面は浅いU字形を呈する。埋土中から、推定で50個体程度の土師器杯・椀がまとめて出土しており、このうち図化できた22点を掲載している。溝4出土土師器は、底部形態から、A類：平底(50～59)、B類：柱状高台(60～65)、C類：貼付高台(66～71)の3種類に大きく分けられる。A・B類の底部はすべて糸切りである。A類には体部が直線的なもの(50・51)と、やや内湾するもの(52～58)があり、口径10～12cm、底径5cm～7cm、器高18～28mmを測る。59は体部が椀形を呈し、他とは異質である。B類には、体部が椀形を呈すもの(61)と、ほぼ水平に聞くもの(60・62～65)があり、底径4～4.5cm、高台高8～13mmを測る。柱状高台は直線的で、底面に向かってやや末広がりになっている。C類は体部形態が不明であるが、貼付高台はハ字状でしっかりしている。これらの上器は、岡山県北部ではほとんど確認されていない時期のもので、県南部での研究成果から、11世紀前半に位置付けられる。また、柱状高台をもつ上器については、日本海沿岸地域を中心に分布していることが指摘されており、大原町の位置する中国山地山間部と山陰地域との密接な結び付きを、土器様相からも窺い知ることができる。溝4の性格については、部分的な検出であるため明らかにし得ないが、推定寺域中央に位置し、主軸も方位を意識していることから、今岡庵寺の中心施設に関連する遺構である可能性も考えられる。また、出土した多量の土器については、豪華形態の器種に限られることから、饗宴に使用されたものが一括廃棄されたと考えられる。

T-21b 伽藍痕跡と考えられるL字形の畦畔を断ち切る位置に設定し、この畦畔の北側で溝5、南側で溝6を確認した。溝5・溝6は東西を主軸とし、幅3m～3m40cm、深さ約15cmを測る。断面形は溝というより浅いたわみ状を呈し、底面の標高は210.60～50mとなっている。溝5南端から溝6北端までの距離は3m70cmを測り、この間を逆るL字形の畦畔が回廊の痕跡と想定できることから、溝5・溝6はその両側に形成された雨落溝と考えられる。また、溝5・溝6の埋土中には、炭粒・焼土がやや多く含まれており、付近で火災があった可能性が高い。

T-21c 土壙6のみを確認し、その掘方内から、礎石と考えられる扁平な塊石を検出した。塊石は直径80cm・厚さ35cmほどと推定され、人為的な加工は認められないが、その形態や大きさから主要伽藍の礎石である可能性が高い。この塊石は、一回り大きく掘られた土壙6に埋没した状況で出土しており、土壙埋土が上層の包含層に近い色調・土質であることや、寺域内全体が後世の削平を受けていることを勘案すると、伽藍基壇上に設置されていた礎石が、後後に廃棄されたものである可能性が高い。そのため、本来の位置は留めていないと思われる。

T-21d 推定寺域南辺に直交する位置に設定したトレンチで、調査の結果、寺域南辺を区画する築地塀の雨落溝と考えられる溝7・溝8を検出した。溝7・溝8は、東西を主軸とし、上面幅1m80cm～2m、深さ15～20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面の標高は210.20mとなっている。溝7南端から溝8北端までの距離は1m80cmで、この間に築地塀が構築されていたと考えられる。なお、

溝7・溝8の周辺から、直径20~30cmの大円礫が20数点出土している。いずれも原位置は留めていないが、この付近に南門が想定されることから、南門基壇の化粧石であった可能性も考えられる。また、楕円形鉛治溝が1点出土している。

4. 推定寺域以南の調査（第9図）

T-17・18 今岡庵寺推定寺域の南に設定したトレンチで、遺構は認められなかったが、古代~中世の包含層を確認した。出土遺物はいずれも細片で摩耗が激しく、周辺から流れ込んだものと思われる。こうした状況から、この一帯は遺跡の縁辺部にあたると考えられる。出土遺物のうち、M3は嘉祐元宝(北宋銭・1056年初鋤)である。

T-19・20 今回の確認調査では、最も低い位置に設定したトレンチで、遺構・遺物とも認められず、表土以下、吉野川の洪水砂と考えられる砂質土が厚く堆積している。こうした状況から、この一帯は遺跡の範囲外で、かつては吉野川の氾濫原であったものと考えられる。

註

- 岡山県内出土瓦塔は、次の通りである。大原町今岡庵寺・作東町江見庵寺・津山市天田蒸屋遺跡・長船町須恵庵寺・岡山市吉井庵寺・岡山市神力寺跡・岡山市ハガ遺跡・岡山市實庭庵寺・倉敷市帆佐塔跡・総社市御中圓分寺・総社市鬼ノ城・笠岡市閑戸庵寺
- 50については、備前市佐山東山奥塗跡採集遺物と類似しており、同時期の所産と考られる。
- 山野康平「二佐貝塚ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』64 岡山県教育委員会 1987年
- 武田恭彰「林崎跡出土の古代土器について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 総社市教育委員会 1999年
平井泰男「古代の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会 1998年
平井泰男「平安時代の土器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 岡山県教育委員会 1999年
- 山本悦次「備前古城における古代後半の土器様式」『津島岡大遺跡6』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- 八幡興「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』XIII 中世土器研究会 1998年
八幡興「柱状高台寺」「中世土器研究論集」 中世土器研究会 2001年

第1表 確認調査成果一覧 □：推定寺域内トレンチ

調査区	小字	包含層		遺構		遺物		備考
		上面の 海抜高 (m)	表土から の深さ (cm)	種類	検出面 海抜高 (m)	表土から の深さ (cm)	種別	
T-1	市部大屋敷	214.30	66	—	—	—	弥生土器・土師器	△
T-2	市部太屋敷	212.22	26	—	—	—	縄文土器・須恵器・土師器	△
T-3	孫太屋敷	214.88	56	土器・柱穴	214.71	73	須恵器・土師器・併煎燒・瓦	○
T-4	カシワ	214.10	20	土器・柱穴	214.10	20	須恵器・土師器・雨間出焼・瓦	△
T-5	中森田	211.10	60	—	—	—	須恵器・土師器・陶瓶	△
T-6	シルデン	213.41	40	柱穴列	213.30	51	弥生土器・土師器・須恵器・瓦・鉄打	○
T-7	シルデン	—	—	—	—	—	須恵器・片瓦	△
T-8	シルデン	212.00	37	柱穴列	211.90	47	須恵器・土師器・瓦	○
T-9	シルデン	—	—	溝	212.52	30	須恵器・瓦	○
T-10	ヒヤケ田	211.30	16	土器・柱穴	211.30	16	須恵器・陶瓶	○
T-11	シルデン	211.52	22	溝・柱穴	211.32	42	須恵器・瓦	○
T-12	塔ノ元	210.68	14	土器・柱穴	210.56	26	須恵器・土師器・備前燒・雨間田燒・陶瓶	○
T-13	塔ノ元	210.94	20	—	—	—	須恵器・土師器・雨間田燒・瓦	○
T-14	塔ノ元	210.76	14	土器・柱穴	210.72	18	須恵器・土師器・雨間田燒・瓦・鉄打・鐵滓	○
T-15	溝下タ	—	—	溝	210.18	17	須恵器・土師器・雨間田燒・瓦・瓦塔・鉄滓・炉盤・鐵塊系遺物	○ 寺城区面溝
T-16	溝下タ	210.18	17	溝・柱穴	210.05	30	須恵器・土師器・瓦・鉄滓	○ 寺城区面溝
T-17	南代	209.95	21	—	—	—	須恵器・土師器・瓦・鉄打	○
T-18	溝添	209.30	40	—	—	—	須恵器・土師器・雨間田燒・鉄質	○
T-19	南新	—	—	—	—	—	土瓶器	△
T-20	古苗代	—	—	—	—	—	—	×
T-21 a	塔ノ元	210.90	25	溝	210.80	35	須恵器・土師器・瓦	○
T-21 b	塔ノ元	211.00	20	溝	210.80	40	須恵器・土師器・瓦	○ 回廊面溝添
T-21 c	塔ノ元	210.70	15	土壤	210.50	35	須恵器・土師器・瓦	○ 蒔石
T-21 d	塔ノ元	210.60	25	溝	210.40	45	須恵器・土師器・瓦・鉄滓	○ 基地部面溝添

*遺物量のうち、○は整理箱3箱以上、○は整理箱1箱以上、△は整理箱1箱以下、×は無しを示す(整理箱内寸54×34×15cm)。

第3節 全面調査の概要

1. 1区の調査（第11・13・14図）

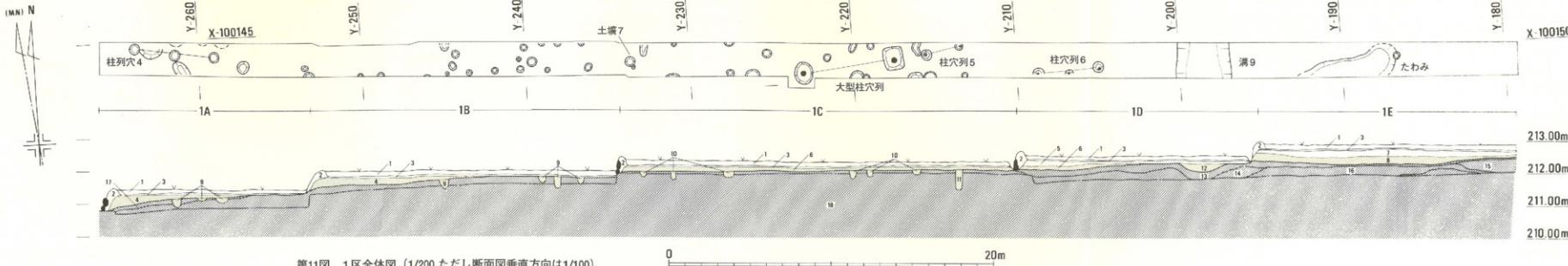
概 要 1区は、確認調査で明らかになった、今岡廃寺北側に広がる集落遺跡上に位置する。調査区は、東西を主軸とする $2 \times 90\text{m}$ の狭長なもので、畦畔を境に1A～1E区に細分した。地形的には、東から西へ緩やかに傾斜しており、1A区と1E区の比高差は1m50cmを測る。1区の基本層位は、上層から表上(現代水田層)→包含層(中世～近世の水田層)→基盤層(遺構検出面)となっている。

大形柱穴列 1C区に位置し、2基の大形柱穴で構成される。大形の掘立柱建物の一部と考えられ、柱穴内には大形の柱材が遺存していた。柱間は568cm(約19尺)、主軸はN-85°-Eで、柱間隔と方位を厳密に意識した配置となっている。柱穴掘方の平面形は、P1が長径140cm、短径110cmを測る楕円形、P2が長径135cm、短径110cmを測る隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは、P1で85cm、P2で90cmを測る。平坦に掘削された底面中央には、人頭大の河原石を組み合わせた根石が置かれ、この上に柱材が立てられている。柱材は保存状態が良好で、P1柱材が全長72cm・直径35cm、P2柱材が全長68cm・直径32cmを測る。両柱材とも表皮は剥がされているが、面取りなどの表面加工はなされていない。下端には、運搬用の繩掛け溝と考えられる幅6cm・深さ2cmほどの割り込みが巡らされている。底面には斧による伐採痕が残り、端部は面取りされている。樹種は両材とも檜である。この柱材について、奈良文化財研究所の光谷拓実氏に年輪年代測定を依頼したが、伐採年代を確定するのに必要なだけの年輪数が足りないということで、断念せざるを得なかった。柱穴埋土は、3～4層に分けられ、20～25cm毎に異なる理上がりが水平に堆積していることから、土質を進めて版築状に突き固めながら柱材を埋設した状況が窺える。遺物は、P1から72、P2から73が出土している。両者とも土師器の甌で、口唇部に面をもち、73は口縁端部を上方にややつまみ上げる特徴をもつ。遺構の時期は、これらの出土遺物や遺構の特徴から、8世紀代と考えられる。

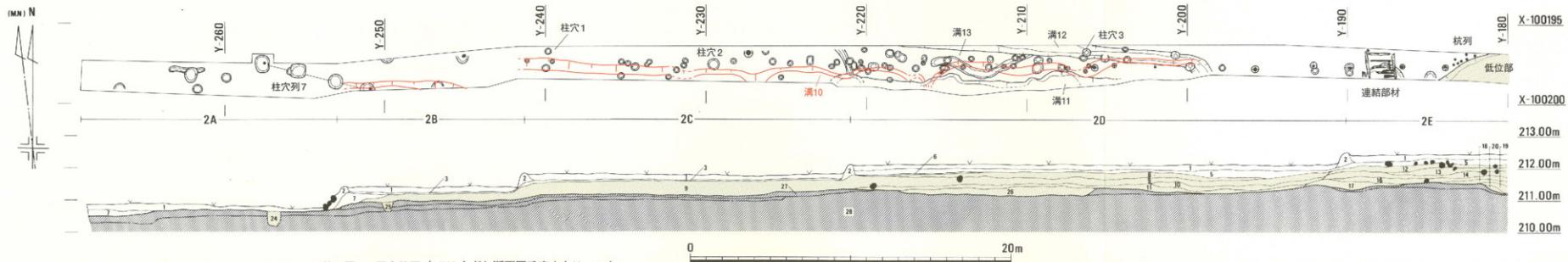
柱穴列4 1A区に位置し、3基の柱穴で構成される。掘立柱建物の一部と考えられ、柱間は250cm・235cm、主軸はN-81°-Wを測り、柱間隔と方位を意識した配置となっている。出土遺物はないが、遺構の特徴や周囲の状況から、古代の遺構と考えられる。

柱穴列5 1C区に位置し、2基の柱穴で構成される。掘立柱建物の一部と考えられ、柱間は215cm(約7尺)、主軸はN-80°-Eを測り、柱間隔と方位を意識した配置となっている。柱穴掘方はいずれも平面円形で、直径45～60cm、検出面から底面までの深さ40～44cmを測る。両柱穴とも直径18～20cmの柱材が遺存しており、このうちP1柱材の樹種は檜であった。出土遺物はないが、遺構の特徴や周囲の状況から古代の遺構と考えられる。また、大形柱穴列のすぐ東に位置し、主軸方向もほぼ一致することから、大形柱穴列に隣接する遺構である可能性も考えられる。

柱穴列6 1D区に位置し、3基の柱穴で構成される。掘立柱建物の一部と考えられ、柱間は193cm・195cm(6.5尺)、主軸はN-88°-Eを測り、柱間隔と方位を厳密に意識した配置となっている。柱穴掘方はいずれも平面円形で、直径42～64cm、検出面から底面までの深さ16～32cmを測る。各柱穴とも直径8～12cmの柱材が遺存し、このうちP3柱材の樹種は栗であった。出土遺物はないが、遺構の特徴や周囲の状況から、古代の遺構と考えられる。



第11図 1区全体図 (1/200 ただし断面図垂直方向は1/100)



第12図 2区全体図 (1/200 ただし断面図垂直方向は1/100)

1 区土層	
現耕土	1. 賽灰褐色土 2. 翠綠色土 3. 紫赤褐色土 4. 灰黑色粘質土 5. 鮮灰褐色粘質土
包含層	6. 黑灰色粘質土 7. 翠綠灰褐色粘質土 8. 黑褐灰褐色粘質土
遺存層	9. 深灰褐色粘質土 (深灰褐色粘質土)

—遺物包含層・遺構埋土
—柱材(平面)・礎(断面)

黒土:

10. 暗灰褐色粘質土(鉢含む)
11. 暗灰褐色粘質土(穴吹式1P 2種土)
12. 黑色粘質土(第9標準)
13. 暗青灰色粘質土(1~10cm大的の縦を多く含む)
14. 黄褐色粘質土
15. 灰褐色粘質土(1~10cm大的の縦を多く含む)
16. 青褐色粘質土
17. 云い葉褐色粘質土
18. 黄褐色粘質土

2区土層

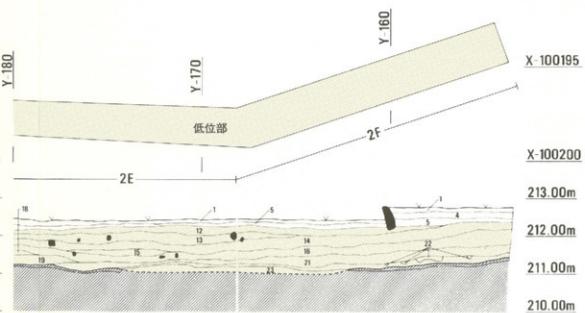
現代耕土	1. 増根灰色土 2. 番根色土 3. 増根灰色土 4. 増根灰色土 5. 増根灰色土 6. 増根灰色土 7. 増根灰色土 8. 増根灰色土 9. 黒褐色粘土[耕層地色が斑文状に覆じる]	1. 増根灰色土 2. 番根色土 3. 増根灰色土 4. 増根灰色土 5. 増根灰色土 6. 增根灰色土 7. 增根灰色土 8. 増根灰色土 9. 黒褐色粘土[耕層地色が斑文状に覆じる]	1. 増根灰色土 2. 番根色土 3. 増根灰色土 4. 増根灰色土 5. 増根灰色土 6. 增根灰色土 7. 增根灰色土 8. 増根灰色土 9. 黒褐色粘土[耕層地色が斑文状に覆じる]	1. 増根灰色土 2. 番根色土 3. 増根灰色土 4. 増根灰色土 5. 増根灰色土 6. 増根灰色土 7. 増根灰色土 8. 増根灰色土 9. 黒褐色粘土[耕層地色が斑文状に覆じる]
古代耕土	10. 増根灰色土(5cm以下の円潤で多く含む)	10. 増根灰色土(5cm以下の円潤で多く含む)	10. 増根灰色土(5cm以下の円潤で多く含む)	10. 増根灰色土(5cm以下の円潤で多く含む)
(中世)	11. 増根灰色土 12. 増根灰色土	11. 增根灰色土 12. 増根灰色土	11. 增根灰色土 12. 増根灰色土	11. 增根灰色土 12. 増根灰色土
2次進化土 (古代末期)	13. 増根灰色土 14. 増根灰色土(耕層地色が斑文状に覆じる)	13. 増根灰色土 14. 増根灰色土(耕層地色が斑文状に覆じる)	13. 増根灰色土 14. 増根灰色土(耕層地色が斑文状に覆じる)	13. 増根灰色土 14. 増根灰色土(耕層地色が斑文状に覆じる)
1. 次進化土 (古代末期)	15. 増根灰色土 16. 増根灰色土 17. 増根灰色土 18. 増根灰色土 19. 増根灰色土 20. 増根灰色土 21. 増根灰色土 22. 増根灰色土 23. 増根灰色土	15. 増根灰色土 16. 増根灰色土 17. 増根灰色土 18. 増根灰色土 19. 増根灰色土 20. 增根灰色土 21. 增根灰色土 22. 增根灰色土 23. 增根灰色土	15. 増根灰色土 16. 増根灰色土 17. 増根灰色土 18. 増根灰色土 19. 増根灰色土 20. 增根灰色土 21. 增根灰色土 22. 增根灰色土 23. 增根灰色土	15. 増根灰色土 16. 増根灰色土 17. 増根灰色土 18. 増根灰色土 19. 増根灰色土 20. 增根灰色土 21. 增根灰色土 22. 增根灰色土 23. 增根灰色土
山脈植物				
遺傳地理				
24. 林木地質				
25. 遺傳地理				
基礎層				

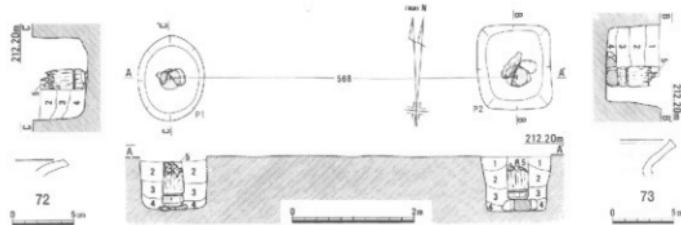
1 次成土道
(古代水期)

- [15] 壤鵝灰色粘質土
- [16] 壤鵝灰色粘質土
- [17] 壤鵝灰色粘質土
- [18] 壤鵝灰色粘質土
- [19] 淡褐色灰綠微沙土
- [20] 灰褐色粘質土
- [21] 壤鵝灰色粘質土
- [22] 灰褐色粘質土
- [23] 黑褐色灰黑色粘質土
- [24] 杜氏土 (鹽土)
- [25] 壤鵝灰色粘質土
- [26] 壤鵝灰色粘質土 (含11理土)
- [27] 灰褐色粘質土
- [28] 灰褐色粘質土

凹進植物
心

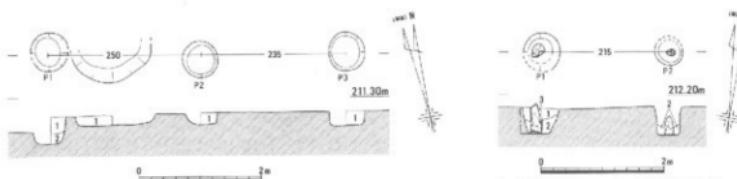
基盤層





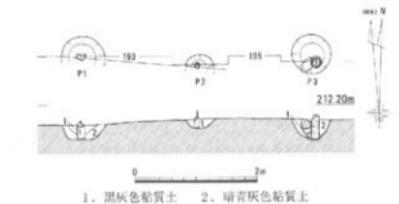
1. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土中に混じる)
2. 細褐色粘質土(細灰色粘土中に混じる)
3. 黑灰色粘質土
4. 黑灰色粘質土(黄褐色粘質土中に混じる)
5. 黑灰褐色粘質土

大形柱穴列



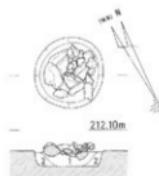
1. 黄褐色粘質土(黄褐色粘土中に混じる)
2. 黄褐色粘質土
1. 黄褐色粘質土
3. 黑灰褐色粘質土
2. 黄灰褐色粘質土

柱穴列4



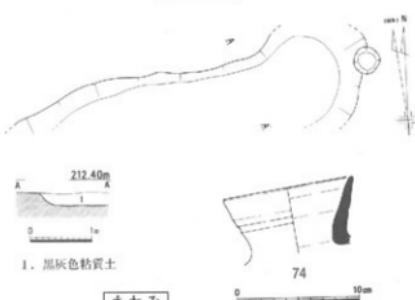
1. 黑灰色粘質土
2. 增青灰色粘質土

柱穴列5



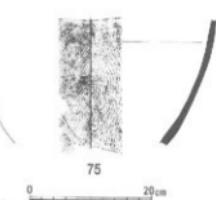
1. 暗灰褐色粘質土
2. 暗灰褐色粘質土
(黄褐色粘質土が層文状に混じる)

柱穴列6



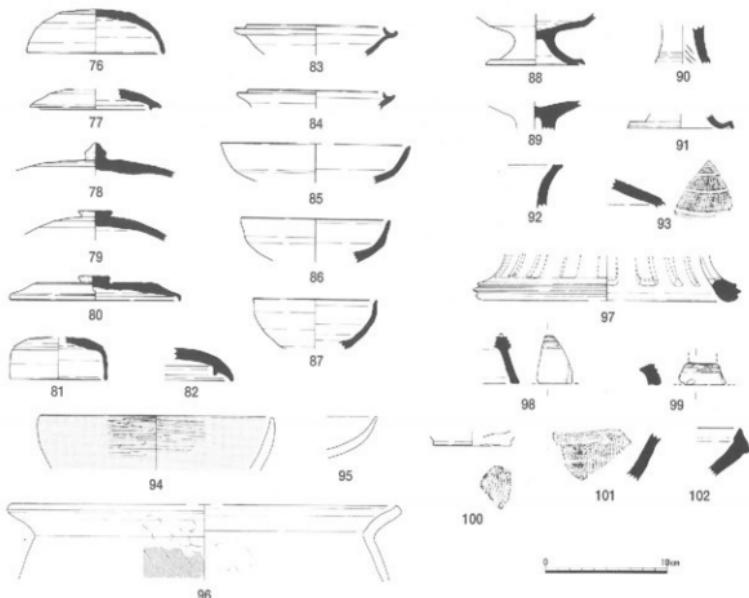
1. 黑灰色粘質土

たわみ



土壤7

第13図 1区検出造構(1/80)・出土遺物(1/4) ※土壤7は1/40、75は1/8



第14図 1区包含層出土遺物(1/4)

土壤7 1C区に位置する。平面は直径55~60cmの梢円形を呈し、検出面から底面までの深さ12cmを測る。検出面のレベルで、拳大の甕と上器片がまとめて廃棄されたような状況で出土した。時期は、出土した須恵器壺75から7~8世紀代と考えられる。

溝9 1D区に位置する、南北方向を主軸とする溝である。幅320cm・深さ25cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。出土遺物はないが、埋土が古代~中世の遺構と異なることや、1D区と1E区の境となる畦畔に近接する位置にあることから、近世以降の用排水溝である可能性が考えられる。

たわみ 1E区に位置する。調査区の制限により全体の規模は不明であるが、幅1m前後、長さ3m以上の不整形な長梢円形を呈すると思われる。検出面からの深さは18cmを測り、底面は平坦となっている。時期は、出土した須恵器平盤74から7世紀代と考えられる。

その他の遺構 1A~1C区を中心に、42基の柱穴・土壙を検出した。その多くは遺物を伴わなわず、時期は特定できないが、埋土の色調や周囲の状況、包含層出土遺物から、古代のものが主体を占めると考えられる。また、これらの中には掘立柱建物の柱穴も含まれていると思われる。

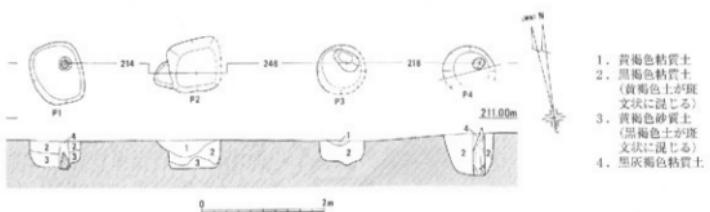
包含層出土遺物 1A~1E区の包含層(第11図4~8層)からは、整理箱3箱分の遺物が出土した。その多くは須恵器・上師器を中心とする土器で、瓦は総量で270gしか出土していない。土器の多くは微細な破片となっており、このうち実測可能な28点について掲載した。時期的には7世紀中葉~15世紀までのものがあるが、主体となるのは7世紀後半~8世紀代で、その前後の時期の遺物量は概し

て少ない。こうした状況から、遺物が出土していない遺構についても7世紀後半～8世紀代に属している可能性が高いと考えられる。出土遺物のうち、97・98・99は円面鏡の脚台部である。特に、97は脚台部底径が20cm前後と推測される比較的大形のものである。また、製鉄関連の遺物として、炉壁(1点)・炉外流出滓(1点)・輪形鍛冶滓(1点)が出土しており、1区周辺に製鉄・鍛冶遺構が存在するものと考えられる。

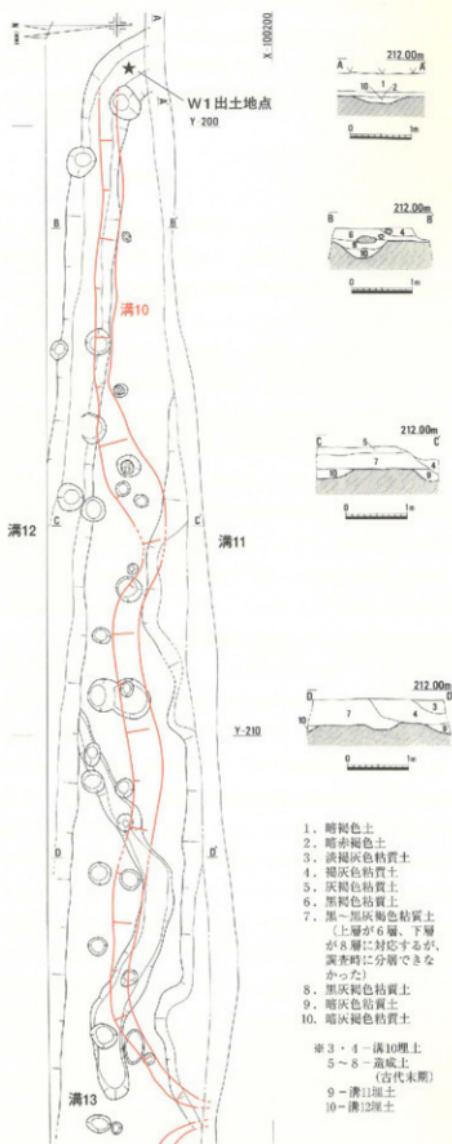
2. 2区の調査 (第12・15～24図)

概要 2区は、今岡廃寺推定寺域北辺に重複する位置にあたる。調査区は、東西を主軸とする2×120mの狭長なもので、畦畔を境に2A～2F区に細分した。現在、2区周辺は東から西へ緩やかに傾斜する地形となっているが、これは古代末期に行われた大規模な地形改変の結果であることが、発掘調査により明らかとなった。2区の基本層位は、大きく5つに分けられる(第12図)。1～7層は表土および中世以降の耕作土である。8～21層は、古代末期に行われた造成により形成された土層である。この造成は2回に分けて行われており、13～21層が1次造成、8～12層が2次造成に対応する。このうち、1次造成は2E・2F区に広がる低位部の埋め立ても兼ねて行われたもので、暗灰～暗褐色を呈する粘質土を20～30cmを1単位として層状に重ね、地形全体を1m程かさ上げしている。この1次造成は、堆積状況や造成土中に遺物があまり含まれていないことから、2区東方の低位部や丘陵地の土砂を押し出して行われたと考えられる。2次造成は一帯を完全に削平し、その土砂を盛り直したもので、厚さ40～60cmの造成土中には瓦や土器が大量に含まれている。この1次・2次造成は、堆積状況や造成土中に包含される遺物から、古代末期の12世紀に一連の工事として行われたと考えられる。22・23層は先述の低位部堆積土で、黒色を呈し水分を多く含むことから、この一帯は造成前には湿地状を呈していたと考えられる。24～26層は遺構埋土、27・28層は基盤層である。

柱穴列7 2A区に位置し、4基の柱穴で構成される。調査区の制限により全体は不明であるが、掘立柱建物あるいは櫛列の一部と考えられる。柱間は、P1-P2・P3-P4間が214～218cm(約7尺)であるのに対し、P2-P3間は246cm(約8尺)とやや広くなっている。主軸はN-83°-Wで、方位を厳密に意識した配置にはなっていない。柱穴掘方の平面形は、P1・P2が隅丸方形、P3・P4が円形を呈し、検出面で直径80～100cm、底面までの深さ30～65cmを測る。各柱穴のうち、P1・P4には直径15～20cmの柱材が遺存し、このうちP4柱材の樹種は檜であった。また、土層の状況から、P2・P3の柱材は抜き取られたものと考えられる。出土遺物はないが、遺構の特徴や周囲の状況から、古代の遺構と考えられる。



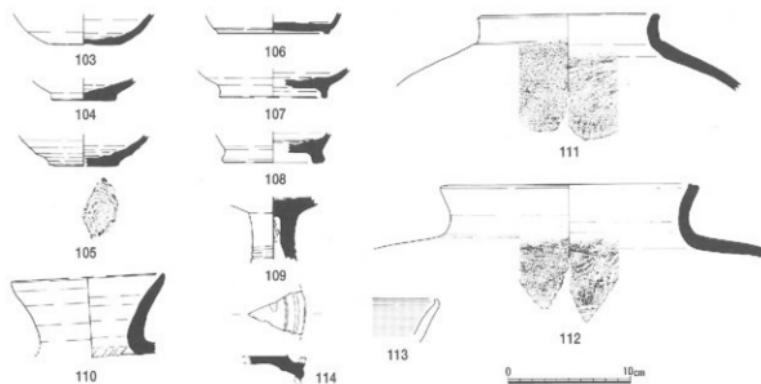
第15図 柱穴列7 (1/80)



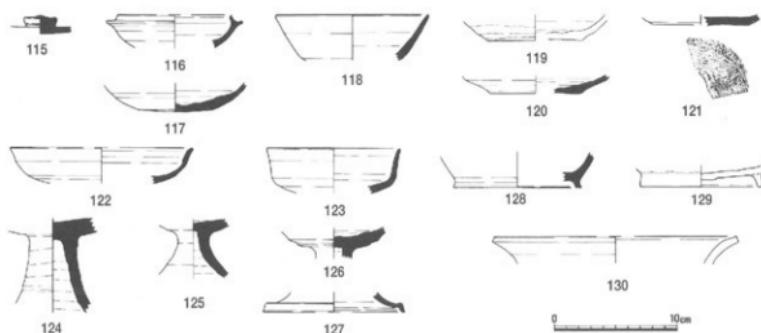
第16図 溝10～13周辺遺構全体図(1/80)

溝10 2B～2D区にかけて検出した溝で、古代末期に行われた造成土を基盤とする。現在の地割り境と重複しており、ほぼ正確に東西方向を主軸とする。幅は調査区の制限から不明であるが、肩口が不整形で胃袋状に広狭のある平面形を呈すと考えられる。断面は底が平坦なU字形を呈する。底面の標高は、Y-200ラインで211.60m、Y-240ラインで211.20mを測り、東から西へ傾斜している。埋土は褐灰色を呈する粘質土で、7～12世紀代の遺物を包含するが、本米は造成土中に含まれていたものと考えられる。これらの特徴から、溝10は古代末期に行われた造成工事に伴い、用水路として整備されたものと考えられる。また、今岡廃寺推定寺域北辺ともほぼ重複し、寺域境が造成後も地割り境として継承されたことを示している。

溝11・12 2D区で検出した東西方を主軸とする溝で、2条がほぼ平行することから、寺域北辺を区画する築地塀の雨落溝である可能性が高い。溝11～溝12間は1m～1m90cmを測り、この間に築地塀が構築されていたと考えられる。このうち、溝12は検出面で幅80cm～1mを測り、N-87°-Wを主軸として、ほぼ直線的に掘削されているが、Y-200ライン付近で直角に折れ曲がり、南へと延びている。溝11は調査区の制限や削平により部分的な検出に留まっているが、肩口が不整形で胃袋状に広狭のある平面形を呈すと考えられる。両溝とも、断面は底が平坦なU字形で、底面の標高は211.20～30mを測



第17図 満10出土遺物(1/4)



第18図 満11出土遺物(1/4)



第19図 満12出土遺物(1/4)



第20図 満13出土遺物(1/4)



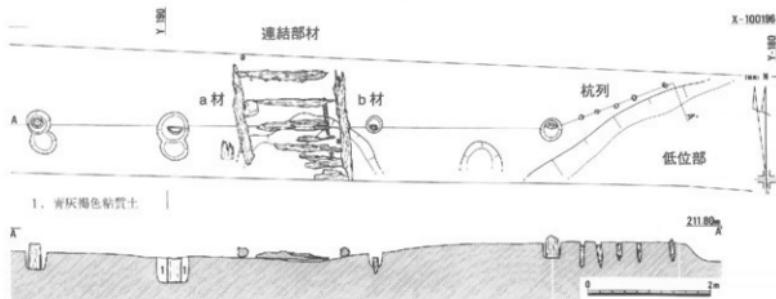
第21図 柱穴出土遺物(1/4)

り、東から西へわずかに傾斜しているようである。埋土は暗灰～暗灰褐色を呈する粘質土で、今岡廃寺が機能していたと考えられる7世紀前葉から10世紀代の遺物を包含する。

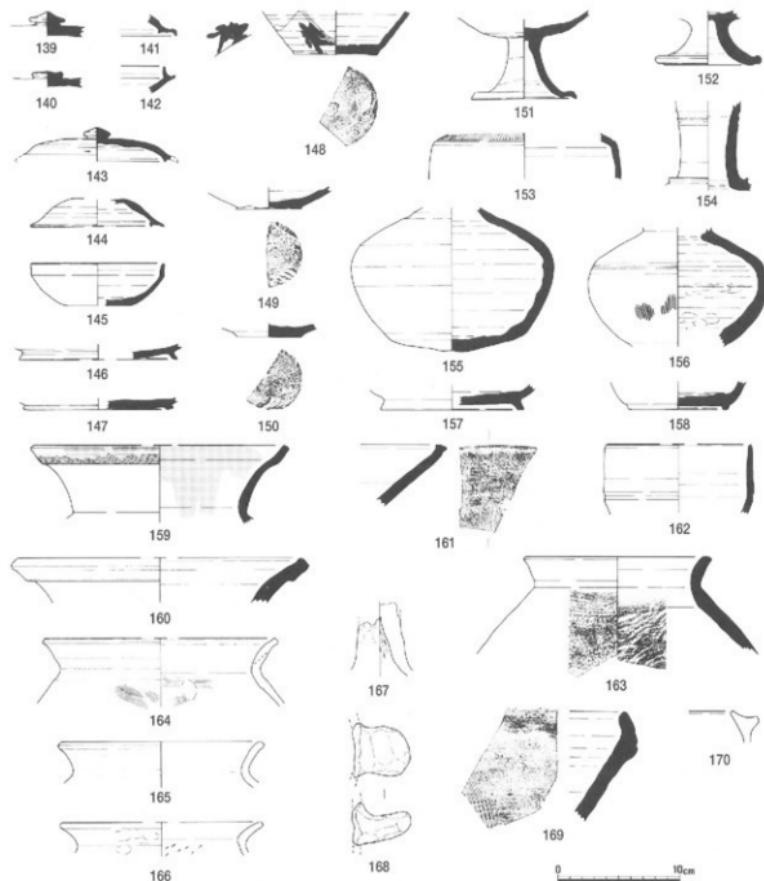
溝13 2D区のY-215～Y-210ラインにかけて検出した溝である。不規則に蛇行しており、検出面で幅30～50cm、深さ5～10cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上層の造成土と同一である。こうした特徴から、溝13は古代末期に行われた造成時の掘削痕と考えられる。

連結部材 2E区のY-188ラインで検出した、2本の長い木材を短い木材で梯子状に連結し、地面に設置したものである。調査区の制限で全形は不明であるが、南北に続きの部材が埋没しているようである。このうち、南北方向を主軸とする2本の長い木材をa材(西側)・b材(東側)、a材とb材を繋ぐ短い木材を連結材とする。いずれの木材も表面の腐朽が著しく、本来の形態からかなり変形している。このうち、a材は長さ170cm・直径15cmで、東側面に2か所の枘穴がある。b材は長さ180cm・直径15cmで、西側面に3か所の枘穴がある。各枘穴は船底状を呈し、腐朽が激しく正確な大きさは不明であるが、大体長さ10cm・幅5cm・深さ3cmを測り、約56cm間隔で設けられている。この枘穴に、長さ約150cm・直径10～15cmの連結材が差し込まれ、a材・b材を繋いでいる。連結材の両端は腐朽が激しく、仕口の状況は不明である。この部材を基盤層上面に設置し、さらに数本の杭を周囲に打ち込み固定している。なお、この一帯は低位部に近く、木質が遺存していることからもかなり湿潤な状況にあったと思われる。こうした状況から、この連結部材は低湿な場所を通るための足場、あるいは何らかの施設を構築するための下部構造と考えられる。また、仕口により連結されていることから、建築部材が転用された可能性もある。樹種については、a材・b材について同定を実施し、両材とも檜と判明した。その他の木材も肉眼観察による限り、檜の可能性が高いと考えられる。時期については、確実に部材に伴う出土遺物がないので特定できないが、古代末期に行われた造成土によりバックされていることや、今岡廃寺と関連する可能性が高いことから、古代と考えられる。

低位部と杭列 2E～2F区で検出した低位部には、水分を多く含む黒色粘質土が堆積しており、この一帯は古代末期の造成により埋め立てられる前は、湿地状を呈していたと考えられる。また、低位部の肩口に沿って、直径5～8cmの杭が打ち込まれている状況を確認した。この低位部は、確認調査のT-7でも検出していることから、今岡廃寺推定寺域の北東隅から、北東～東の丘陵裾部にかけて広がっているものと考えられる。遺物は古代と考えられる土器が少量出土している。

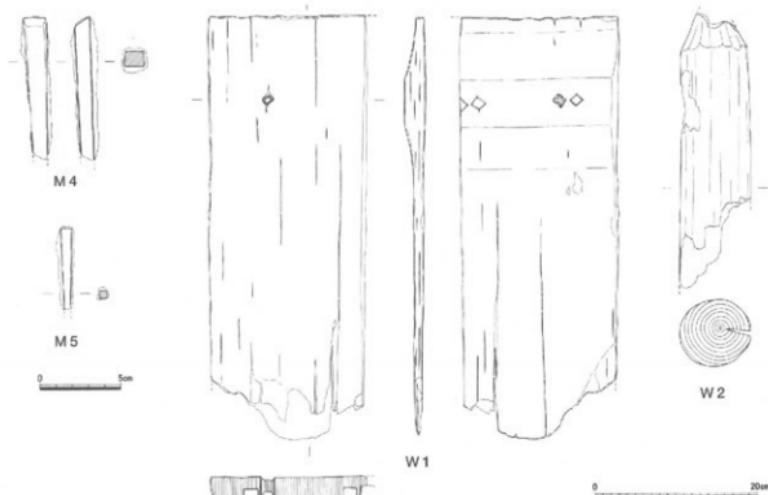


第22図 連結部材出土地点周辺遺構全体図(1/80)



第23図 2区包含層出土遺物(1/4)

その他の遺構 2区では上述の各遺構のほか、2C・2D区を中心に85基の柱穴を検出した。柱穴の規模は直径20~50cm、深さ10~40cmとばらつきがあるものの、柱材が遺存するものや、柱痕跡が確認できるものもあり、横列や掘立柱建物の一部を含んでいると考えられるが、調査区の制限もあり確実な組み合わせを抽出するまでには至らなかった。また、溝11・12と切り合い関係にある柱穴については、溝11・12が柱穴を切っている状況を確認した。柱穴出土遺物は少量かつ細片であるが、掲載した136~138や包含層出土遺物から、検出した柱穴の多くは7~8世紀代のものである可能性が高い。なお、2D区造成土中からは、遺物と混在する状況で拳~人頭大の円礫が多数出土している。2D区周辺には伽藍の存在が想定され、これらの円礫は基壇化粧石であった可能性も考えられる。



第24図 2区出土金属製品・木製品(1/3・1/6)

包含層出土遺物 2A～2F区の包含層(第12図8～23層)からは、合計で整理箱37箱の遺物が出土した。その内訳は、瓦24箱、土器3箱、木製品10箱、金属製品少量となっている。このうち土器については、その多くが微細な破片となっていたが、実測可能な32点について掲載した。時期的には6世紀～16世紀までのものがあるが、主体となるのは7世紀中葉～8世紀代で、その前後の時期の遺物量は極めて少ない。そのため、遺物が出土していない造構についてても、当該期に属している可能性が高い。出土遺物のうち、主体となる7世紀中葉～8世紀代のものについては、今岡廃寺の建立と運営に伴うものと考えられる。また、2区で確認された大規模な造成の時期を示すと考えられるのが勝間田焼鉢149・150で、12世紀代の特徴を示す。備前焼擂鉢169・瓦質羽釜170については上層からの混入と考えている。出土土器のうち特筆されるのが、2E区造成土から出土した墨書き土器148である。これは10世紀前半の須恵器杯で、体部に横位で「讃」の墨書きがあり、今岡廃寺が所在する英田郡大原町今岡の古代郷名である「讃廿」と記している可能性が高い。

2区出土金属製品・木製品 金属製品は、2D区包含層からM4・M5の2点が出土した。両者とも鉄釘で、先端を欠損する。同じく、2D区包含層からは楕円形鍛冶滓も1点出土している。木製品については、2E区造成土中から建築部材と考えられる木材片が多数出土しているが、特に目立った加工痕や仕口は認められず、腐食も激しいことから掲載は見合わせた。このうち特筆されるのが、溝12の屈曲部底面から出土した机の天板W1である。これは檜の柾目材を素材としたもので、脚の取付部を高まり状に削りだしている。取付部には、方形の差し込み穴が4か所に認められる。このW1について、年輪年代測定を実施した結果、伐採年代の上限が643年であることが判明した。ただし、素材となつた柾目材には辺材が無いため、辺材分の約50年を加えた700年前後が原木の伐採年と想定される。W2は太さ8.8cmを測る堅柱で、心持ち丸太材を利用している。樹種は重硬で割れにくい^{ひじらぎ}杉である。

第2表 土器観察表①

No.	遺構・層位	種別	器種	前表面(cm)	色調	紹介	特徴	時期		
1	T-1	混合層	土加器	黒	に古い褐色	粗野	貿易不明確。	古墳前半		
2	T-1	混合層	土加器	黒	に古い褐色	粗野	貿易不明確。	7～8 C		
3	T-2	混合層	土加器	深体	に古い褐色	粗野	内面粗面アザ。口縁部と器底に付く突起。	穂文化期		
4	T-2	混合層	瓦瓦土器	灰白	に古い褐色	粗野	内面強力なハケア。外付アザ。	8 C 前半		
5	T-3	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面のつるみ。	13～14 C		
6	T-3	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	内面粗面アザ。底面内面アザ。	8 C		
7	T-3	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面のつるみ。	9 C 前半		
8	T-3	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。ナデ。	8～9 C		
9	T-3	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	器底に武文2条、衝突文、自然磨损。	7 C 後半		
10	T-3	混合層	土加器	黒	に古い褐色	粗野		8 C		
11	T-3	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野		13 C		
12	T-4	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面カリ付。ハケア。	13 C		
13	T-4	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面カリ付。	13 C		
14	T-4	混合層	土加器	灰白	6.9	1.6	に古い褐色	粗野		
15	T-5	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	内面粗面アザ。	13～14 C		
16	T-5	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面不整。	8 C		
17	T-5	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り。	8 C		
18	T-6	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	8 C		
19	T-6	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	7～8 C		
20	T-6	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	8 C		
21	T-6	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	8 C		
22	T-6	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	8 C		
23	T-6	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	8～9 C		
24	T-7	堆積土	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	上端部の断片	8～9 C		
25	T-8	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	7 C 後半		
26	T-8	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	内面ヨコナザ。	7～8 C		
27	T-8	混合層	土加器	黒	に古い褐色	粗野		7～8 C		
28	T-9	混合層	土加器	灰白	10.9	1.8	に古い褐色	粗野		
29	T-10	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面ヘラ切り後。	7 C 後半		
30	T-11	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	8 C		
31	T-11	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	8～9 C		
32	T-12	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7～8 C		
33	T-12	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。内面ヨコナザ。	7～8 C		
34	T-12	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7～8 C		
35	T-12	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7～8 C		
36	T-12	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7～8 C		
37	T-12	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7～8 C		
38	T-13	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7～8 C		
39	T-15	土加器	灰白	4.2	浅褐色	粗野	底面アザ付。	11 C 前半		
40	T-15	土加器	灰白	4.2	浅褐色	粗野	底面アザ付。	11 C 前半		
41	T-15	土加器	灰白	5.7	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	11 C 前半		
42	T-15	土加器	灰白	3.2	灰黄色	粗野	底面アザ付。	11 C 前半		
43	T-15	土加器	灰白	4.6	灰白色	粗野	底面アザ付。	11 C 前半		
44	T-16	混合層	瓦瓦土器	20.0	13.6	5.8	灰白色	豊饒1底面外周輪ヘラカズリ。底面内面ナザ。		
44	T-16	混合層	瓦瓦土器	18.4	13.0	6.2	灰白色	豊饒1底面外周輪ヘラカズリ。底面内面ナザ。		
45	T-17	混合層	瓦瓦土器	9.4	灰白色	粗野	底面アザ付。	8 C		
46	T-17	混合層	瓦瓦土器	6.9	灰白色	粗野	底面アザ付。	8 C		
47	T-18	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7 C		
48	T-18	混合層	瓦瓦土器	4.0	灰白色	粗野	底面アザ付。	7 C		
49	T-18	混合層	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。	7 C		
50	T-21a	清1	土加器	12.0	6.1	2.6	灰白色	オーバーパレル	粗野	
51	T-21a	清1	土加器	9.7	4.8	1.8	灰白色	粗野	内面横行。	
52	T-21a	清1	土加器	10.5	5.2	2.0	灰白色	粗野	底面アザ付。	
53	T-21a	清1	土加器	9.6	5.2	2.2	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
54	T-21a	清1	土加器	10.2	5.8	2.1	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
55	T-21a	清1	土加器	5.6	4.8	1.6	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
56	T-21a	清1	土加器	5.1	4.8	1.6	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
57	T-21a	清1	土加器	4.7	4.8	1.6	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
58	T-21a	清1	土加器	5.0	4.8	1.6	浅褐色	粗野	底面アザ付。	
59	T-21a	清1	土加器	5.4	4.8	1.6	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
60	T-21a	清1	土加器	4.7	4.8	1.6	灰白色	粗野	底面アザ付。	
61	T-21a	清1	土加器	3.6	4.8	1.6	に古い褐色	粗野	底面アザ付。	
62	T-21a	清1	土加器	4.3	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
63	T-21a	清1	土加器	4.2	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
64	T-21a	清1	土加器	4.2	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
65	T-21a	清1	土加器	4.1	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
66	T-21a	清1	土加器	5.6	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
67	T-21a	清1	土加器	6.1	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
68	T-21a	清1	土加器	6.4	4.8	1.6	に古い褐色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
69	T-21a	清1	土加器	8.6	4.8	1.6	灰白色	粗野	社跡高台、底部承切付。	
70	T-21a	清1	土加器	灰白	に古い褐色	粗野	社跡高台、底部承切付。	11 C 前半		
71	T-21a	清1	土加器	灰白	浅褐色	粗野	社跡高台。	11 C 前半		
72	J-C区	大形柱穴	土加器	黑	に古い褐色	粗野	外周櫛付。	8 C		
73	J-C区	大形柱穴	土加器	黑	に古い褐色	粗野		8 C		
74	J-E区	たわみ	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	内面粗面外面上1条の凹溝。	7 C		
75	J-C区	土塼7	瓦瓦土器	灰白	灰白色	粗野	底面アザ付。内面ヨコナザ。	7～8 C		
76	J-C区	築6	瓦瓦土器	新10	3.6	1.6	灰白色～灰黑色	粗野	天井面ヘラカズリ。	7 C 中葉
77	J-E区	混合層	瓦瓦土器	新9	4.0	1.6	灰白色	粗野	内面粗面アザ付。	7 C 中葉
78	J-D区	混合層	瓦瓦土器	新9	4.0	1.6	灰白色	粗野	内面粗面アザ付。	7 C 中葉
79	J-A区	混合層	瓦瓦土器	新9	4.8	1.6	灰白色	粗野	内面粗面アザ付。	7 C 後半
80	J-D区	混合層	瓦瓦土器	新9	4.0	2.0	灰白色	粗野	内面粗面アザ付。	9 C 後葉
81	J-A区	混合層	瓦瓦土器	新9	7.8	3.5	灰色	粗野	内面粗面アザ付。	7 C
82	J-A区	混合層	瓦瓦土器	新9	4.0	1.6	灰白色	粗野	上端部ヘラカズリ。	7 C 後半
83	J-A区	混合層	瓦瓦土器	新9	11.5	1.6	灰白色	粗野	上端部ヘラカズリ。	7 C 中葉
84	J-C区	混合層	瓦瓦土器	新9	11.0	1.6	灰白色	粗野	上端部ヘラカズリ。	7 C 中葉

第2表 土器観察表(2)

No.	遺構・部類	種別	器種	測量 (cm)	直径 口径	底径	厚さ	色 調	胎上	特 徴	時 期
85	1 C 区 部分層	鍋形器	高柄	15.4				灰白～灰色	精良	内板面ヨコナギ。外腹に小平頭1箇。	7 C 後半
86	1 D 区 飯食器	杯	12.1					灰白～灰色	精良	内板面ヨコナギ。馬蹄の可視性がある。	7 C 後半
87	1 D × 飯食器	杯	13.0	5.8				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。高脚の可視性もある。	7 C 後半
88	1 D 区 飯食器	高柄		8.0				灰白色	精良		7～8 C
89	1 A × 飯食器	自留器	高柄					灰白色	精良		7～8 C
90	1 A × 飲食器	高柄						灰白色	精良		7 C
91	1 D 区 飲食器	似豆器	高柄	8.4				灰白色～灰色	精良		7～8 C
92	1 A 区 飲食器	似豆器	高柄					灰白色	繊維		7 C 後半
93	1 D 区 飲食器	似豆器	高柄					灰白～灰色	精良	肩部上面に凹溝3条。その間に刻文。	7 C 後半
94	1 D 区 飲食器	土師器	杯	10.0				灰白色～褐色	精良	内板面ヘリガタ。赤褐色斑跡有。	7 C 中葉
95	1 F 区 飲食器	土器						灰白色	精良	内板面ヘリガタ。赤褐色斑跡有。	7 C 中葉
96	1 D 区 飲食器	土器		21.5				灰白色～淡褐色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	8 C
97	1 C 区 飲食器	自留器	白陶器	30.8				灰白～白色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	8 C
98	1 D 区 飲食器	自留器	白陶器					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	8 C
99	1 A 区 飲食器	自留器	白陶器					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	8 C
100	1 A 区 飲食器	自留器	白陶器	6.4				灰白色	精良	内板面ヘリガタ。赤褐色斑跡有。	8 C
101	1 B 区 飲食器	自留器	杯					灰白色	精良	内板面ヘリガタ。赤褐色斑跡有。	10 C 後半～11 C 後半
102	1 A 区 飲食器	自留器	杯					灰白色	精良	内板面ヘリガタ。赤褐色斑跡有。	10 C 後半
103	2 D × 運搬	单耳器	盆	6.0				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	7 C
104	2 B × 運搬	单耳器	盆	5.0				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	7 C
105	2 B × 運搬	单耳器	盆	5.7				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	12 C 後半
106	2 B × 運搬	单耳器	盆	9.0				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	8 C 後半
107	2 D × 運搬	单耳器	盆	11.6				灰白～灰色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	8 C 後半～9 C 前葉
108	2 D × 運搬	单耳器	盆	8.0				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	8 C 後半～9 C 前葉
109	2 D × 運搬	单耳器	盆					灰白～灰色	精良	内板面ヨコナギ。縦筋外腹ハケズ。	7 C 後半
110	2 D × 運搬	单耳器	盆	12.4				灰白～青灰色	精良		7 C 後半
111	2 D 区 運搬	单耳器	盆	14.2				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C 後半～8 C
112	2 D × 運搬	单耳器	盆	19.8				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C 後半～8 C
113	2 D 区 運搬	单耳器	盆					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	8 C 後半
114	2 C × 運搬	单耳器	盆					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	8 C 後半
115	2 D × 運搬	单耳器	盆					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	8 C 後半
116	2 D × 運搬	单耳器	盆	9.2				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	8 C 後半
117	2 D × 運搬	单耳器	盆	6.0				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
118	2 C × 運搬	单耳器	盆	12.4				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	9 C 後半
119	2 C × 運搬	单耳器	盆	7.8				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	9 C
120	2 C × 運搬	单耳器	盆					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7～8 C
121	2 C × 運搬	单耳器	盆	7.8				灰白～灰色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	9 C
122	2 D × 運搬	单耳器	盆	15.9				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C 後半
123	2 D × 運搬	单耳器	盆	16.8				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
124	2 D × 運搬	单耳器	盆					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7～8 C
125	2 D × 運搬	单耳器	盆					灰白～灰色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7～8 C
126	2 D × 運搬	单耳器	盆					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7～8 C
127	2 D × 運搬	单耳器	盆	11.4				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
128	2 D × 運搬	单耳器	盆	10.3				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	8 C 後半～9 C 前葉
129	2 D × 運搬	土師器	盆	9.8				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	8 C
130	2 D × 運搬	土師器	盆	19.6				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	7～8 C
131	2 D × 運搬	单耳器	盆	11.1				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	8 C 後半
132	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	7～8 C
133	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	7 C 後半
134	2 D × 運搬	单耳器	高杯	11.2				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C 後半～8 C
135	2 C × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C 後半
136	2 C × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C 後半
137	2 D × 運搬	单耳器	高杯	12.0				灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
138	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
139	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
140	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。内側同心円文上をヨコナギ。	7 C
141	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	7 C 中葉
142	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	7 C 中葉
143	2 D × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面ヨコナギ。	7 C 中葉
144	2 D × 運搬	单耳器	高杯	10.8	5.0	3.5		灰白色	精良		7 C 中葉
145	2 D × 運搬	单耳器	高杯	10.8	5.0	3.5		灰白色	精良		7 C 中葉
146	2 C × 運搬	单耳器	高杯	12.8				灰白色	精良		7 C 後半～8 C 前葉
147	2 C × 運搬	单耳器	高杯	12.2				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	7 C 後半～8 C 前葉
148	2 D × 運搬	单耳器	高杯	6.8				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	10 C 後半
149	2 C × 運搬	单耳器	高杯					灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	10 C 後半
150	2 C × 運搬	单耳器	高杯	5.3				灰白色	精良	底面ハラマリ後ナメ。	10 C 後半
151	2 D × 容器	单耳器	高杯	8.6				灰白色	精良		7～8 C
152	2 D × 容器	单耳器	高杯	8.2				灰白～青灰色	精良		7 C 後半～8 C
153	2 D × 容器	单耳器	高杯					灰白色	精良		7 C 後半
154	2 C × 容器	单耳器	高杯					灰白～青灰色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
155	2 D × 容器	单耳器	高杯	10.6				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
156	2 D × 容器	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
157	2 D × 容器	单耳器	高杯	11.8				灰白～青灰色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半～8 C 前葉
158	2 D × 容器	单耳器	高杯	8.2				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	8 C
159	2 D × 容器	单耳器	高杯	20.2				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
160	2 D × 容器	单耳器	高杯	23.2				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
161	2 D × 容器	单耳器	高杯					灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
162	2 D × 容器	单耳器	高杯	11.8				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半
163	2 D × 容器	单耳器	高杯	15.2				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7 C 後半～8 C
164	2 D × 容器	单耳器	高杯	18.8				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7～8 C
165	2 D × 容器	单耳器	高杯	16.2				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	7～8 C
166	2 D × 容器	单耳器	高杯	16.2				灰白色	精良	内板面上面に凹溝1条。研究による列文。	6 C
167	2 C × 飲食器	单耳器	高杯					灰白色	精良		6 C
168	2 C × 飲食器	单耳器	高杯					灰白色	精良		6 C～7 C
169	2 E 区 飲食器	单耳器	高杯					オーバル黒色	精良		10 C
170	2 E 区 飲食器	单耳器	高杯					オーバル黒色	精良		13～14 C

第4章 今岡廃寺の瓦について

1. 概要

今回の発掘調査により、合計で整理箱60箱、重量にして約620kgの瓦が出土した。これらは第6表の通り、大部分が推定寺域内からの出土であり、そのほとんどが今岡廃寺に使用されていた瓦と考えられる。瓦の多くは、後世の削平により微細な破片となっていたが、整理・検討の結果、軒丸瓦4型式、軒平瓦5型式11種、丸瓦3類型、平瓦3類型11種を確認した。このうち、軒瓦については第3表で出土地点・点数・比率を記しているが、丸瓦・平瓦については摩耗により分類できないものが多く、その数量や比率の検討は十分に行えなかった。このほか、塙が1点出土しているが、鶴尾・鬼瓦・道具瓦については全く確認できなかった。以下、各型式・類型について解説するが、頁数の関係で代表的な個体のみ掲載していることを御了承いただきたい。解説中の各種計測値は、掲載資料のものである。

2. 軒丸瓦(第25図)

I型式(素弁十弁蓮華文軒丸瓦 R1・R2) 合計2点出土し、軒丸瓦全体の12%を占める。破片から推定復元した瓦当直径は17.8mmを測る。中房は推定径50mmで、断面は平坦な台形を呈し突出は低い。唯一、中房が残存するR2が小片なので断定はできないが、中房内に蓮子は認められない。中房の周囲には幅4mmの沈線が巡り、線内には范傷が認められる。蓮弁は弁長37mm・弁幅16mmを測る細長い筋錐形で、先端は尖り気味となっている。断面は肉厚の半円形を呈し、中央に稜線は通らない。蓮弁は幅3mmの沈線により縁取られ、間弁と画されている。間弁は丁字形で高く突出し、脚部は中房を巡る沈線まで達する。外区文様はなく、内区と外縁は、幅6mmの沈線により明確に区分される。外縁は直立素文様で、外縁幅14mm・高さ7mmを測る。瓦当文様を総合的にみると、肉厚で、沈線により明確に区画されていることから、簡潔で立体感のある造形となっている。瓦当外周はナデ調整で、R2につ

第3表 軒瓦出土地点・数量一覧

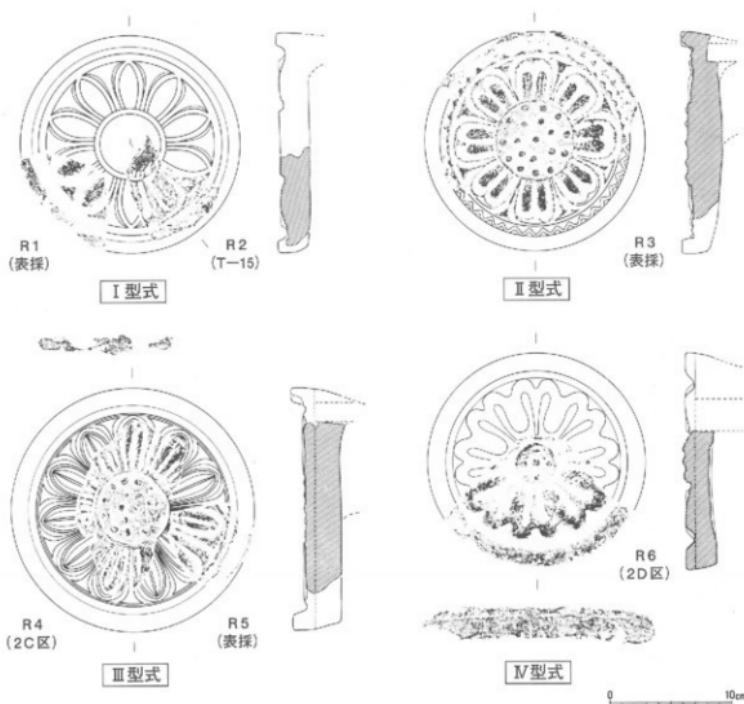
	T-12	T-14	T-15	T-16	T-17	T-18	T-21a	T-21b	2C区	2D区	2E区	表揚	合計	比率
軒丸瓦	I型式		1									1	2	12%
	II型式			1				2	1	1		1	6	36%
	III型式								1			1	2	12%
	IV型式		1								5		6	36%
合計			2	1				2	2	6		3	16	100%

	T-12	T-14	T-15	T-16	T-17	T-18	T-21a	T-21b	2C区	2D区	2E区	表揚	小計	比率	合計	比率
軒平瓦	I型式A								2			2	6		10	30%
	I型式B					1		1	1			3	9			
	I型式C	1					1	2				4	12			
	I型式D		1									1	3			
II型式A												6	20		16	52%
												4	12			
												5	17			
												1	3			
III型式B	2		1					1	1			4	12		1	3%
												1	3			
												4	12			
												1	3			
IV型式C	1	3										5	17		1	3%
												1	3			
												4	12			
												1	3			
V型式D												4	12	4	12%	
												1	3	1	3%	
												1	3	1	3%	
												1	3	1	3%	
合計	1	1	12	1	1	1	4	4	4	4	1	2	32	100%	32	100%

いては理由はよく分からぬが直線的に整形されている。瓦当裏面は板状工具による一定方向のハラケズリで、これにより断面形は直線的で、瓦当厚24mmと薄く仕上げられている。胎土には、1mm以下の長石・石英を主体に、角閃石・雲母・赤色土粒をやや多く含み、2~3mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅穢で暗灰~灰色を呈する。丸瓦との接合法は不明である。

Ⅱ型式（複弁八弁蓮華文軒丸瓦 R3） いわゆる法隆寺式軒丸瓦をモデルとする。合計6点が出土し、軒丸瓦全体の38%を占めることから、今岡廃寺に使用された主要な軒丸瓦と考えられる。R3は以前から紹介されていた採集品で、ほぼ全形を留めており、瓦当直径180mmを測る。中房は直径66mm・中房比47.8と大きく、断面は平坦な台形で突出も低く、周縁に圈縁がない。中房内には、1+7+11の大粒な蓮子が飾られる。蓮弁は、弁長35mm・弁幅32mm、蓮弁比1.1と幅広で、照り起りは弱い。弁端は丸く反転し、中央の切り込み反転は子葉まで及ばない。蓮弁内には、横断面が扁平な半円形を呈す子葉を2個、配している。間弁はT字形で、脚部は中房まで達する。内区と外区は幅3mmの沈線により明確に区画される。外区内縁の文様は、幅3mmの沈線を挟んで外向凸鋸歯文と内向凸鋸歯文を組み合わせた、線錐歯文の凸凹を逆転させたもので、鋸歯数は42個前後と想定される。外縁は内縁と独立した直立素文縁で、幅12mm・高さ8mmを測る。瓦当文様を総合的にみると、内区・外区とも正確に割り付けられ、文様も細部まで丁寧に製作されており、非常に秀逸な造形となっている。ただし、文様高は低く、立体感にはやや欠ける。瓦当外周はナデ調整である。瓦当裏面も丁寧なナデ調整で、断面形は凸レンズ状になっている。丸瓦との接合法は、瓦当裏面の半蔵門弧形を呈す丸瓦接合溝から、印能つぎ法2Bと考えられる。この丸瓦接合溝は、円弧の直径15cm、幅15mm、深さ4~8mmを測る。また、接合痕から、接合する丸瓦の先端は無加工で、丸瓦の上面に6mm、下面に15mm程の厚さで接合粘土を盛り付けていたと考えられる。なお、Ⅱ型式の細部特徴として、蓮弁を縁取る凸線と間弁脚部末端が、中房周縁で一体化する部分としない部分がある。また、内区に7か所の範塙が認められる（第26図）。Ⅱ型式は合計6点出土しているが、この細部特徴とともに検討した結果、すべて同一の範塙により製作されており、Ⅱ型式の範塙は1個体のみであることが判明した。胎土には、1mm以下の石英・長石を主体に、角閃石・雲母・赤色土粒をやや多く含み、2~4mm大の砂粒も少量認められる。焼成は、一部にやや軟質のものがあるものの総じて堅穢で、青灰~灰白色を呈する。

Ⅲ型式（秦弁十一弁蓮華文軒丸瓦 R4・R5） 合計2点出土し、軒丸瓦全体の12%を占める。瓦当直径は推定194mmで、I・II型式に比べ大型である。中房は断面凹状に窪んでおり、内部に1+7+11の扁平な蓮子を配する。中房周縁には幅2mmの低い圈縁が巡り、蓮弁と区画している。蓮弁は、弁長44mm・弁幅19mmを測る細長い紡錘形で、中央には稜線を表現した断面V字形の溝が通っている。間弁はT字形で、中房と同じく窪んでおり、脚部は中房まで達している。蓮弁と間弁は、蓮弁を縁取る断面三角形の凸線により区画されている。外区文様はなく、内区と外縁は、幅3mmの沈線により区画される。外縁は直立素文縁で、高さ11mmと高く突出する。瓦当文様を総合的にみると、割り付けは比較的丁寧になされているが、文様はやや粗雑で、上述の通り本来凸表現である文様が凹表現となっていることから、立体感に欠けた平板な造形となっている。また、中房比・蓮弁比がI型式と近似した数値である一方、中房形態はII型式と類似しており、両者の影響を受けてIII型式が成立したことを窺わせる。瓦当外周はナデ調整である。瓦当裏面もナデ調整で、断面形は直線的である。瓦当厚は31mmと厚い。丸瓦との接合は、R4上面に丸瓦の布目痕が残ることや、瓦当断面中に粘土接合面があることから、まず浅い範塙に瓦当面の粘土を充填し、椎型と丸瓦を設置した後、丸瓦先端を包み込むように、



第25図 今岡廃寺出土軒丸瓦(1/4)

第4表 今岡廃寺出土軒丸瓦一覧(計測値単位:mm)

軒丸瓦	直様	内 区						外 区						中房比	蓮弁比	瓦当厚			
		中 房			蓮 弁			内 蓮			外 蓮(周縁)								
		径	高さ	蓮子数	弁区	弁長	弁幅	弁数	文様	径	文様	高さ	断面形・文様						
I型式	178	50	3	なし	7	136	37	16	10	蓮瓣文	6	—	14	7	直立・瓣文	36.2	2.3	24	
II型式	180	66	3	1+7+11	138	35	32	8	蓮瓣文	8	蓮瓣文	12	8	直立・瓣文	47.6	1.1	28		
III型式	194	58	—1	1+7+11	158	44	19	11	蓮瓣文	—	—	18	11	直立・瓣文	36.7	2.3	31		
IV型式	177	32	3	1+4	137	48	11	8	蓮瓣文	—	—	20	7	外傾・瓣文	23.4	1.1	20		

※中房比：中房径+弁区径×100 蓼弁比：弁長+弁幅

瓦当裏面全体に粘土を充填したと考えられる。胎土は、1mm以下の石英・長石を主体に、角閃石・雲母をやや多く含み、2~4mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅硬で、灰~灰白色を呈する。

IV型式(複弁八弁蓮瓣文軒丸瓦 R6) 今回の調査で初めて確認した型式の軒丸瓦である。合計6点が出土し、軒丸瓦全体の38%を占めるが、小片が多いことから実際はもう少し低い数値になると思われる。破片から推定復元した瓦当直径は177mmで、I~III型式に比べやや小形である。中房は直径32mm・中房比23.4と小さく、断面台形で突出しており、内部に1+4のしっかりした蓮子を配している。



—: 茄傷の位置と方向
〇: 蓬弁を縦取る凸線と間弁が接する箇所

第26図 軒丸瓦Ⅱ型式の細部特徴

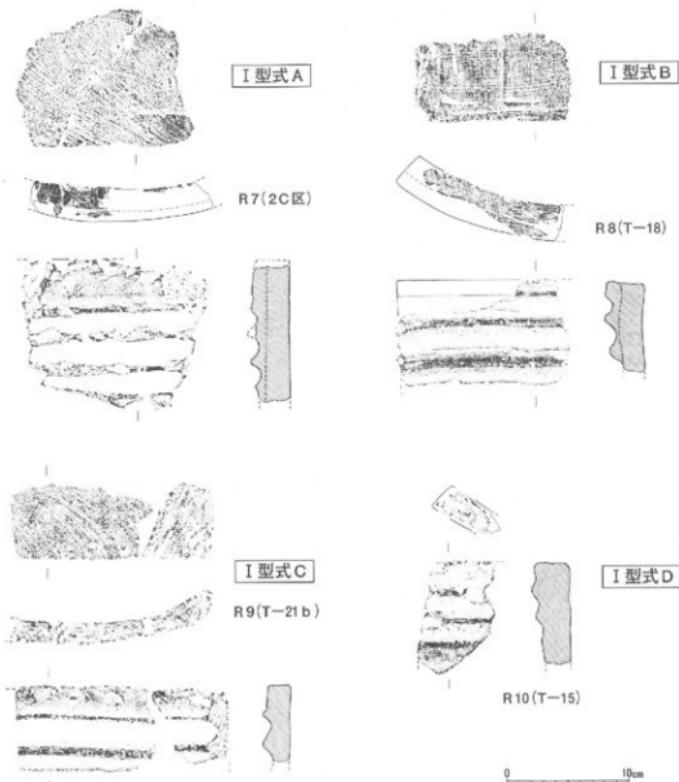
と丸瓦を設置した後、丸瓦先端を包み込むように、瓦当裏面全体に粘土を充填したと考えられる。胎土は2mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石・赤色土粒を多く含み、2~5mmの砂粒も少量認められる。焼成は総じてやや軟質で、にぶい黄褐色を呈するものが多い。

3. 軒平瓦(第27・28図)

I型式(素文額面施文軒平瓦) 合計10点が出土し、軒平瓦全体に占める割合が30%と、Ⅱ型式に次いで多く使用された軒平瓦である。瓦当部は素文で、額面に平行凹線文を施す。額面の文様構成からIA~IDの4種に細分したが、製作技法からみると、額面に粘土を貼り足すIA・IBと、平瓦をそのまま利用するIC・IDの2種に分けることができる。いずれも、額の形態は直線額で、製作は粘土板桶巻作りによる。凹面の湾曲はゆるやかで、直径44cm前後の円弧を描く。胎土は1mm以下の石英・長石を主体に、角閃石・雲母・赤色土粒をやや多く含み、2~5mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅緻なものから、やや軟質のものまであり、色調も灰色~灰褐色を呈する。各型式の出土数はIA:IB:IC:ID=2:3:4:1で、作りが最もしっかりしたIAと、最も粗雑なIDがやや少ない。先述の製作技法別では、同数となっている。

I型式A(R7) 瓦当面はヘラ状工具による裁断後、未調整である。額面には厚さ10mm程の粘土を貼り足し、瓦当面から40mmの間を空け、凹線文を3条接して施文している。各凹線は幅22~25mm・断面U字形で、両端は押し出された粘土により凸帶状を呈する。そのため、文様としては3条の凹線文と4条の凸帶文を組み合わせた造形となっている。文様の特徴から、施文は分割前に回転台上で行われ、工具ではなく、人差し指・中指・薬指で押さえつけるように施したと考えられる。平瓦部は厚さ約18mmを測り、凹面には布目圧痕と幅約50mmの棒板圧痕が認められる。布目密度は1cmあたり縦7本・横8本とやや粗い。瓦当部付近は叩き締めが足りないため、粘土板糸切り痕がよく残っている。

I型式B(R8) 瓦当面はヘラ状工具による裁断後、未調整である。額面に厚さ約10mmの粘土を貼り足し、瓦当面から12mmの間を空け、凹線文を3条以上接して施文している。各凹線は幅20~25mm・断面U字形で、IA同様の施文方法による。側面は摩耗のため不明瞭であるが、分割後未調整と考えら



第27図 今岡廃寺出土軒丸瓦①(1/4)

第5表 今岡廃寺出土軒平瓦一覧 (計測値単位: mm)

軒平瓦	瓦 当 面					頭 部			全長	頭の形態	製作技法
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	文 横	文種	条数	文種選さ			
I型式A				26	素文	回路文	3	7~8	18~20	直縫頭	粘土板橋巻作り
I型式B (236)	(38)	(260)	28	素文	回路文	3以上	6~8	18~22	直縫頭	粘土板橋巻作り	
I型式C				18	素文	回路文	2以上	7	20	直縫頭	粘土板橋巻作り
I型式D				24	素文	回路文	3	2~4	12~18	直縫頭	粘土板橋巻作り

軒平瓦	瓦 当 面					頭 部			全長	頭の形態	製作技法
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区幅	内区横	外区幅	外区横			
II型式A	226	47	302	57	三重弧文	12~14・12~15・12~16	2~4	曲縫頭	粘土板橋巻作り		
II型式B	219	48	262	48	三重弧文	10~12・4~10・10~11	2~7	曲縫頭	粘土板橋巻作り		
II型式C	226	47	263	46	三重弧文	12~15・5~11・11~12	3~5	曲縫頭	粘土板橋巻作り		
II型式D				48	三重弧文	21~25・7~8・5~6	2~3	曲縫頭	粘土板橋巻作り		

軒平瓦	瓦 当 面										全長	頭の形態	製作技法
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区幅	内区横	外区幅	外区横	脇幅	文種選さ			
直型式	256	64	285	56	22	均縫箋草文	16	18	実際 (60)	2	直縫頭	粘土板一枚作り	
II型式	251	48	299	56	40	均縫箋草文	5~8	5~8	素文	30	4	直縫頭	粘土板一枚作り
V型式						半縫箋草文	—	9	素文	—	5	段頭	粘土板一枚作り

れる。凹面の布目密度は1cmあたり縦・横11本と細かい。その他の特徴は、ⅠAと共通する。

I型式C(R9) 平瓦をそのまま利用しており、瓦当部は裁断後未調整である。顎面には、瓦当面から約26mmの間を空け、凹線文を2条以上接して施文している。各凹線は幅約25mm・断面U字形で、ⅠA同様の施文方法による。側面調整は不明瞭で、凸面側縁を面取りする。平瓦部は、厚さ約18mmを測る。凹面には粘土板糸切り痕がよく残るが、桶の棒板圧痕・布目圧痕は摩耗のためか観察できない。

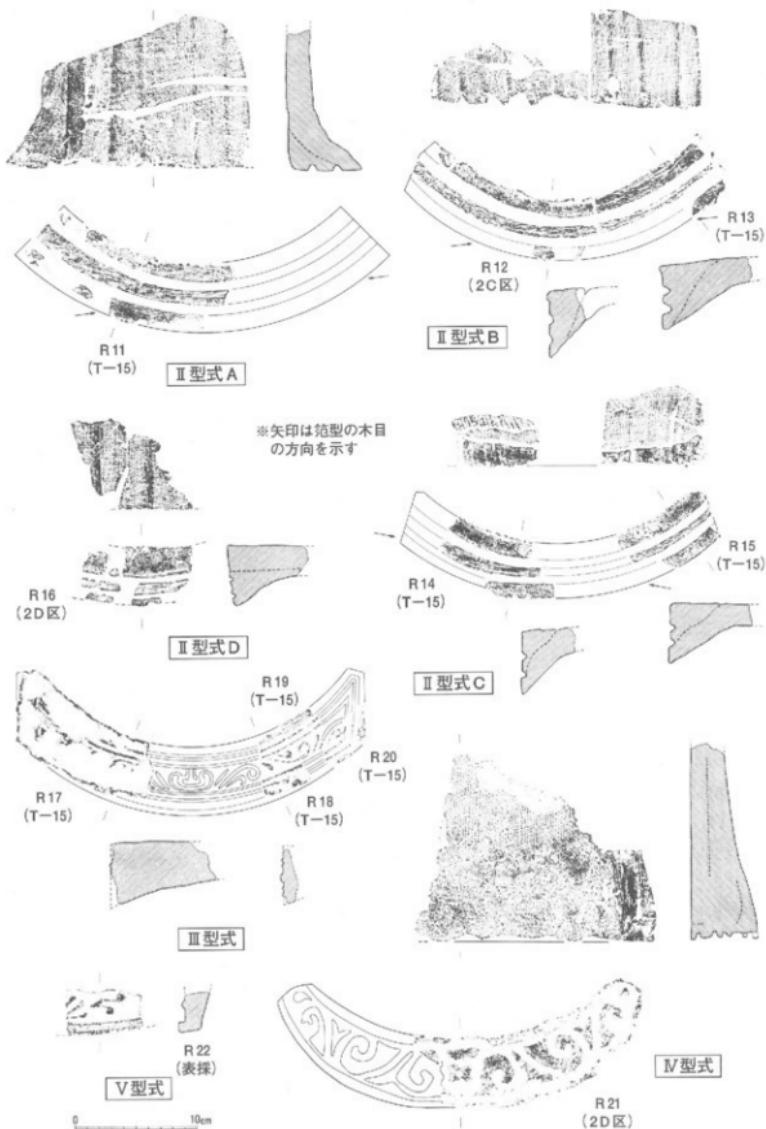
I型式D(R10) 平瓦をそのまま利用しており、瓦当部は裁断後未調整である。顎面には、瓦当面から約5mmの間を空け、凹線文を3条接して施している。各凹線は、幅15~20mm・断面U字形で、ⅠA同様の施文方法による。平瓦部は厚さ約20mmを測るが、小片で摩耗も激しく、製作痕跡は観察できない。R10は、瓦当側に向かって狭くなるように分割されているが、理由はよく分からぬ。

Ⅱ型式(三重弧文軒平瓦) 合計16点出土し、軒平瓦全体に占める割合が52%と、今岡廃寺に使用された主要な軒平瓦ということができる。瓦当文様からⅡA~ⅡDの4種に細分したが、施文方法からみると、範型によるⅡA~ⅡC、工具によるⅡDに大別できる。前者は、3種類の範型により製作されており、それぞれⅡA~ⅡCとした。瓦当面の仕上げはⅡAが最も丁寧で、ⅡB~ⅡDはやや粗い。製作技法はいずれも粘土板桶巻作りによるものである。各型式の出土数はⅡA:ⅡB:ⅡC:ⅡD=6:4:5:1と、ⅡA~ⅡCがほぼ同率で、ⅡDはイレギュラーな存在と考えられる。胎土には、1mm以下の石英・長石を主体に、角閃石・雲母をやや多く含み、2~5mm大的砂粒も少量認められる。焼成は堅緻で、暗青灰~灰色を呈する。

Ⅱ型式A(R11) 各弧線の幅は12~16mmを測り、均等で整っている。范型押捺後未調整であることから、瓦当面は平坦で、範型の木目圧痕が平行条線となって残っており、その角度は右上がり9度を測る。弧線を区画する凹線は、幅約8mm・深さ2~4mmで、瓦范から外した後、棒状の工具でより深くなぞっており、断面U字形を呈する。顎の形態は曲線顎で、顎面は横方向の強いナデ調整となっている。側面は分割後未調整で、瓦当部の側面下端を面取りするものもある。凹面の湾曲は直径32cm前後の円弧を描く。また、瓦当部断面中には粘土接合面が認められる。なお、R11の顎面・側面には、赤色顔料が部分的に認められ、軒平瓦を乗せる茅負を赤彩する際に付着したものと考えられる。平瓦部は厚さ約18mmを測り、凹面には幅25~42mmの棒板圧痕・布目圧痕・粘土板糸切り痕が全面に認められる。布目密度は1cmあたり縦11本・横12本と細かい。R11には棒板圧痕と直交する扁平な溝が認められ、この中にも布目圧痕があることから、棒板固定具の圧痕である可能性も考えられる。平瓦部凸面は、瓦当部同様ナデ調整となっている。側面は分割後未調整で、残された砂粒の動きから、分割は凹面側から、狭端→広端に向かって行われたことが分かる。

Ⅱ型式B(R12・R13) 瓦当幅がⅡAに比べやや狭く、各弧線は幅4~12mmを測る。特に、第2弧線は不均等で、幅が左右で大きく異なる。瓦当面は平坦で、範型木目圧痕の角度は右上がり7度を測る。弧線を区画する凹線は、幅7~10mm・深さ2~8mmとばらつきがある。これは、凹線内の調整を行われず、範型から外したままになっている部分があるためで、その部分では断面が浅い逆台形や逆三角形を呈し、木目や范傷がよく残っている。また、第1弧線の上縁には、範型押捺時にはみ出た粘土が縁取りのように残っている。凹面の湾曲は直径30cm前後の円弧を描き、ⅡAに比べやや小形である。R13の瓦当面右端には、範型端部の圧痕が残っている(図版10-2)。側面は分割後未調整で、瓦当側上面端を面取りするものもある。その他の特徴は、ⅡAと共通する。

Ⅱ型式C(R14・R15) 瓦当幅がⅡAに比べやや狭く、各弧線の幅は5~15mmと不均等である。特に、



第28図 今岡庵寺出土軒平瓦②(1/4)



第29図 軒平瓦Ⅱ型式A～Cの製作工程

第2弧線は幅が左右で大きく異なる。瓦当面に残された範型木目痕の角度は左上がり12度を測る。また、弧線を区画する凹線は、幅5～6mm・深さ3～5mmと比較的まとまっている。瓦当面はⅡB同様やや粗雑で、範型の木目や範傷がよく残り、第1弧線上縁には範型押捺時にはみ出た粘土が縁取りのように残っている。ⅡCの特徴として、第3弧線が第1・2弧線より2mm突出しており、ⅡA・ⅡBの各弧線と同じ高さであるのに対し、大きな違いとなっている。凹面の湾曲は直径32cm前後の円弧を描く。また、R14の門面では、瓦当部と平瓦部の粘土接合面が明瞭に観察できる(図版10-2)。側面は分割後未調整で、瓦当側面上端を面取りするものもある。その他の特徴は、ⅡAと共に通する。

Ⅱ型式A～Cの製作技法(第29図) Ⅱ型式A～Cの製作について、上述の製作痕跡から、1：回転台上に桶を設置し、布筒をかぶせた後、桶下端に粘土紐を巻き付ける。2：粘土板を粘土紐の上に被せるように桶に巻き付けた後、叩いて密着させ、ナデ調整により叩き圧痕を消す。3：全体を反転し、範型を4か所に押捺する。4：桶・布筒を取り外した後、鎌状工具で4分割する。分割は凹面側から狭端→広端に向かって行う。その後、瓦当面の凹線、側面を調整して完成。一という工程が復元できる。

Ⅱ型式D(R16) 瓦当面の凹線施文法がⅡ型式A～Cと異なり、範型ではなく棒状工具で1本づつ描く。瓦当面はナデ調整で、弧線の幅は上から18mm・7mm・6mmと、第1弧線が幅広くなっている。凹線は幅3～4mm、深さ2～3mmで、断面U字形を呈する。瓦当部の成形技法もⅡ型式A～Cと異なり、顎面に粘土を貼り足して成形している。この他の特徴は、Ⅱ型式A～Cと共に通する。

Ⅲ型式(均整唐草文軒平瓦R17～R20) 今回の調査で初めて確認した、平城宮6663型式³¹をモデルとする軒平瓦である。今回の調査では4個体が出土したが、いずれも小片で、軒平瓦全体に占める割合は1割程度と考えられる。出土したのは瓦当部の左右1/3ほどであるが、内区中央に花頭・中心葉が配され、三葉1組の唐草文が左右に3単位づつ展開すると想定される。現状では、唐草文の右第2単位と右第3単位の一部、左第1単位の一部が確認できる。この唐草文帯を二重の凸線で閉んで内区とし、その幅は22mmを測る。なお、唐草文の右第3単位支葉と右脇区内側凸線との間には範傷が認められる(図版10-3)。外線は非常に低く、文様だけが突出したような造形となっている。顎の形態は直線顎で、瓦当側面上端を面取りする。製作は一枚作りによるもので、門面の屈曲は直径32cm前後の円弧を描く。平瓦部と瓦当部の接合方法は不明である。門面・凸面・側面の調整は、摩耗が激しく不明である。胎土は1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石・赤色土粒をやや多く含み、2～4mm大の砂粒も少量認められる。焼成はやや軟質で、にぶい黄褐色を呈する。このⅢ型式について、平城宮6663Cを忠実に模倣した美作国分寺所用軒平瓦I-a(以下、国分寺I-a)と照合した結果、

1：唐草文・突線が、国分寺I-aでは太くしっかりしているのに対し、Ⅲ型式は細く繊細な表現で、割り付けも微妙に異なる。2：子葉先端の巻き込みが、国分寺I-aではきれいに巻いているのに対し、Ⅲ型式は団子状に潰れている。3：外縁が、国分寺I-aでは突出するが、Ⅲ型式は低平である。4：頸の形態が、国分寺I-aでは曲線頸であるのに対し、Ⅲ型式は直線頸である。…という違いから、範型だけでなく、製作技法も異なることが判明した。

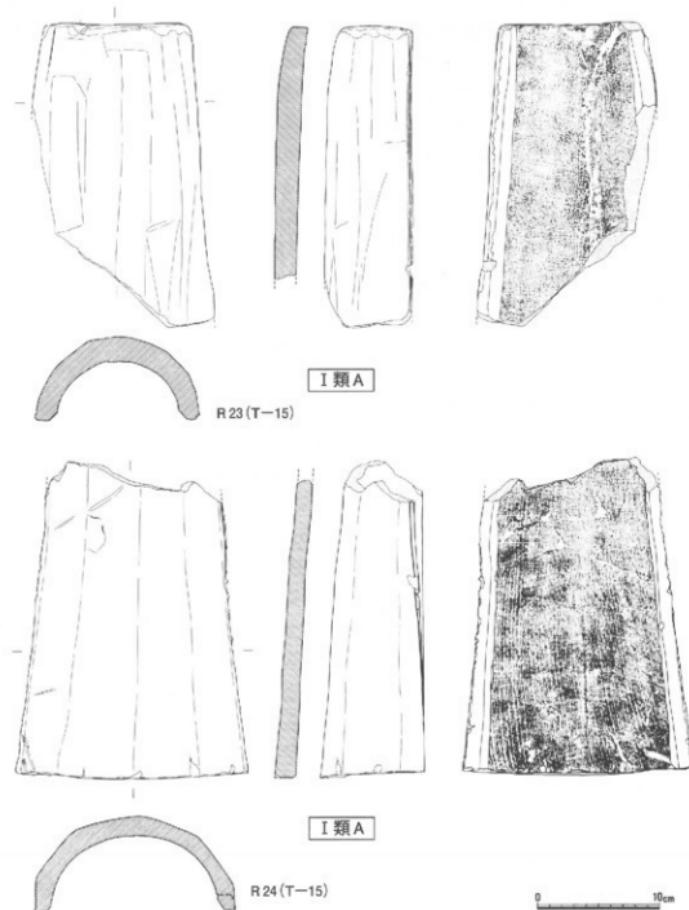
IV型式(均整唐草文軒平瓦 R21) 今回の調査で初めて確認した軒平瓦である。1個体のみ出土したが、新丸瓦IV型式と組み合う可能性が高く、軒平瓦全体に占める割合は1~2割程度と考えられる。瓦当面は中央部が一番広く、両端に向かって狭くなる。文様はかなり形骸化した均整唐草文で、中央上半に半円形、中央下半に円孔をもつX字形の中心飾りを配し、そこから二葉1単位の唐草文が左右に3単位づつ展開する。各葉は太い蕨手状の造形で、支葉と子葉は一体化している。文様帶は、同じ高さで突出するため、立体感に乏しく、平板な印象を受ける。外縁は幅4mmで高く突出し、瓦当上端・下端を縁取るが、脇区には及んでいない。頸の形態は直線頸である。製作は一枚作りによるもので、凹面の湾曲は直径35cm前後の円弧を描く。凹面には1cmあたり縦6本・横5本の粗い布目圧痕が残るが、瓦当接合部の布目は横方向の強いナデ調整により消されている。凸面は縦方向のケズリ後、ナデ調整となっている。側面には凹面と同じ布目圧痕が認められ、粘土板を置く凸型台の縁辺が耕状に高くなっていた可能性が考えられる。断面中には粘土接合面が観察でき、平瓦部は2層の粘土板により形成され、頸に3層目の粘土を貼り足して瓦当部を作り出している。平瓦部と瓦当部は別々に作って接合している。胎土は1mm以下の長石・石英・角閃石をやや多く含み、2~5mm大の砂粒も少量認められる。焼成はやや軟質で、にぶい褐色を呈する。

V型式(半截菊唐草文軒平瓦 R22) 1点のみ採集されており、便宜上V型式としたが、今岡廃寺とは直接関係しない瓦である。R22は頸の小片で、瓦当中央に配される半截菊花文と、唐草文の右第1単位が認められる。唐草文は主葉と子葉が一体化し、先端が丸く潰れている。外縁は幅9mm、高さ4.5mmで、頸下端での瓦当厚は19mmを測る。頸面と頸裏面はナデ調整である。胎土は1mm前後の長石を少量含み、焼成は堅緻で黒灰色を呈する。これらの特徴から、近世後半の播磨産と考えられる。

4. 丸瓦(第30・31図)

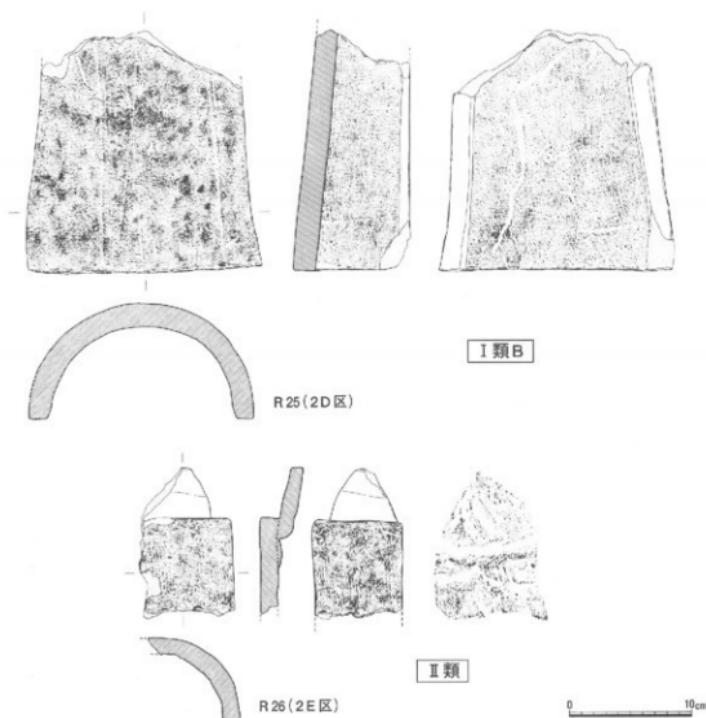
概要 丸瓦は、いわゆる行基式(1類)と正縁式(2類)に大別できる。数量的には1類が圧倒的に多く、9割以上を占めると考えられる。さらに1類は、製作技法・大きさからIAとIBに細分できる。IAとIBの数量比は、識別不能の細片が多いため正確には分からぬが、IAが半数以上を占めると予想される。製作技法は、いずれも粘土板模骨巻作りである。

I類A(R23・R24) 全形が分かる資料はないが、全長は推定で40cm前後、広端幅16.5cm、狹端幅12cm、厚さ1.5~2cmを測る。広端側凹面は直径約15cm、狹端側凹面は直径約10cmの円弧を描く。凸面には、縦方向に幅3~5cmの帯状平坦面が認められ、ヘラ状工具で粘土をそぎ落とした痕跡と考えられる。凸面の最終調整は縦方向の丁寧なナデで、それ以前の成形痕は消されているが、凹面の布目圧痕は明瞭で、叩き締めを行っていると考えられる。凹面向側縁には、ヘラ状工具による粘土円筒分割のための目安線が観察できる個体が多い(図版11-2)。この目安線や粘土円筒分割時にめぐれた粘土が、凸面ナデ調整を切っていることから、凸面調整は粘土円筒分割前に終了していたと考えられる。粘土円筒の分割は、分割目安線の存在や側面に残る砂粒の動きから、柄の長い鎌状工具により凹面か



第30図 今岡廃寺出土丸瓦①(1/4)

ら行われ、広端から狭端に向かって分割したと考えられる。凹面には、全面に布目圧痕がしっかりと残り、その下に粘土板条切り痕が観察できる。布目密度は1cmあたり縦11本・横12本と細かい。また、R23の凹面中央には布筒の縦じ合わせ目の圧痕が、R24の凹面左側縁には粘土板の合わせ目が認められる。粘土板の合わせ目は狭端側から見てS字形で、合わせ目が観察できた個体はすべて同様であった。凹面側縁は、ヘラ状工具により広端から狭端に向かって面取りされる。広端面は裁断後未調整、狭端面はナデ調整となっている。これらの製作痕跡から、丸瓦IAの製作について、1：回転台上に



第31図 今岡廃寺出土丸瓦(2)(1/4)

模骨を設置し布筒をかぶせた後、粘土板を巻き付ける。2：粘土円筒の成形・調整(叩板で叩き締め→ヘラ状工具で表面の粘土を縱方向にそぎ落とす→縱方向にナデ調整)。3：回転台から降ろし、模骨・布筒を外した後、凸面に分割目安線を引き、柄の長い鎌状工具で凹面から分割。4：凹面側縁を取りし、広端面を裁断する。—という工程が復元できる。胎土は、1 mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、2～5 mmの大砂粒も少量認められる。焼成は堅緻なものからやや軟質のものまであり、色調も青灰色～灰～黄灰色とバラエティがある。

I類B(R 25) 全形が分かる資料はなく、全長・狭端幅は不明であるが、広端幅18.5cm・厚さ1.8～2 cmを測り、IAに比べ大形である。広端側凹面は直径16cm前後の円弧を描く。凸面調整は縱方向のナデで、それ以前の成形痕は消されているが、凹面の布目圧痕は明瞭で、叩き締めを行っていると考えられる。IAの凸面にみられた縱方向の帯状平坦面は認められない。凹面全面に、布目圧痕とその下に粘土板糸切り痕が観察できる。布目密度は1 cmあたり縦8本・横7本とやや粗い。側面は粘土円筒分割後未調整である。凹面側縁は、ヘラ状工具により広端から狭端に向かって面取りされる。広端

面は裁断後未調整である。胎土は、2mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、3~5mmの大砂粒も少量認められる。焼成は堅敏なものからやや軟質のものまであり、色調も青灰色~灰~黄褐色とバラエティがある。全体的に、IAに比べやや粗い仕上げとなっている。

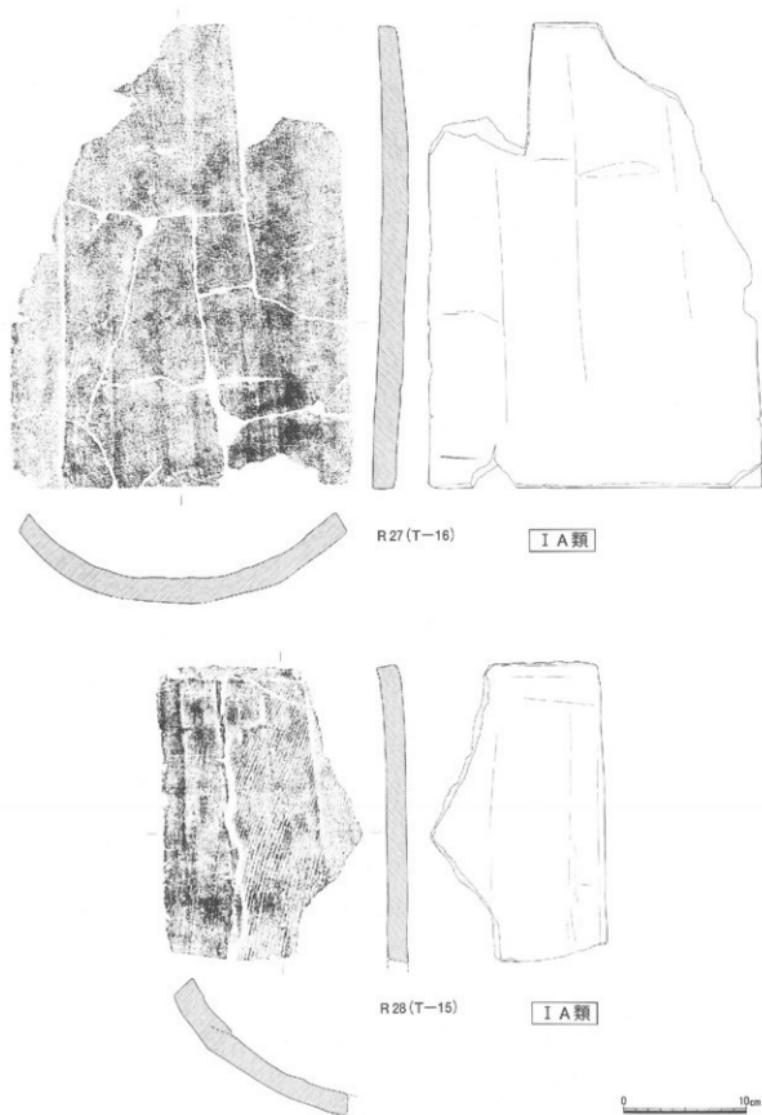
II類(R26) 全形が分かる資料はなく、全長・広端幅は不明である。R26は筒部上端と玉縁が約1/2残存し、筒部上端で幅13.5cm、厚さ1.5cmを測る。凸面は、瓦長軸に平行する繩巻叩板圧痕を部分的にナデ消しており、繩目密度は1cm幅あたり4条である。凹面には、R26では判読しにくいが、1cmあたり繩9本・横10本の細かい布目圧痕が残る。玉縁部は長さ4.2cm、厚さ1.2cmで、凸面・端面はナデ調整である。筒部と玉縁の段差は大きく、玉縁の成型は大脳瀧のB手法によると考えられる。玉縁には、粘土円筒分割前に三角形の切り込みが入れてあり、分割された玉縁は側面から見て斜めになっている。胎土は1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石・赤色土粒をやや多く含み、2~3mmの大砂粒も少量認められる。焼成はやや軟質のものが多く、色調はにぶい灰褐色~褐色を呈する。

5. 平瓦（第32~35図）

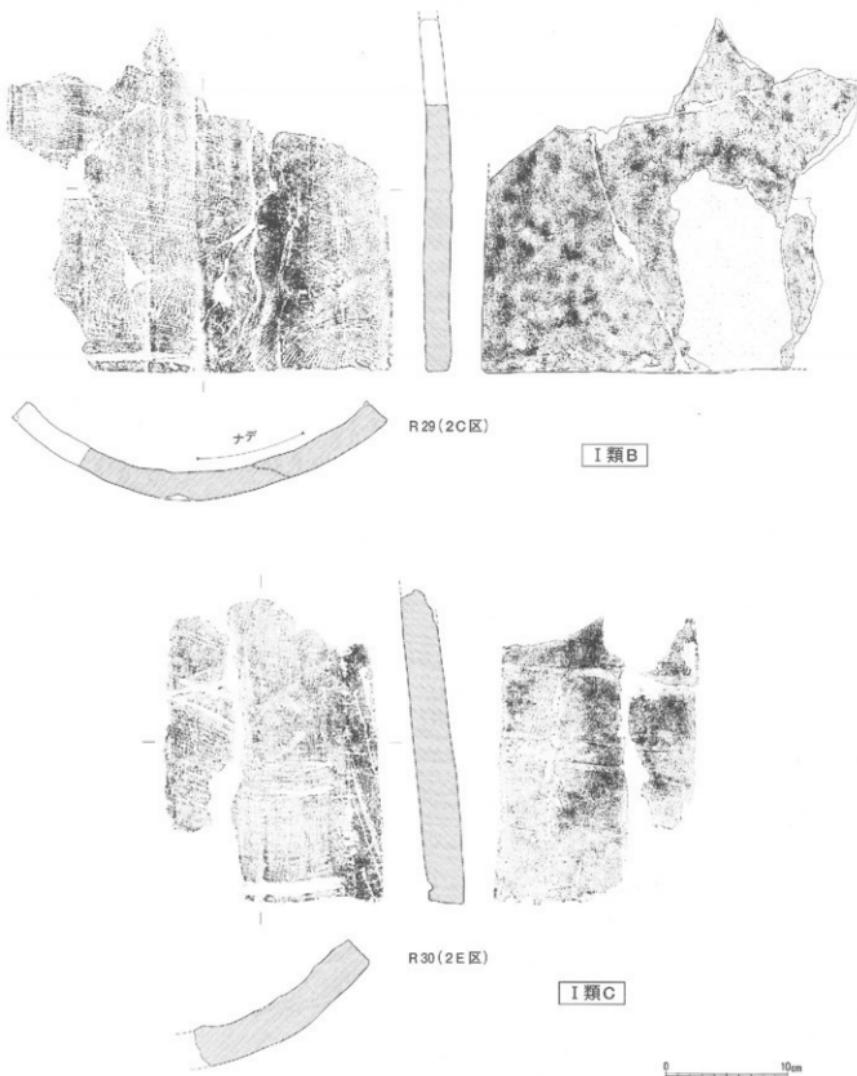
概要 平瓦は、凸面の最終調整(成形)から、I類(ナデ)・II類(刻線叩板による叩き)・III類(繩巻叩板による叩き)の3類型に大別できる。さらに、I類は製作技法・厚みからIA~ICの3種に、II類は叩板に施される刻線の違いからIIA~IIFの6種に、III類は凸面に残された繩目半軸方向の違いからIIIA・IIIBの2種に細別した。また、製作技法で分類すると、粘土板桶巻作りによるI類・IIA~IID、一枚作りによるIIE・IIF・III類に分けることができる。I~III類の数量比は、識別不能の細片が多いため正確には分からぬが、おおむねI類:I類:III類=6:2:2程度と予想される。さらに、I類ではIAが主体を占め、IB・ICは少ない。II類はIIA~IIDが主体で、IIE・IIFは数点を確認したのみである。III類では、IIIAが大部分を占め、IIIBは非常に少ない。

I類A(R27・R28) 全長38cm・広端幅27cm・狭端幅26cm・厚さ1.6~2.1cmを測り、広端部凹面の湾曲は直径34cm前後の円弧を描く。凹面全面に、布目圧痕と桶の棒板圧痕、その下に粘土板糸切り痕が認められる。棒板圧痕は幅24~38mmで、桶を構成する棒板の幅が不揃いであったことを窺わせる。棒板連繩の痕跡は観察できず、棒板は円筒にした際に内側になる面で逆綴したか、棒板側面を貫通する孔に紐を通して連繩したと考えられる。分割突帯の痕跡は認められない。布目密度は1cmあたり繩・横10本と細かい。R28の凹面には粘土板の合わせ日が認められ、狭端側から見てS字形となっている。凸面には縦方向に幅7~8cmの帯状平坦面が認められ、ヘラ状工具で粘土をそぎ落とした痕跡と考えられる。凸面の最終調整は横方向のナデで、それ以前の成形痕は消されているが、凹面布目圧痕は明瞭で、叩き縮めを行っていると考えられる。粘土円筒の分割は、側面に残された砂粒の動きから、ヘラ状工具より凹面から行われ、広端から狭端に向かって分割したと考えられる。なお、粘土円筒分割時にめくれた粘土が凸面ナデ調整を切っており、凸面調整は粘土円筒分割前に終了していたことが分かる。広端面・側面は分割後未調整、狭端面はナデ調整となっている。胎土は、1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、2~3mmの大砂粒も少量認められる。焼成は堅敏なものが主体を占めるが、一部軟質のものもあり、色調も青灰色~灰~にぶい黄褐色とバラエティがある。

I類B(R29) 全長・狭端幅は不明であるが、広端幅31cm・厚さ1.8~2.2cmを測る。広端部凹面の湾曲は直径40cm前後の円弧を描き、IAに比べ大形である。凹面には、全面に布目圧痕と桶の棒板圧痕、その下に粘土板糸切り痕が認められる。棒板圧痕は幅50~55mmで、比較的揃っている。棒板の逆綴痕



第32図 今岡廃寺出土平瓦①(1/4)



第33図 今岡魔寺出土平瓦②(1/4)

・分割突帯痕は認められない。布目密度には粗密があるが、1cmあたり縦7本・横8本とやや粗い。なお、R29の凹面には粘土板の合わせ目があり、これを中心に8~9cmの幅で布目圧痕をナデ消している。理由はよく分からぬが、合わせ目を禰染ませ、目立たなくするためと思われる。粘土板の合わせ目は、狹端側から見てZ字形である。IA凸面にみられた帶状平坦面は認められない。凸面の最終調整は縦方向のナデで、それ以前の成形痕は消されているが、凹面布目圧痕は明瞭で、叩き縮めを行っていると考えられる。粘土円筒の分割はIAと同じ手法によると思われる。広端面・側面は、分割後未調整である。胎土は、1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石・赤色土粒をやや多く含み、2~5mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅緻なものが主体を占めるが、一部軟質のものもあり、色調も青灰色~灰~にぶい黄褐色とバラエティがある。全体的にIAに比べ粗雑な印象を受ける。

I類C(R30) 全長・狹端幅は不明、広端幅推定32cm、厚さ3.0~3.2cmを測り、IA・IBに比べ厚みがある。凹面には、全面に布目圧痕と桶の棒板圧痕、その下に粘土板糸切り痕が認められる。棒板圧痕は幅32~38mmで、IA・IBに比べやや狭い。棒板連継痕・分割突帯痕は認められない。布目密度は1cmあたり縦9本・横10本と細かい。IA凸面にみられた帶状平坦面は認められない。凸面の最終調整は横方向のナデで、それ以前の成形痕は消されているが、凹面の布目圧痕は明瞭で、叩き縮めを行っていると考えられる。粘土円筒の分割は、側面に残された砂粒の動きから、ヘラ状工具により凹面から行われ、狹端から広端に向かって分割している。広端面・側面は分割後未調整である。胎土は、1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、2~3mm大の砂粒も少量認められる。焼成はやや軟質のものが主体を占め、色調は白灰色~にぶい黄褐色を呈する。全体的に、凸面最終調整がナデであることを除けば、II B・II Cと共に通する特徴をもつ。

II類A(R31) R31は広端部と側面が一部残存する。全形は不明で、厚さ2.2~2.5cmを測る。凹面全面に、布目圧痕と桶の棒板圧痕、粘土板糸切り痕が認められる。棒板圧痕は幅32mmで、布目密度は1cmあたり縦7本・横8本とやや粗い。凸面には、菱形に刻線した叩板による叩き圧痕が全面に残り、幅4mmの凸線を挟んで、縦4~6mm・横3~4mmの菱形を呈す四部が密に並ぶ。広端面と側面は分割後未調整である。胎土は1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、2~5mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅緻なものとやや軟質のものがあり、色調は灰~にぶい黄褐色を呈する。

II類B(R33) R33は側面が一部残存する。全形は不明で、厚さ3.0~3.2cmを測る。凹面の湾曲は直径40cm前後の円弧を描く。凹面全面に、布目圧痕と桶の棒板圧痕が認められる。棒板圧痕は幅38mmで、布目密度は1cmあたり縦8本・横7本とやや粗い。凸面には、斜格子状に刻線した叩板による叩き圧痕が全面に残り、2~3mmの凸線を挟んで縦13mm・横4mmの平行四辺形を呈す四部が密に並ぶ。側面は分割後未調整で、凸面側縁は面取りされる。R33には粘土板の合わせ目が認められ、狹端側から見てZ字形となっている。その他の特徴はII Aと共に通する。なお、R32の凸面にはII AとII Bの叩板圧痕が認められ、両者が同時存在したこと事を示している。

II類C(R34) R34は広端部と側面が一部残存する。全形は不明で、厚さ2.2~2.8cmを測る。凹面の湾曲は直径44cm前後の円弧を描く。凹面全面に、布目圧痕と桶の棒板圧痕が認められる。棒板圧痕は幅33~41mmで、布目密度は1cmあたり縦・横とも10本と細かい。凸面には、格子状に刻線した叩板による叩き圧痕が全面に残り、3~4mmの凸線を挟んで縦3~6mm・横7~9mmの長方形を呈す四部が密に並んでいる。R34では、凹面広端側に叩きが及ばず、凹面広端側の布目圧痕もナデ消されているが、理由はよく分からぬ。広端面は裁断後未調整である。その他の特徴はII Aと共に通する。

II類D (R 35) R 35は狹端部と側面が一部残存する。全形は不明で、厚さ1.3~1.7cmを測る。凹面には、わずかに布日圧痕と桶の棒板压痕、粘土板糸切り痕が認められる。布日は細かいが、摩耗のため密度までは確認できない。凸面には、平行線内に斜行線が入る刻線を施した叩板による叩き圧痕が全面に残る。狹端面・側面の調整は不明で、側縁は凹面・凸面両側とも面取りする。胎土は1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石・赤色上粒をやや多く含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

II類E (R 36) 全形は不明で、厚さ1.8cmを測る。製作は一枚作りによるもので、凹面全面に布日圧痕が残る。布日密度は1cmあたり縦・横とも9本と細かい。凸面には、菱形の刻線をした叩板による叩き圧痕が全面に残り、幅3mmの凸線を挟んで縦30mm・横20mmの大形菱形を呈す四部が密に並んでいる。胎土は1mm以下の長石・石英・雲母を少量含む。焼成は極めて堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。

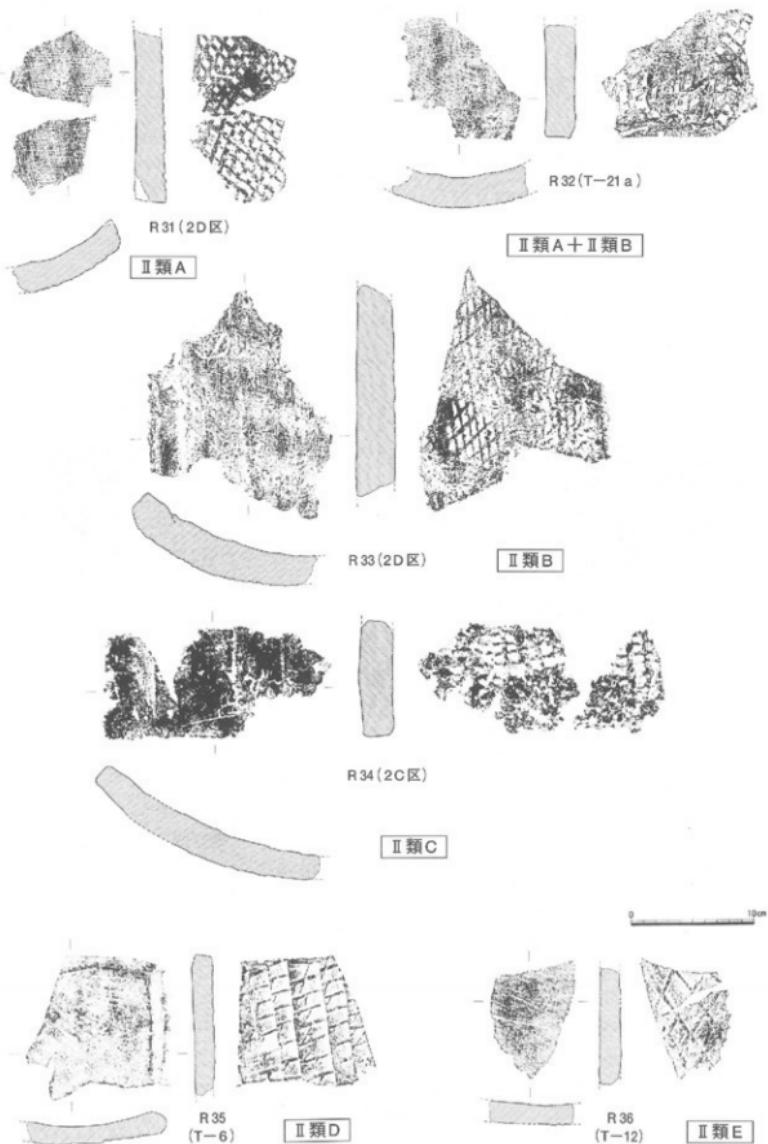
II類F (R 37) R 37は狹端部と側面が残存する。狹端幅20.7cm・厚さ2.5cmを測り、ほかの平瓦に比べかなり小形である。製作は一枚作りによるもので、凹面には布日圧痕と粘土板糸切り痕が認められる。布日密度は1cmあたり縦9本・横8本と細かい。凸面には、菱形・三角形・平行四辺形などを組み合わせた不整形な刻線を施す叩き板による叩き圧痕が全面に残る。狹端面・側面は裁断後未調整で、側縁は凹面側・凸面側とも面取りしている。胎土は1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石を少量含む。焼成は極めて堅緻で、色調は暗灰色を呈する。なお、R 37は凸面に厚さ8mmの粘土を貼り足して製作されているが、粘土を貼り足さない厚さ1.8cm前後の薄手のものも存在する。

III類A (R 38) 全長34.8cm・広端幅25cm・狹端幅24cm・最大厚2.5cmを測り、製作は一枚作りによる。凹面の布日圧痕は板状工具による斜~横位のナデ調整によりほとんど消されている。部分的に残った布日密度は、1cmあたり縦11本・横12本と細かい。凸面には、繩巻叩板による叩き圧痕が全面に残る。繩目主軸は瓦の長軸に平行し、繩目密度は1cm幅あたり3条とやや粗い。繩粒の1単位は長さ5mm・幅1mmと細長い。R 38では、この叩き圧痕が部分的に指頭圧痕で消えており、その配置はちょうど五指を広げた形となっている。また、広端面・狹端面・側面は裁断後未調整である。これらの痕跡から、III Aの製作について、1：粘土板を切り出す。2：円型台で叩き縮めを行った後、四辺を裁断する。3：反転させ、手で保持して凹面の布日圧痕をナデ消す。一という工程が復元できる。胎土は1mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、2~4mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅緻なものとやや軟質のものがあり、色調は前者で白灰色、後者でにぶい黄褐色となっている。

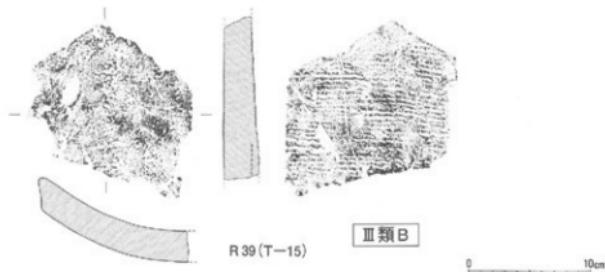
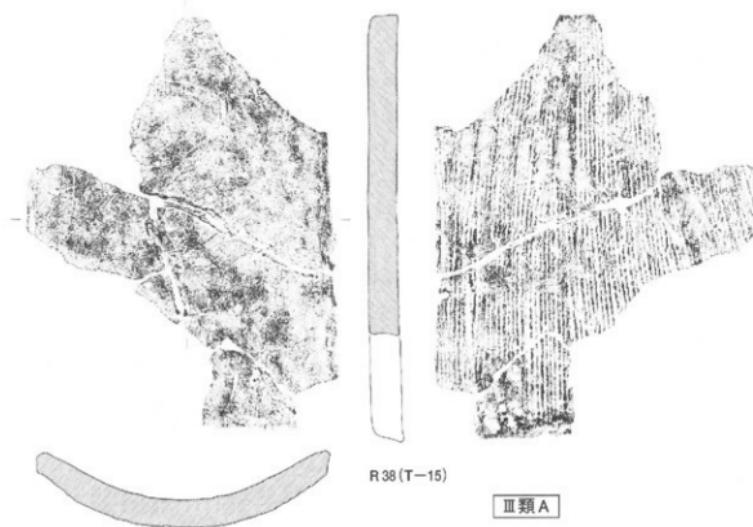
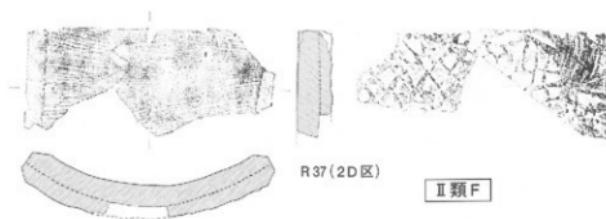
III類B (R 39) 繩目主軸が瓦の長軸に対し直交するほかは、III Aと共通する特徴をもつ。R 39は、凸面に粘土が1cmほど貼り足されており、III Bは軒平瓦の平瓦部である可能性も考えられる。

6. その他の瓦(第36図)

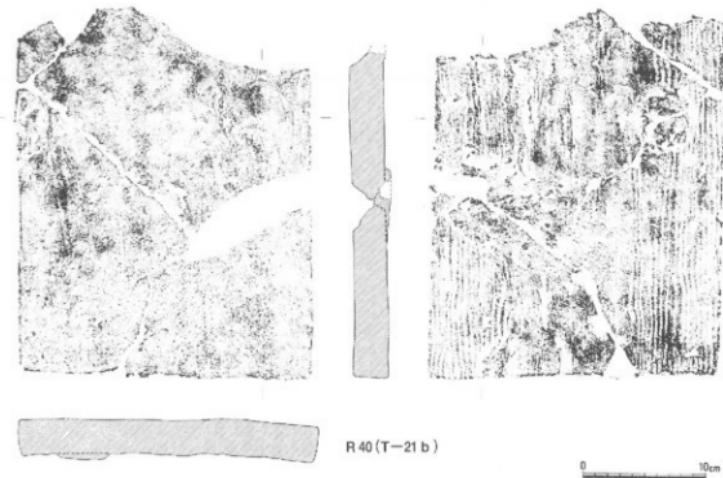
壇(R 41) R 41は1/3を欠損するが、長辺推定42cm・短辺23.5cmを測る長方形を呈する。厚さは30mmと薄手である。上面はナデ調整で、長辺2か所に弧状の切り込みが認められる。下面は長辺に平行する荒いハケメ調整で、上面のものと対になる弧状の切り込みがあるが、こちらは後から粘土で埋められている。また、高さを揃えるための円形粘土が、切り込みの反対側長辺よりに貼られている。弧状の切り込みの用途はよく分からぬが、壇上に設置するものの基部、あるいは日印の可能性を考えられる。側面は裁断後未調整である。胎土は、2mm以下の長石・石英を主体に、雲母・角閃石をやや多く含み、3~5mm大の砂粒も少量認められる。焼成は堅緻で、灰白色を呈する。



第34図 今岡廃寺出土平瓦③(1/4)



第35図 今岡庵寺出土平瓦④(1/4)



第36図 今岡庵寺出土物(1/4)

7. 軒瓦の系譜と年代

今岡庵寺の軒丸瓦については、第1章第1節で述べたように、伊藤晃によって資料紹介と編年案が提示されて以降、濱哲夫・亀田修一により検討がなされている。これに加え、今回の発掘調査により、今岡庵寺に使用された軒瓦として軒丸瓦4型式、軒平瓦4型式が確認できた。これらの軒瓦は、管見の限り他寺院との同範関係は認められず、他地域の影響のもと、あるいは独自に創出された軒瓦と考えられる。ここでは各軒瓦の特徴から、その系譜と年代を検討したいと思う。

軒丸瓦I型式の文様で特徴的な中房周縁を巡る沈線は、古新羅系の瓦に比較的多い特徴であることが指摘されている。¹⁰また、中房に蓮子がない、あるいは中央に一つだけと考えられる点も特異で、近隣では兵庫県小野市大寺庵寺、同じく加西市殿原庵寺など播磨に類例がある。¹¹また、瓦当裏面をヘラケツリし、直線的に薄く仕上げる手法は百濟の瓦に認められる。このように、軒丸瓦I型式は朝鮮半島系軒丸瓦の影響のもと創出された可能性が高く、その伝播経路として播磨を介していると考えられる。年代については決め手に欠けるが、ごく初期の例を除き、吉備地域で素弁蓮華文と朝鮮半島系の瓦が盛行るのは7世紀第3四半期であることから、軒丸瓦I型式もその時期のものと考えられる。

軒丸瓦II型式の特徴は、法隆寺式軒丸瓦の文様を忠実に模倣している点にある。ただし、細かな点で差異があり、1：中房周縁に圓線をもたない。2：子葉横断面が扁平な半円形。3：内区と外区を圓線ではなく沈線で区画する。4：外区分縁の線鋸歯文が凹凸逆転した表現になっている。5：外区分縁が独立した直立素文縁。6：丸瓦接合法が異なる。7：組み合う軒平瓦が法隆寺式軒平瓦(均整忍冬草文)ではなく、三重弧文軒平瓦(軒平瓦II型式)と考えられる。などが挙げられる。そのため、法隆寺との直接的な関係は考えにくく、法隆寺式軒瓦が展開した周辺地域から二次的に伝播したと考えられる。法隆寺式軒瓦は、大和を中心に法隆寺の庄倉がある播磨・讃岐・伊予に集中して分布

していることが指摘されている¹⁶。これら諸地域の法隆寺式軒丸瓦とⅡ型式を比較した場合、子葉の横断面形が播磨のものと共通した特徴をもつ。また地理的条件からも、大和(法隆寺)→播磨→美作(今岡廃寺)という伝播経路が想定されよう。年代については、中房比・蓮弁比の数値や、中房断面が平坦な台形で全体的に凹凸に乏しい平板な表現になっている点が、法隆寺式軒丸瓦でも新式の37B・Cに近似することから、7世紀第4四半期と考えられる。なお、英多郡に法隆寺の庄倉はない。

軒丸瓦Ⅲ型式の特徴として、内区文様が凹凸逆転した表現になっている点、そして中房比・蓮弁比の数値がⅠ型式と近似する一方、中房形態はⅡ型式と類似し、両者の強い影響のもと成立したと考えられる点が挙げられる。このうち、前者については文様表現の退化現象と考えられ、備後中谷廃寺に類例がある。後者のように、前代の軒瓦の意匠をもとに次代の軒瓦文様がデザインされる例は伊予法安寺でも認められ、地方における軒瓦文様の創出が他地域の影響ばかりでなく独自に行われる場合もあることを示している。年代については、先述の通りⅠ・Ⅱ型式の影響を受けて成立すること、文様表現が後出的であることに加え、瓦当が大型化していること、製作に模型が採用されていることから、8世紀前半に位置付けられる。

軒丸瓦Ⅳ型式の特徴は、本来の形態が形骸化した稚拙で平板な文様表現にある。その祖形となったのは、文様や蓮弁比からⅡ型式である可能性が高く、Ⅲ型式同様に前代の軒瓦の意匠をもとにデザインされたものと考えられる。年代については決め手に欠けるが、丸瓦の接合部が瓦当上面からかなり下がった位置にあることや、組み合う可能性が高い軒平瓦Ⅳ型式の年代観から、8世紀第4四半期～9世紀代と考えられる。

軒平瓦Ⅰ型式の特徴は、瓦当が素文であること、顎面に凹線文を施すことにある。このうち、顎面施文軒平瓦については亀田修一の研究があり、7世紀中葉に出現する畿内非主流派の文様で、西日本では播磨・吉備・伯耆に分布の中心があることが指摘されている¹⁷。また、今里幾次は、播磨の顎面施文軒平瓦の検討から、顎面文様について貼付凸帯→削り出し凸帯→凹線文という変遷を想定している。軒平瓦Ⅰ類は、瓦当が素文であること、粘土板桶巻造りにより製作されていることから、今岡廃寺所用軒平瓦でも古い段階にあると考えるが、顎面に施される文様は指頭による凹線文で、今里編年にてはめると8世紀前葉に位置付けられる。そのため、Ⅰ型式の年代については、7世紀第3四半期～8世紀第1四半期の間にあるという指摘に留めておく。また、Ⅰ型式は製作技法から、顎面に粘土を貼り足すⅠA・ⅠBと、平瓦をそのまま利用するⅠC・ⅠDに細分できる。後者は製作工程が省略された退化形と考えられ、ⅠA・ⅠB→ⅠC・ⅠDという変遷が想定される。

軒平瓦Ⅱ型式最大の特徴は、重弧文の施文に範型を用いている点にある。範型施文による重弧文軒平瓦は、管見の限り奈良県山田寺・檜隈寺の2寺で確認されているのみであるが、両者とも製作は1枚造りで、全体に占める比率も少ないとから、8世紀代の補修用瓦として位置付けられている。Ⅱ型式は、粘土板桶巻造りにより製作されることや、出土比率で軒丸瓦Ⅱ型式と組み合う可能性が高いことから、7世紀第4四半期に位置付けられ、現状では日本最古級の範型施文重弧文軒平瓦と考えられる。また、その製作技法も独特で、これが今岡廃寺建設に伴い独自に発案されたものなのか、他地域からの影響によるものなのか現段階では判断できない。今後、同技法の軒平瓦を捜索していくことで、製作技法の伝播経路、ひいては瓦工人の移動について具体的に追れる材料になるとと考えられる。

軒平瓦Ⅲ型式は、平城宮6663型式を忠実に模倣したもので、美作国府・国分二寺所用軒平瓦と同範ではないが、非常によく似ている。これは亀田修一が指摘するように、国分寺造営に伴い、英多郡の

都司局が瓦工人派遣などの支援を行い、その見返りの一つとして範型が給付された結果、今岡廃寺に導入されたものと考えられる。年代については、上述の理由から8世紀第3四半期に位置付けられる。なお、Ⅲ型式に組み合うと考えられる平城宮6225型式系の軒丸瓦は、今回の調査では出土していない。

軒平瓦Ⅳ型式は、Ⅲ型式を祖形と考えられるが、唐草文はかなり形骸化し、稚拙で平板な文様表現となっている。年代については決め手に欠けるが、備前国分寺所用軒平瓦Ⅱ型式と類似した文様表現や、凹面の布目密度、瓦当両端が狭まる点から、8世紀第4四半期～9世紀代と考えられる。

8. 瓦の組み合わせと編年(第37・38図)

各型式の年代観、出土比率、胎土・焼成・文様構成の類似性から、その組み合わせをまとめたものが、第37図である。I期は今岡廃寺の創建期で、7世紀第3四半期にあたる。創建瓦は朝鮮半島系の

時期	軒丸瓦		軒平瓦
I 期 7 C 第 3 四 半 期		I型式	
II 期 7 C 第 4 四 半 期		II型式	 重弧文系
III 期 8 C 前 半		III型式	
IV 期 8 C 第 3 四 半 期			 III型式
V 期 8 C 第 4 四 半 期 ～ 9 C		IV型式	 IV型式

第37図 今岡廃寺出土瓦編年試案(1/8)

時期	軒丸瓦				軒平瓦				丸瓦			平瓦					
	I	II	III	N	I	II	III	N	I	II	III	IA	IB	IC	IIA~IID	IIE~IIF	III
I期	□				□							□					
II期	□	□			□	□						□	□				
III期		□	□				□					□	□				
IV期				□		□						□	□				
V期			□			□						□	□				
平安後期																□	
中世																	□

*グラフの幅は、瓦全体に占める各型式・類型の相対的な出土量を示す。

第38図 軒瓦と丸瓦・平瓦の対応関係

軒丸瓦I型式で、軒平瓦I型式と組み合う可能性がある。出土量は少なく、創建期の状況を示唆する。II期は7世紀第4四半期で、出土比率から軒丸瓦II型式・軒平瓦II型式の組み合せが想定できる。また、その出土量から今岡廃寺の本格的な造営期と考えられる。III期は8世紀前半で、軒丸瓦III型式が相当するが、組み合う軒平瓦は不明である。IV期は8世紀第3四半期で、美作国分寺の造営協力に伴い、平城宮式軒瓦が導入される。V期は8世紀第4四半期～9世紀代で、焼成・胎土・文様構成の類似から、軒丸瓦IV型式・軒平瓦IV型式の組み合せが想定される。なお、軒瓦と丸瓦・平瓦の組み合わせ、そして丸瓦・平瓦の年代を、その出土量と比率、胎土・焼成・製作技法から想定してまとめたのが第38図である。ただし、良好な一括資料の分析から導き出された結果ではなく、今後のさらなる検証が必要であることを明記しておく。

註

- 1) 次の文献の37A～Cを法隆寺式軒丸瓦とする。 法隆寺昭和資料彙集委員会「法隆寺の至宝」第15巻 小学館 1992年
- 2) 奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」 東京美術 1970年 P354～355
- 3) 平城宮6663削の年代は次の文献による。 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」 XI 1982年
- 4) 美作国府・国分二寺の瓦については次の文献による。 津市教育委員会「美作国分尼寺跡発掘調査報告」 1983年
- 5) 乗岡 実「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」「岡山市の近世寺社建築」 岡山市教育委員会 1996年
- 6) 丸瓦の部分名称・製作技法は次の文献による。 大鷫 肇「丸瓦の製作技術」「研究論集」 IX 奈良国立文化財研究所 1991年
- 7) 計6文献31～33
- 8) 平瓦の部分名称・製作技法は次の文献による。 佐原 真「平瓦種卷作り」「考古学雑誌」第58巻第2号 1972年
上原真人「平瓦製作法の変遷—近世造瓦技術成立の前提—」「今里幾次先生古希記念播磨考古学論集」 1990年
- 9) 伊藤 晃「初期寺院と瓦」「吉備の考古学」 福武書店 1987年
- 10) 濑 肇夫「美作の白鳳・寺院」「津山郷土博物館」 1992年
- 11) 亀田修一「中国・四国地方の法隆寺式軒瓦」「天平の宇佐」「別府大学付属博物館・宇佐市教育委員会」 1996年
- 12) 亀田修一「百済の瓦・新羅の瓦」「仏教美術」 209 毎日新聞社 1993年
- 13) 今里幾次「播磨古瓦の研究」 真陽社 1995年
- 14) 亀田修一「百済軒丸瓦の製作技法」「古代瓦解説」 I 奈良国立文化財研究所 2000年
- 15) 亀田修一「瀬戸内沿岸地域の古代寺院と瓦」「古代王権と交流」 6 名著出版 1995年
- 16) 鬼頭修一「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布」「古代研究」 11 1977年 および註11文献
- 17) 神辺町教育委員会「備後中谷廃寺」 1981年
- 18) (財) 爰媛県埋蔵文化財調査センター「史跡法安寺跡」 1989年
- 19) 古備地城でいつから御型が使用され始めるのか明確ではないが、現状では8世紀以降と考えられる。
- 20) 亀田修一「栗原施文軒平瓦に関する覚書」「近畿佛教古記念考古文集」 1995年
- 21) 今里幾次「龍野市奥村廃寺の古瓦」「奥村廃寺」 龍野市教育委員会 1997年
- 22) 花谷 浩「広がる強重、されど重張」「帝塚山大学考古学研究所研究報告」 III 帝塚山大学考古学研究所 2001年
- 23) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」 11 1981年
- 24) 亀田修一「直から見た国分寺の造営—中国・四国地城—」「考古学ジャーナル」 No.318 ニューサイエンス社 1990年
- 25) 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」 10 「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」 1975年
- 26) 横山 茂「平安京の瓦の布目」「日本古代学論集」「古代学協会」 1979年

第5章　まとめ

2年度にまたがる発掘調査の結果、圃場整備対象地内に設定した各調査区のうち、T-19・20を除くすべての調査区で遺構または遺物包含層を確認した。これより推定される遺跡範囲は、圃場整備対象地東半の南北500m・東西150mの範囲で、その南半に今岡廃寺が所在する(第39図)。なお、今岡廃寺北側に広がる遺跡については、今回の調査で新規に発見された遺跡であることから、地名を冠し今岡遺跡とする。また、今岡廃寺・今岡遺跡の西辺沿いに古代因幡道、東辺沿いに近世因幡往来が通り、圃場整備対象地西半の低位部は、吉野川の氾濫原であったことが判明した。

今岡遺跡は、検出遺構・包含層出土遺物から、縄文時代晚期～中世までの複合集落遺跡であることが判明したが、出土遺物の主体は7～9世紀代のもので、検出遺構の多くも当該期に属することから、その最盛期は古代前半にあったと考えられる。検出遺構のうち特筆されるのが、大形柱穴列である。調査区の制限から2基の柱穴を検出したに留まったが、その特徴から南北に主軸をもつ大形掘立柱建物の一部と考えられる。第40図は、岡山県内における奈良時代の掘立柱建物(側柱建物)の平面規模を図示したもので、大きく3群に分類できる。このうち、A群は国衙・郡衙の正殿・脇殿といった主要建物で、長大な桁行をもつことが特徴である。B群は官衙のほか、館や官衙関連遺跡で検出される大形掘立柱建物で、梁間5m・桁行12m付近に分布の中心がある。C群は一般集落で多く検出される掘立柱建物で、一部B群の領域と重複するが、おおむね梁間4m・桁行6m付近に分布の中心がある。今岡遺跡で検出した大形柱穴列は柱間568cm

で、これを梁間とすると想定される桁行は約14mとなり、B群の領域に属する。白鳳寺院について、山中敏史は郡衙と有機的な関係をもつ郡寺としての性格があることを指摘する。これについて、漆哲夫は美作地域を対象に検討を加え、白鳳寺院に隣接して郡衙あるいは官衙関連遺跡が所在することを明らかにした。また、亀田修一も古代寺院周辺に寺院付属施設や、豪族居館の存在を指摘する。上記の研究成果から、大形柱穴列から想定される大形掘立柱建物の性格について、今岡廃寺を建立した豪族の居館・今岡廃寺の付属施設・英多郡衙の出先機関といった可能性が考えられ、今岡遺跡は今岡廃寺・英多郡衙と有機的な関係をもつ拠点集落であると考えられる。また、円面鏡が5点出土していることも、識字層の存在、ひいては遺跡の公的性を裏付けている。



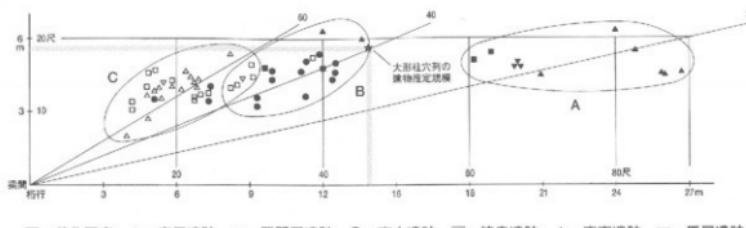
第39図　調査地周辺の遺跡推定範囲(1/7,000)

今岡廃寺の寺域については、地割り・小字の検討に加え、T-15・16で寺城西辺を区画する溝(溝3)、T-21dで寺城南辺を区画する築地塀の雨落溝(溝7・溝8)、2D区で寺城北辺を区画する築地塀の雨落溝(溝11・溝12)を確認したことや、各調査地点毎の瓦出土量(第6表)から、従来からの指摘通り、方一町であることがほぼ確定した。寺城主軸は北辺築地塀に直交するN-3°-Wと考えられ、寺城中軸線はT-21a～dのやや東を通ると想定する。ただし、寺城北東部には低湿地が広がり、北辺築地塀もこれを避けるように屈曲することから、寺城北東隅は矩形に入り込んでいる可能性がある。また、寺城南西部は西に張り出しているが、これは地形を最大限に取り込むためと思われる。開統施設は、南辺・北辺が築地塀で、西辺も未確認ながら築地塀と考えられる。ただし、西辺築地塀に伴うと考えられる溝3は、南北築地塀の雨落溝に比べ深くしっかりとしており、古代因幡道に面した西辺をより厳重かつ莊厳に区画しようとする意図を感じさせる。東辺の開統施設は不明であるが、丘陵がすぐ近くまで迫ることから、これを東片の区画として利用している可能性もある。

伽藍配置は、伽藍そのものを検出していないので予想の域をでないが、南門・西門・回廊の存在が指摘できる。このうち、字「大戸」からT-21d東側に南門が想定でき、T-21dで検出した人頭大の円礫から乱石積基壇と予想される。また、寺城西辺が古代因幡道に面することや、T-15で大量の瓦が出土していることから、T-15北側に西門を想定する。寺城中心部の字「塔ノ元」にあるL字形の水田畦畔は回廊痕跡と考えられ、これに直交して設定したT-21bで検出した雨落溝(溝5・溝6)から、幅4m前後と判明した。回廊はL字形畦畔を寺城中軸線で折り返した、東西約50mの幅で寺城中心部を開統していると考えられ、塔・金堂など主要伽藍は回廊内部に存在すると予想される。また、2D区の造成土巾からは、瓦とともに基壇化粧石と考えられる人頭大の円礫が多数出土していることから、主要伽藍は乱石積基壇であった可能性が高い。

今岡廃寺の建立は軒丸瓦の検討から、7世紀第3四半期に始められたと考えられる。ただし、調査ではそれ以前の遺物も検出しており、寺院造営に伴い既存の施設や集落を移転させた可能性もある。この段階の軒瓦出土量は少なく、小規模な堂宇が建設されていたか、造営が立ち遅れていた状況が予想される。造営が本格化したのは7世紀第4四半期と考えられ、この段階に主要伽藍が建立されたと思われる。8世紀代も小規模な造営(改修)が続けられ、すべての造営が終了したのは9世紀代と考えられる。その後の状況ははっきりしないが、10～11世紀代の土器がわずかながら出土していることから、この時期まで主要な施設は存続していたものと思われる。しかし、寺域内のT-21a溝4で、饗宴後に括廃棄されたと考えられる上器が出土し、その年代が11世紀前半に比定されることや、第2章で述べたように、承徳二年(1098年)、因幡国司の平時範が讃日郷で一泊した際の宿舎に今岡廃寺が使用された可能性もあり、11世紀代には寺院としての性格がかなり変質していたことも考えられる。そして平安時代末期の12世紀代に、寺城北東部の低湿地を埋め立て、今岡廃寺の寺域全域を削平する大規模な造成工事が行われる。この段階に、今岡廃寺の主要伽藍は消滅し、寺城の大半が耕地化されたと考えられる。その後、長大(代)寺が造営されるが、その寺域は「長代寺」・「堂山」といった小字が残る東の丘陵地にあった可能性が高く、今回の調査でわずかに出土した平瓦II類E・Fは、長大寺に用いられた瓦と考えられる。長大寺は今岡廃寺を意識してこの地に造営されたと考えられるが、上述のように時期的には断絶があり、直接的な関係は少ないとと思われる。

最後に、今岡廃寺を造営した氏族の経済基盤と、周辺地域との関係について検討してみたい。今岡廃寺造営を可能にした経済基盤として、第2章で述べた鉄生産力がまず挙げられる。また、今岡廃寺



第40図 岡山県内の奈良時代掘立柱建物の規模(註1文献表4に加筆 一部改変)

第6表 瓦出土量一覧

地 点	重量(kg)
T-1	0.10
T-2	—
T-3	0.20
T-4	0.10
T-5	—
T-6	1.20
T-7	—
T-8	0.10
T-9	0.10
T-10	—
T-11	2.70
T-12	24.00
T-13	20.00
T-14	19.40
T-15	188.00
T-16	17.00
T-17	3.10
T-18	6.60
T-19	—
T-20	—
T-21 a	17.40
T-21 b	55.50
T-21 c	5.00
T-21 d	10.40
1 A 区	0.05
1 B 区	0.10
1 C 区	0.12
1 D 区	—
1 E 区	—
2 A 区	1.70
2 B 区	11.00
2 C 区	76.40
2 D 区	109.80
2 E 区	50.50
2 F 区	—
合 计	620.57

□ : 推定寺域内

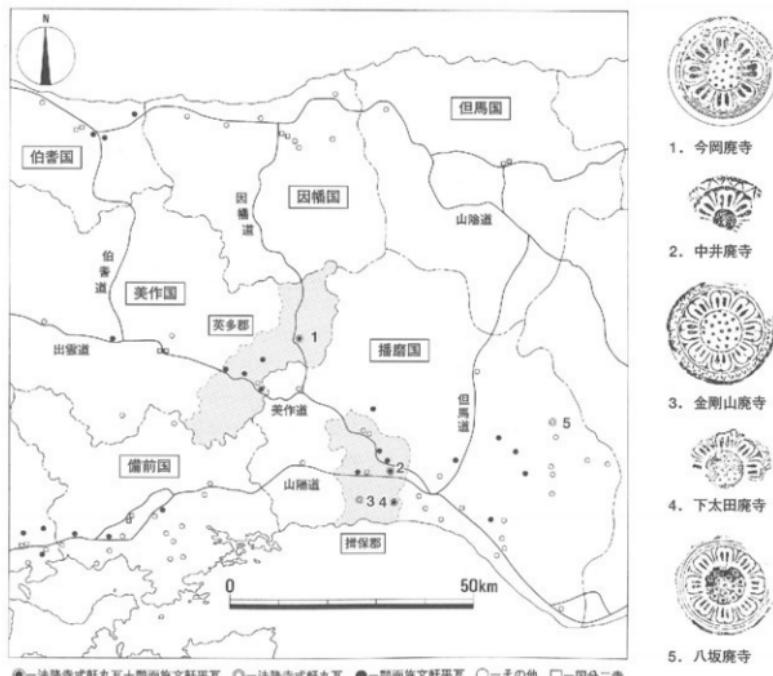


第41図 今岡廃寺推定寺域および推定伽藍配置(1/2,000)

西辺に沿って古代因幡道が整備されることからも明らかのように、この地は陰陽交通の要衝であり、これを掌握していたことも寺院建立を可能にした大きな理由と考えられる。第42図は、古代美作道・因幡道周辺の古代寺院を図示したもので、掛保郡に法隆寺式軒丸瓦が、掛保郡と英多郡に顎面施文軒平瓦が集中して分布している状況が看取できる。今岡廃寺の創建瓦は播磨を経由した朝鮮半島系軒丸瓦で、組み合う可能性がある顎面施文軒平瓦も播磨を介して受容したと考えられる。さらに、本格的な造営期に採用された軒丸瓦II型式も播磨系の法隆寺式軒丸瓦と考えられ、重弧文軒平瓦と組み合うことも播磨からの影響を窺わせる。このように、今岡廃寺の建立氏族は、播磨、より具体的には掛保郡の豪族と強い結び付きがあったことが、軒瓦の様相から想定される。そして、鉄による経済力をもとに、美作道・因幡道のネットワークを通じて技術支援を受け、今岡廃寺を建立したと考えられる。

註

- 1) 岡田 博「官衙」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社 1992年
- 2) 山中敏史「評衡・都衛異辯寺院の性格」「古代地方官衙道路の研究」 塗書房 1994年
- 3) 湊 哲夫「美作の白鳳寺院」 津山郷土博物館 1992年
- 4) 亀田修一「吉備における古代寺院の出現とその背景」「古代寺院の出現とその背景」 稽古文化財研究会 1997年
- 5) 美作道を介した美作と播磨の結び付きは、次の文献でも指摘されている。新宮町教育委員会『栗柄里』1994年



第42図 古代美作道と周辺の古代寺院(1/1,000,000)

1. 調査地遠景①
(西から)



1. 調査地遠景②
(南西から)



3 (左). 今岡庵寺
推定寺域
周辺
(南東から)



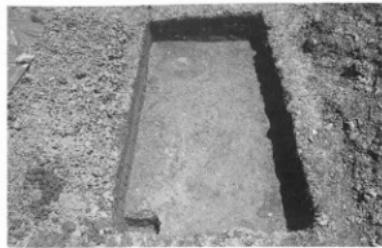
4 (右). 今岡所在
宝蓋印塔



図版2



1. T-6 (南から)



2. T-8 (西から)



3. T-10 (南西から)



4. T-11 (北西から)



5. T-15 (北から)



6. T-16 (西から)



7. T-21 b (北西から)



8. T-21 c (南から)



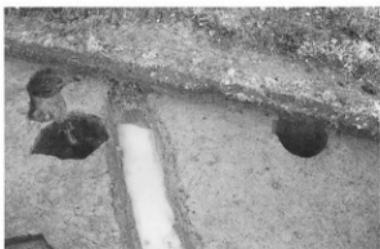
1. 1A・B区（東から）



2. 1C～E区（西から）



3. 柱穴列4（南から）



4. 柱穴列5（南から）

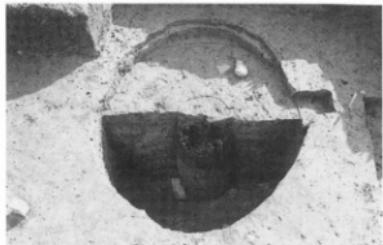


5. 柱列穴6（北から）



6. 土壌7（南西から）

図版 4



1. 大形柱穴列P1土層断面（北から）



4. 大形柱穴列P2土層断面（南から）



2. 大形柱穴列P1完掘状況（北から）



5. 大形柱穴列P2完掘状況（北から）



3. 大形柱穴列P1根石検出状況（北から）



6. 大形柱穴列P2根石検出状況（北から）



7. 大形柱穴列（西から）



8. 大形柱穴列（北から）



1. 2A・B区（西から）



2. 2C区（西から）



3. 2D・E区（西から）



4. 2A～D区（東から）

図版 6



1. 柱穴列 7
(西から)



2. 溝11・12
(西から)



3. 机天板 W1 出土
状況 (東から)



1. 2 D 区土層断面
(西から)

〈第16図 土層断面
D-D'に対応〉

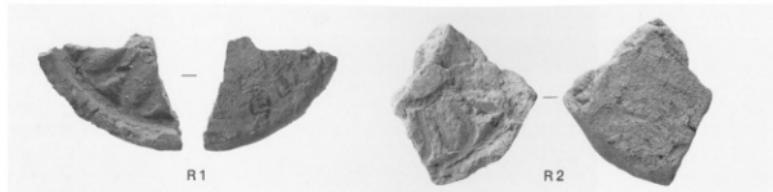


2. 2 E 区連結部材
出土状況(東から)



3. 2 E 区低位部の
状況 (西から)

図版 8



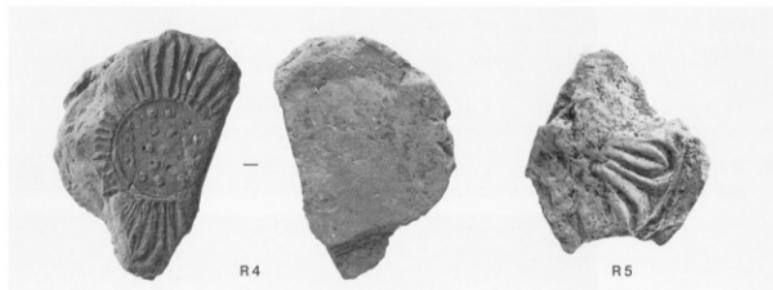
1. 軒丸瓦 I 型式(1/3)



2. 軒丸瓦 II 型式(1/3)



3. II型式文様



4. 軒丸瓦 III型式(1/3)



5. 軒丸瓦 IV型式(1/3)



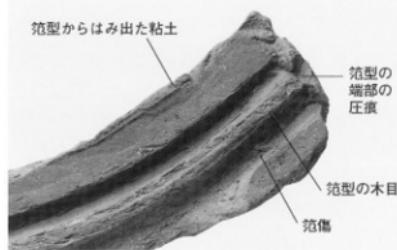
1. 軒平瓦 I 型式 A ~ D (1/3)

2. 軒平瓦 II 型式 A ~ D (1/3)

図版10



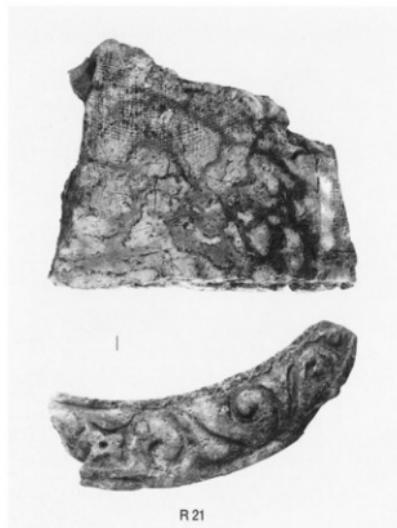
1. 軒平瓦Ⅱ型式の製作技法①(R14)



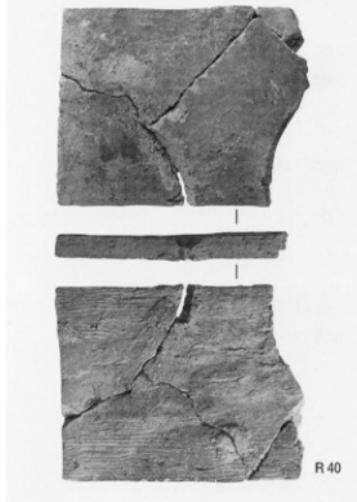
2. 軒平瓦Ⅱ型式の製作技法②(R13)



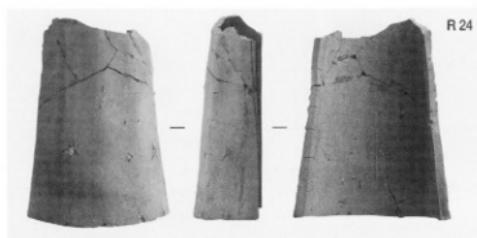
3. 軒平瓦Ⅲ型式(1/2) 4. 軒平瓦Ⅴ型式(1/3)



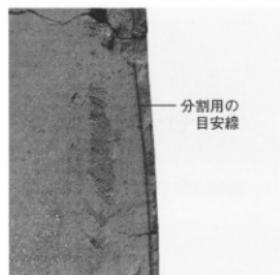
5. 軒平瓦Ⅳ型式(1/3)



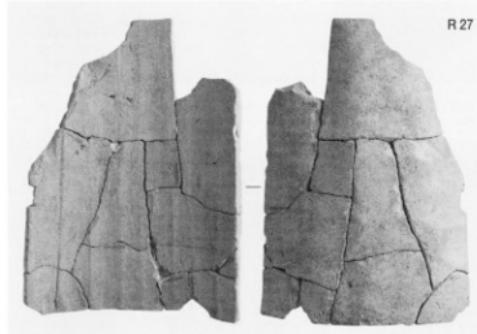
6. 塚(1/3)



1. 丸瓦 I 類A (1/6)



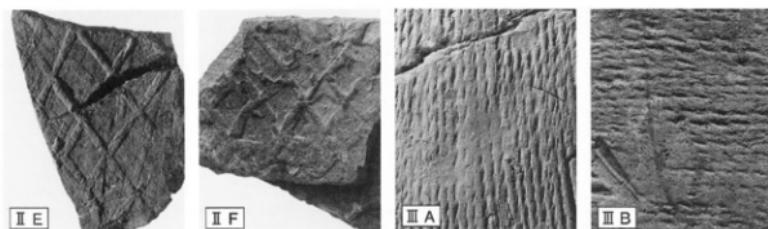
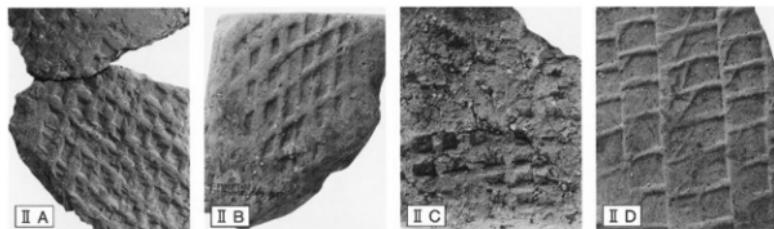
2. 丸瓦 I 類A の製作技法



3. 平瓦 I 類A (1/6)



4. 平瓦 I 類A の製作技法



5. 平瓦 II・III 類 印板压痕(1/2)

図版12

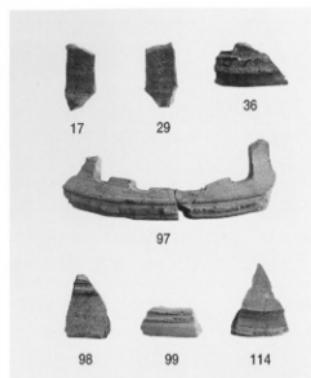


1. 墨書き土器「譲」(1/3)

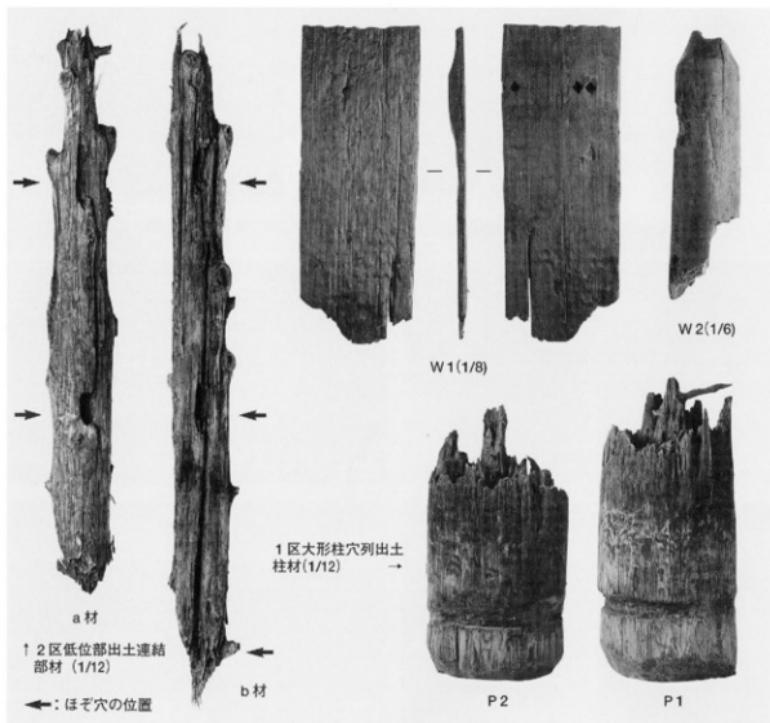
2. 「譲」の赤外線写真



3. 瓦塔(1/2)



4. 円面鏡 (1/3)



↑ 2区低位部出土連結部材 (1/12)

←: ほぞ穴の位置

5. 木製品・柱材・連結部材(1/6・1/8・1/12)

報告書抄録

ふりがな	いまおかはいじ					
書名	今岡庵寺					
副書名	大原町今岡地区開場整備事業に伴う発掘調査					
卷次						
シリーズ名	大原町埋蔵文化財発掘調査報告					
シリーズ番号	2					
編著者名	佐藤寛介					
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター					
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3				TEL 086-293-3211	
発行機関	大原町教育委員会					
所在地	〒707-0492 岡山県英田郡大原町占町1709				TEL 08687-8-4851	
発行年月日	2002年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 調査原因
いまおかはいじ 今岡庵寺	おかやまけん 岡山県	33641	—	35° 50'	134° 19'	1998.4. 20~5.21
	あいだぐん 英田郡			70°	80°	1999.10. 18~12.6
	おおはらちょう 大原町					
	いまおか 今岡					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
今岡庵寺	寺院跡	縄文時代~中世	柱穴列・溝・ 土壙	縄文土器・弥生 土器・土師器・ 須恵器・土師質 土器・備前焼・ 勝間田焼・瓦・ 瓦塔・円面鏡・ 木製品・柱材・ 建築部材	○寺域北辺・南 辺・西辺を区 画する可能性 のある溝 ○古代の大形柱 穴列 ○法隆寺式軒丸 瓦 ○瓦塔 ○墨書き土器	

大原町埋蔵文化財発掘調査報告 2

今岡廃寺

町営大原町今岡地区圃場
整備事業に伴う発掘調査

2002年3月15日 印刷

2002年3月31日 発行

編集 岡山県古代古墳文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 大原町教育委員会
英田郡大原町古町1709

印刷 西尾総合印刷株式会社

